(9) 宇南遺跡

目　　次

Ⅰ．遺跡の立地と周辺の遺跡 …… 503
1．遺跡の立地 …… 503
2．周辺の遺跡 …… 503
Ⅱ．調査の方法と経過 …… 505
1．調査の方法 …… 505
2．調査の経過 …… 505
Ⅲ．発見された遺構と遺物 …… 506
1．基本層位 …… 506
2．竪穴住居跡 …… 509
3．掘立柱建物跡 …… 528
4．土壙 …… 530
5．溝 …… 534
6．井戸跡 …… 535
7．遺構以外からの出土遺物 …… 535
Ⅳ．遺構、遺物に関する考察 …… 536
1．出土土器の分類 …… 536
2．出土土器の組み合わせとその年代 …… 538
3．遺構の年代 …… 539
Ⅴ．遺跡の構成 …… 540

調 査 要 項

遺 跡 名：宇南遺跡

遺跡記号：ＥＵ（宮城県遺跡地名表登載番号：49020）

所 在 地：宮城県栗原郡志波姫町八樟字宇南

調査対象面積：約:5,500 ㎡（発掘面積も同じ）

調査期間：昭和53年4月24日～昭和53年5月31日

調 査 員：宮城県教育庁文化財保護課

技術主査　早坂春一

技　　師　遊佐五郎　手塚均

嘱　　託　熊谷幹男

Ⅰ．遺跡の立地と周辺の遺跡

1. 遺跡の立地

宇南遺跡は栗原郡志波姫町八樟宇南に所在し、志波姫町役場から西南方約２㎞の地点に位置している。

遺跡が所在する志波姫町は宮城県の北部に位置する。県北部の地形をみると、西側を奥羽山地帯、東側を北上山地帯が南北に走っており、その間に奥羽山麓と中部低地帯が広がっている。奥羽山麓は奥羽山地帯から東に派生したなだらかな丘陵で、磐井丘陵、築館丘陵などを含む。中部低地帯には北上川、江合川、鳴瀬川とその支流が流れ、流域には段丘、扇状地、沖積地が形成されている。

志波姫町は地形的にみると、磐井丘陵と築館丘陵に囲まれた扇状地性低地（迫川低地）の中にある。町の北側には一迫川によって形成された沖積地が広がっており、南側には築館丘陵から派生した標高 25～30ｍの平坦な台地が北東へのびている。この台地は北側の沖積地に向って数多くの舌状にのびた台地となって張り出している。これらの中で、八樟付近から北側に向って張り出す標高 25ｍの舌状台地がある。この舌状台地の先端部は、西側を一迫川の沖積地で、北、東、南側は幅 20ｍの湿地（標高 18～19ｍ）で囲まれており、その内側は一段高い標高 24～25ｍの平坦部となっている。宇南遺跡はこの平坦部に立地し、遺跡の範囲は周辺の湿地までおよぶ。

2. 周辺の遺跡

本遺跡の立地する平坦な台地や沖積地には現在まで数多くの遺跡が確認されている。（第１図）時代別にみると、次のような遺跡がみられる。

縄文時代の遺跡には、土壙が発見されている鶴ノ丸遺跡や竹ノ丸遺跡・刈敷治郎遺跡などがある。

弥生時代の遺跡には、西館遺跡がある。

古墳時代の遺跡には、方形周溝墓・円形周溝・竪穴住居跡が発見されている鶴ノ丸遺跡や竪穴住居跡が発見されている御駒堂遺跡・山の上遺跡・佐野遺跡や城内古墳がある。

奈良～平安時代の遺跡には、竪穴住居跡が発見されている糠塚遺跡・御駒堂遺跡・大門遺跡や、窯跡の狐塚遺跡がある。

鎌倉時代～江戸時代の遺跡には、堀・掘立柱建物跡・井戸が発見されている鶴ノ丸館や日良館・刈敷館・掘口館・山王館などの館跡がある。これらの館跡の周囲には中世～近世の板碑が発見されている。

(国土地理院発行1/50,000「築館」を複製)

番号	遺跡地名表番号	遺跡名	9	5	城内古墳	19	13	山ノ上遺跡	金成町		
志波姫町			10	8	山王館跡	築館町			28	3	姉歯横穴古墳群
1	20	宇南遺跡	11	12	糠塚遺跡	20	5	嘉倉貝塚	29	18	上創跡
2	15	鶴ノ丸遺跡	12	4	荒町遺跡	21	6	玉蔵台遺跡	30	37	下館跡
3	14	御駒堂遺跡	13	1	竹ノ内遺跡	22	28	照越台遺跡	31	19	姉歯松古墳
4	16	日良館跡	14	11	大門遺跡	23	47	荻沢城跡	32	16	佐野遺跡
5		阿久戸川古戦場	15	18	八幡館跡	24	18	鰻沢遺跡	若柳町		
6	19	刈敷館跡	16	3	狐塚遺跡	25	37	佐内屋敷遺跡	33	26	平館跡
7	17	刈敷袋遺跡	17	6	蓬田館跡	26	7	伊治城跡	34	8	原貝塚
8	2	刈敷治郎遺跡	18	10	熊谷遺跡	27	44	天神城跡	35	1	敷味貝塚

第1図 周辺の遺跡

Ⅱ．調査の方法と経過

1. 調査の方法

本遺跡は航空写真の観察によって、台地の南、東側の水田部分が掘状に巡ることが指摘され、館跡の可能性があるとされたものである。このため、東北自動車道にかかる台地上および縁辺部分全域を調査の対象とした。

地区設定は東北自動車道の中心杭ＳＴA502＋40 とＳＴA502＋60 を選び、両者を結ぶ線およびこれに直交する線を基準線として、ＳＴA502＋40 を原点として3m単位のグリッドを設定した。地区名は東西方向をアルファベット、南北方向をアラビア数字で表わし、両者の組み合わせで呼ぶことにし、原点の北東の区をＪ51 区と定めた。調査はまず探索トレンチでの調査を行ない、遺構の存在が予想される部分について全面発掘するという方法をとった。検出された遺構は、1/20 の平面図、断面図を作成した。

南北の基準線は座標北より1°西に偏する。なお文中で使用する北は全て座標北である。

2. 調査の経過

台地南側の掘状に巡る一段低い部分の調査を昭和50年12月に行っているが、本格的な調査は昭和53年4月24日に開始した。まず調査対象範囲内における基本的な層位および遺構の分布状況を把握する目的で、7 グリッドを 1 単位とした探索トレンチをＪ列、41 列、51 列、61 列に設定し、調査を進めた。その結果、調査区の北側では開田の際地山面下まで削平を受けており、表土の下がすぐ地山になっていること、そして西側部分は更に深く地山が削られていることが明らかになった。また、調査区南側では西から浅い谷が入りこんでいることが確認された。これらをふまえて、調査は東北自動車道路線敷のうちほぼ東側半分にあたる約6500㎡を全面発掘した。その結果発掘区全域から住居跡、ピット群、土壙、溝、井戸跡などの遺構や、土師器、須恵器などの遺物が発見された。

4月下旬にはほぼ遺構の検出を終え、遣り方設定、平面実測に入った。5月20日、調査の途中であったが遺跡の性格がほぼ明らかになったので現地説明会を開催した。その後継続して実測と写真の撮影を行なった。発掘調査のいっさいを終了したのは5月29日である。

Ⅲ．発見された遺構と遺物

1．基本層位

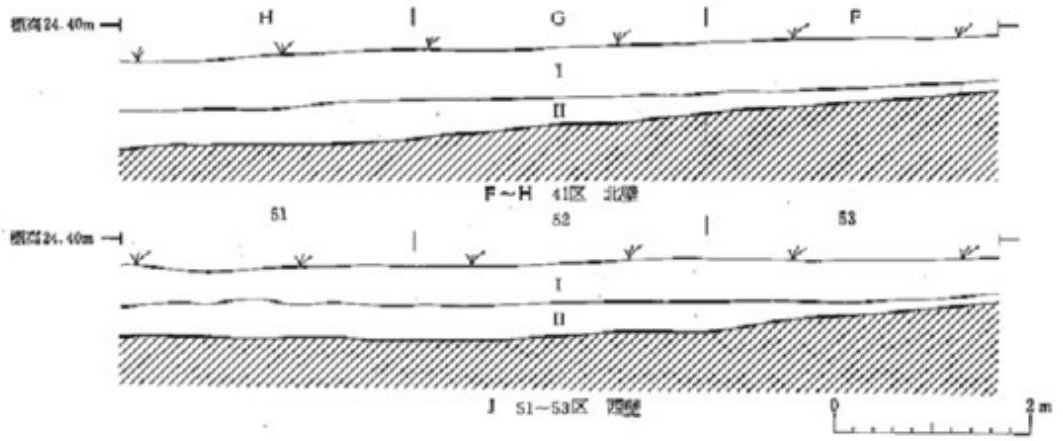
遺跡は台地平坦部に立地しているが、台地の西端部分をほぼ南北に走る調査区では幾分南に傾斜しており、また調査区中央部分では西から浅い谷が入り込む地形となっている。調査区内では表土から地山まで２枚の層が認められた（第２図）。以下各層の状況分布、遺構との関係などについて述べる。

〈第Ⅰ層〉

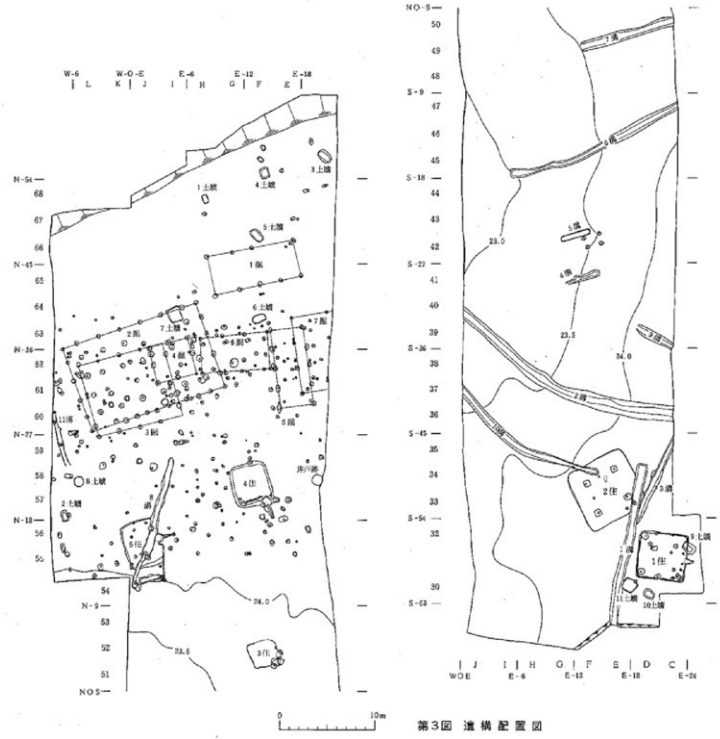
第Ⅰ層はシルトで構成される層である。この層は表土であり、草木根や耕作などによる攪乱が著しい。全体的な色調は黒褐色（7.5YR$^{2}/_{3}$）である。層は調査区全域に広がっており、厚さも40～50㎝とほぼ一定している。遺物はわずかであるが、須恵器片が出土している。

〈第Ⅱ層〉

第Ⅱ層は第Ⅰ層と同じくシルトで構成される。全体的な色調は黒色(7.5YR$^{2}/_{1}$)である。攪乱は少ないが、調査区北側では開田の際の削平が地山までおよんでいる部分が多く、55区以北では第Ⅰ層の下がすぐ地山となっている。層の厚さは地区によって異なり台地縁辺および、西から入り込む浅い谷の部分に厚く堆積している。調査区東端では数㎝、最も厚い部分で50㎝である。第３住居跡は第Ⅱ層上面で確認されている。



第２図　基　本　層　位


W-6
W-O-E
E-6
E-12
E-18
L
K
J
I
H
G
F
E
N-54
N-45
N-36
N-27
N-18
N-9
NOS
1土壙
4土壙
3土壙
5土壙
1掘
6土壙
7土壙
2掘
4掘
6掘
7掘
11掘
3掘
5掘
8土壙
2土壙
4住
5住
3住
24.0
23.5
NO-S
S-9
S-18
S-27
S-36
S-45
S-54
S-63
7掘
6掘
5掘
4掘
23.0
23.5
24.0
2掘
1掘
2住
3掘
9土壙
1住
11土壙
10土壙
J
I
H
G
F
E
D
C
WOE
E-6
E-12
E-18
E-24
0
10m

第3図 遺構配置図

2. 竪穴住居跡

第1住居跡

〔確認面・重複〕地山面で確認された。北東部において第9土壙を切っている。

〔平面形・規模〕平面形は隅がやや丸みをもつ方形で、長軸約4.9m、短軸約5.1mである。

〔堆積土〕3層認められた。第1層は住居跡全体が削平を受けているので住居跡中央部にうすく残っているにすぎない。第2層は住居跡の中央部にむけて傾斜しながら住居跡のほぼ全域に堆積している。住居跡中央部では床面上に堆積している。第3層は住居跡壁から中央部にむけて傾斜しながら壁沿いに堆積している。

〔壁〕地山を壁としている。ほぼ垂直に立ち上がり、残存する壁の高さは最もよく残っている東辺で約30㎝、最も削平を受けている南辺でも約10㎝である。

〔床〕地山を床としている。ほぼ平坦である。

〔柱穴〕住居跡内で22個のピットが検出された。このうちピット10は住居跡堆積土を掘り込んだピットであり、住居跡より新しい。他は全て床面上で検出された。そのうち柱痕跡が確認されたのはピット5、6、7、8、9、16である。位置、深さからみてピット1、6、9、16の4個が柱穴と考えられる。

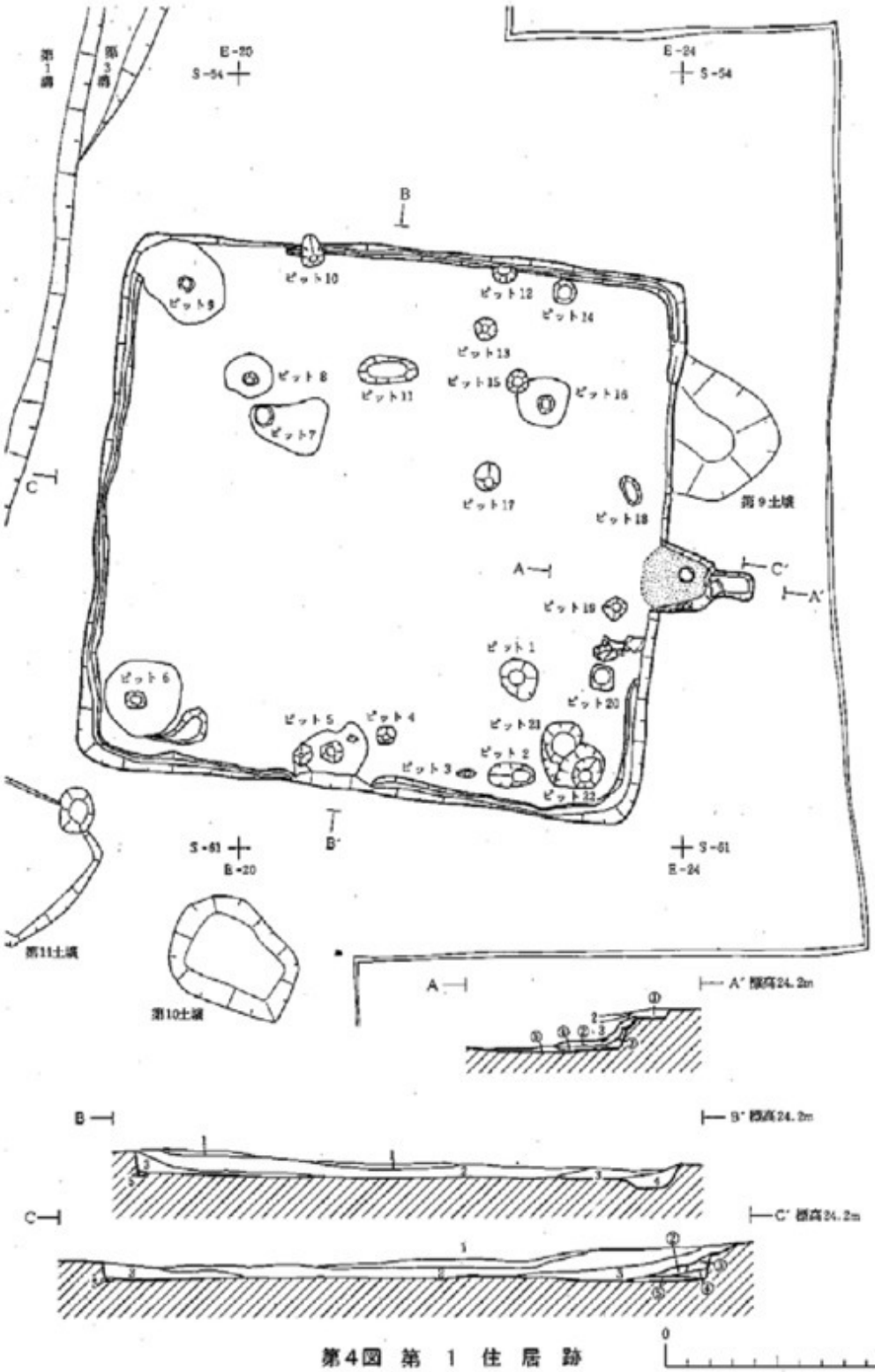
〔周溝〕周溝はカマドがとりつく東辺中央部と北西隅を除き認められる。断面はU字形を呈し、各辺においては住居壁に沿い、底面幅2～5㎝、床面からの深さは2～4㎝である。

〔カマド〕東辺中央部に位置している。燃焼部・煙道部ともに住居壁外の地山を掘り込んで構築されている。天井部は崩れており崩壊土が燃焼部内に堆積している。燃焼部底面および側壁は火熱を受けて赤変している。中央部には土師器甕が倒立状態ですえられており、支脚として使用されたと思われる。また、燃焼部奥壁および右側壁には土師器甕の破片が貼り付けられていた。

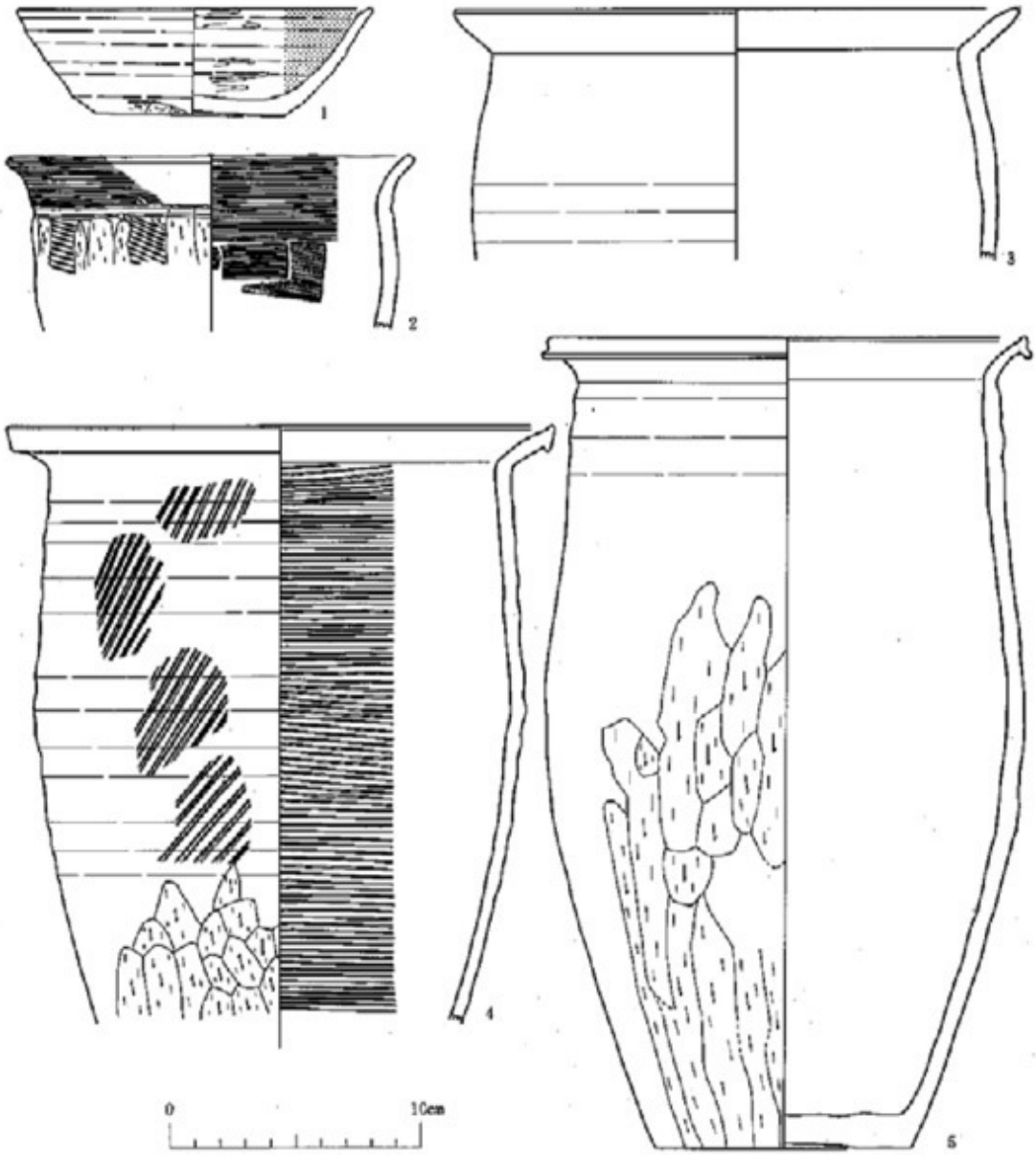
〔貯蔵穴〕南東隅で検出された2個のピット（ピット21、22）は堆積土中に焼土、木炭が混入しており、遺物の出土も多い。

第1住居跡堆積土

層No.	土色	土性	備考
1	黒褐色 (7.5YR3/2)	シルト	にぶい橙色 (7.5YR6/4) が混入。
2	暗褐褐色 (7.5YR3/4)	シルト	
3	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	
4	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	地山粒と木炭が混入。ピット5掘り方埋土
5	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	周溝内堆積土
①	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	カマド内堆積土
②	にぶい褐色 (7.5YR5/3)	シルト	天井崩落土 〃
③	黒褐色 (7.5YR3/2)	シルト	天井崩落の粘土ブロックを含む 〃
④	暗褐褐色 (7.5YR3/4)	シルト	〃 〃
⑤	黒褐色 (7.5YR3/2)	シルト	焼土・炭化物を含む 〃

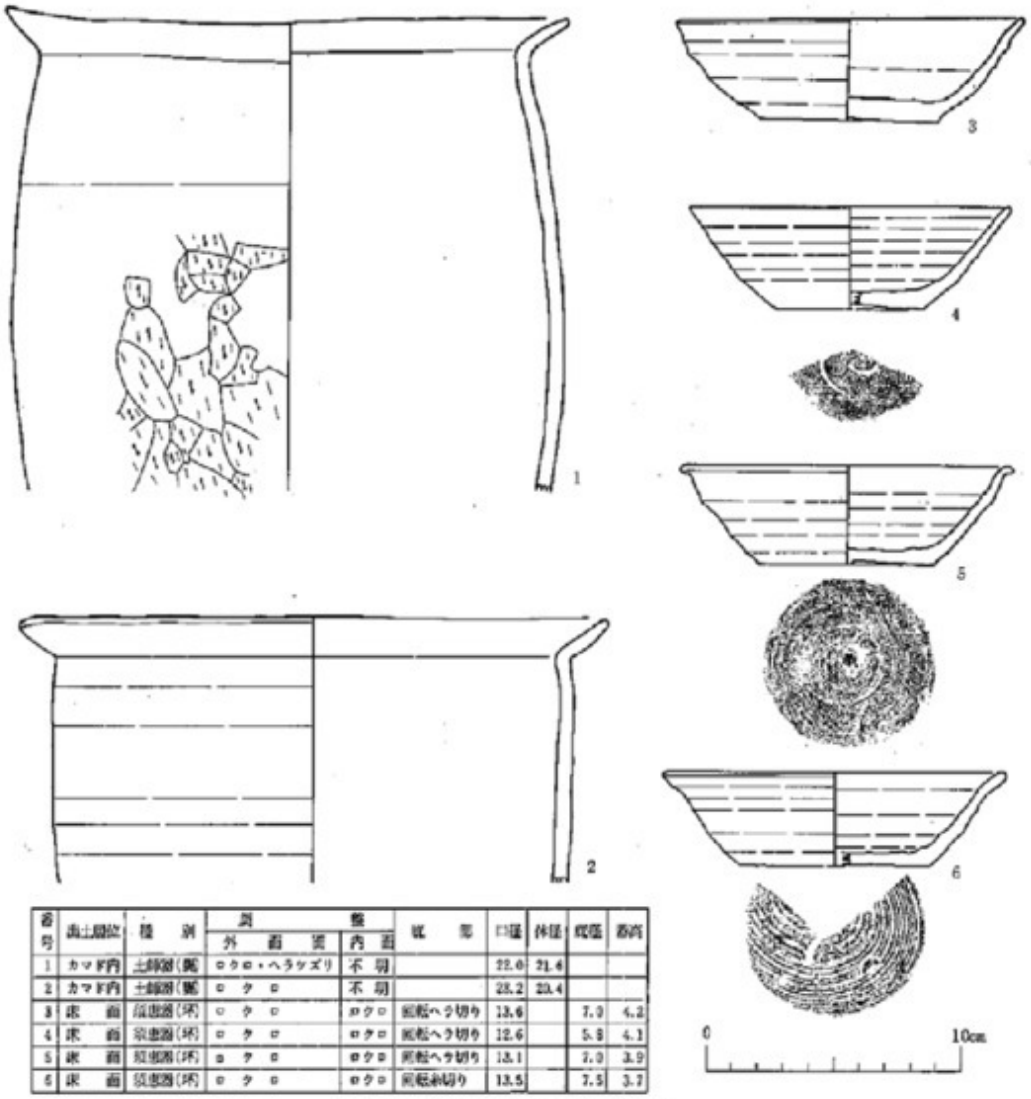

第1溝
第3溝
E-20
S-54
E-24
S-54
B
ピット10
ピット12
ピット14
ピット9
ピット13
ピット8
ピット11
ピット15
ピット16
ピット7
C
ピット17
ピット18
第9土壙
A
C'
A'
ピット19
ピット1
ピット6
ピット20
ピット5
ピット4
ピット21
ピット2
ピット3
ピット22
B'
S-61
E-20
S-61
E-24
第11土壙
第10土壙
A
A' 標高24.2m
B
B' 標高24.2m
C
C' 標高24.2m
0
2m

第4図 第 1 住 居 跡



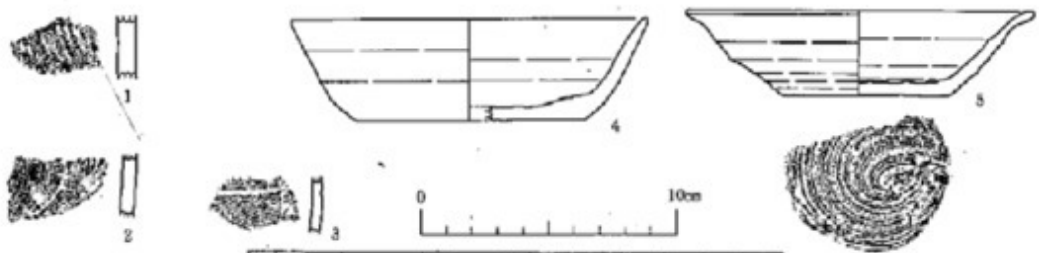
番号	出土層位	種別	器形 外面	器形 内面	底部	口径	体径	底径	器高
1	カマド内	土師器(杯)	ロクロ・ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	回転糸切り・手持ちヘラケズリ	14.1		7.4	4.6
2	カマド支脚	土師器(甕)	横ナデ・胴毛目 粗いケズリ	横ナデ・ヘラナデ		16.3	14.7		
3	カマド内	土師器(甕)	ロクロ	ロクロ		22.5	21.0		
4	床面	土師器(甕)	平行タタキ目 ロクロ・ヘラケズリ	ロクロ・胴毛目		21.8	19.6		
5	カマド内	土師器(甕)	ロクロ・ヘラケズリ	ロクロ	ナデ	19.6	19.1	10.2	32.5

第５図　第１住居跡出土遺物（1）



番号	出土層位	種別	調整 外面	調整 内面	底形	口径	体径	底径	器高
1	カマド内	土師器(甕)	ロクロ・ヘラケズリ	不明		22.0	21.6		
2	カマド内	土師器(甕)	ロクロ	不明		28.2	23.4		
3	床面	須恵器(坏)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切り	13.6		7.9	4.2
4	床面	須恵器(坏)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切り	12.6		5.8	4.1
5	床面	須恵器(坏)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切り	13.1		7.0	3.9
6	床面	須恵器(坏)	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	13.5		7.5	3.7

第６図　第１住居跡出土遺物 (2)



番号	出土層位	種別	調整 外面	調整 内面	底形	口径	体径	底径	器高
4	第２層	須恵器(坏)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切り	14.0		8.5	4.0
5	第３層	須恵器(坏)	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	13.6		6.6	3.4

第７図　第１住居跡堆積土出土遺物

第1住居跡ピット

ピットNo.	土色	土性	備考	深さ	ピットNo.	土色	土性	備考	深さ
1	黒褐色（10YR3/1）	シルト		23	10	暗褐色（10YR3/3）	シルト	地山粒混入	7
2	黒褐色（10YR3/1）	シルト	地山粒混入。	8	11	黒褐色（10YR3/1）	シルト	炭化物、地山粒混入	10
3	黒褐色（10YR3/1）	シルト		4	12	暗褐色（10YR3/3）	シルト		4
4	黒褐色（10YR3/1）	シルト		5	13	暗褐色（10YR3/3）	シルト	地山ブロック・粒が混入	20
5	暗褐色（10YR3/3）	シルト	（柱穴）	13	14	黒褐色（10YR3/1）	シルト	炭化物混入。地山粒少量混入	22
	黒褐色（10YR3/1）	シルト	（掘り方）地山粒。炭化物が混入		15	黒褐色（10YR3/1）	シルト		20
6	黒褐色（10YR3/1）	シルト	（柱穴）	29	16	黒褐色（10YR3/1）	シルト	（柱穴）	26
	暗褐色（10YR3/3）	シルト	（掘り方）地山ブロックが多量混入			黒褐色（10YR3/1）	シルト	（掘り方）地山ブロックが混入	
7	黒褐色（10YR3/1）	シルト	（柱穴）地山粒混入	35	17	暗褐色（10YR3/3）	砂質シルト		22
	暗褐色（10YR3/3）	シルト	（掘り方）地山ブロック・粒が混入		18	黒褐色（10YR3/1）	シルト	炭化物混入	12
8	黒褐色（10YR3/1）	シルト	（柱穴）	20	19	暗褐色（10YR3/3）	シルト	焼土物混入	9
	暗褐色（10YR3/3）	シルト	（掘り方）地山ブロックが混入		20	黒褐色（10YR3/1）	シルト	炭化物混入	5
9	黒褐色（10YR3/1）	シルト	（柱穴）	23	21	黒褐色（10YR3/1）	シルト	炭化物・焼土混入	11
	暗褐色（10YR3/3）	シルト	（掘り方）地山ブロックが混入		22	黒褐色（10YR3/1）	シルト	炭化物・焼土混入	19

〔出土遺物〕

住居に伴うと考えられる遺物には、カマドの支脚として使用されたと思われる土師器甕、カマド内出土の遺物・床面出土の遺物がある。

土師器

坏　製作の際ロクロを使用している。底部切り離しは回転糸切り技法で底部および体部下端には手持ちヘラケズリによる再調整が加えられている。器面調整は外面はロクロ調整、内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている。（第5図1）

甕　体部下半を欠くものもあるが、いずれも口径より器高が大きく、長胴形をなすものである。最大径が口縁にあるもの（第5図2、3、4、第6図1、2）、体部最大径と口縁径がほぼ同じもの（第5図5）がある。カマドの支脚として使用されたと思われるもの（第5図2）を除いてはいずれも製作の際ロクロを使用しており、器面調整は体部外面にヘラケズリが施されるもの（第5図5、第6図1）、平行タタキ目、ヘラケズリが施されるもの（第5図4）がある。第5図4は体部内面に刷毛目が施されている。第5図2はカマドの支脚として使用されたと思われる甕で、小形のものである。体部下半を欠いている。口縁部は幾分外反する。頸部に沈線が巡る。器面調整は口縁部は内外面とも横ナデ、体部外面には刷毛目の後軽いケズリが施されており、一部は沈線内にもおよんでいる。体部内面はヘラナデが施されている。

須恵器

坏　底部から口縁部までほぼ直線的に外傾するもの（第6図3、4）、口縁部が幾分外反するもの（第6図5、6）がある。底部切り離し技法は回転ヘラ切りのもの（第6図3、4、5）回転糸切りのもの（第6図6）があり、いずれも再調整は加えられていない。

堆積土出土遺物（第7図）

弥生土器

3点出土している。いずれも体部の小破片であるため器形はわからない。第7図1は縄文（R

L）が施文されているものである。条は縦位に走る。第７図２はやや粗い撚糸文が縦位に施文され、細く、断面Ｖ字形を呈する沈線による区画文がみられるものである。第７図３は細かな撚糸文が横位および斜位に施文され、やや太くて断面が丸味をもつ沈線による区画文がみられる。区画内はいずれも磨消されている。

須恵器

坏　体部から口縁部にかけて直線的に外傾するもの（第７図４）と口縁部が外反するもの（第７図５）がある。底部切り離し技法は５が回転糸切りであり、４は回転ヘラ切りである。いずれも再調整は加えられていない。

第２住居跡

〔確認面・重複〕地山面で確認された。住居跡南東部を南北に走る第１、３溝によって切られており、また、住居跡北側から北西方向に走る第10溝によっても切られている。いずれも溝底面は住居跡床面下におよんでいる。

〔平面形・規模〕平面形は隅丸方形で、長軸約6.8m、短軸6.7mの規模である。

〔堆積土〕４層認められた。第１層は住居跡全体が削平を受けているので、住居跡中央部にうすく残っているにすぎない。第２層は住居跡の中央部にむけて傾斜しながら壁沿いを除く住居跡のほぼ全域に堆積している。第３層は住居跡床面上にうすく堆積しており、その範囲は第２層よりややせまい。第４層は壁沿いに堆積している。

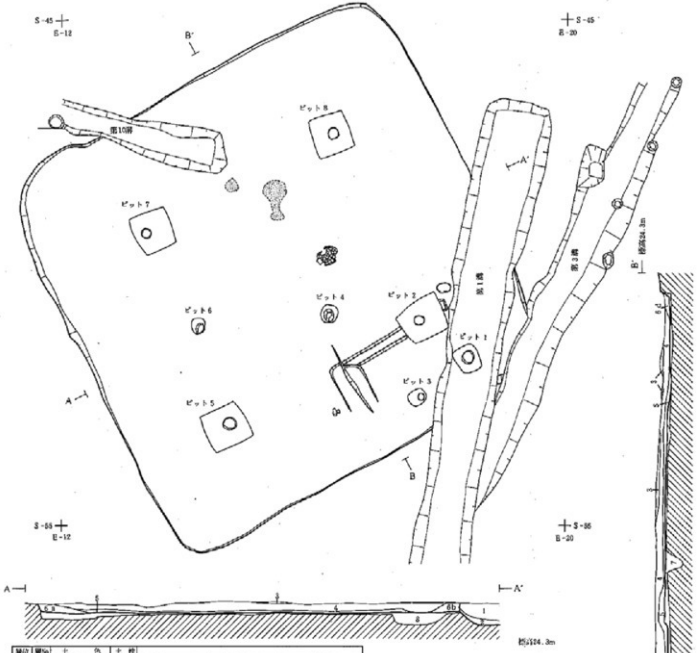
〔壁〕地山を壁としている。ほぼ垂直に立ち上がる。残存壁高は最も高い南辺で22㎝、最も削平を受けている北辺、西辺では６㎝の部分がある。

〔床〕住居跡中央部は地山をそのまま床としているが、北辺中央部を除く周縁部は幅100㎝深さ約15㎝の住居跡掘り方埋土上面を床面としている。床面は全体的に固くしまっている。ほぼ平坦であるが北東、北西隅周辺は幾分低い。南東部において、幅約10㎝、高さ約２㎝の東西に走る帯状の高まりが検出された。この高まりはピット２の掘り方埋土上にも続くことから、住居跡に伴う施設の可能性が強い。高まりから南側では床面が他より７～９㎝低い。

〔柱穴〕住居跡内に８個のピットが認められた。このうちピット２、５、７、８は対角線上に位置し、いずれも平面形が方形で大きさが一辺60㎝内外の掘り方をもつ。この４個が柱穴と考えられる。また、ピット１は第１溝底面で確認されたが、本住居跡に伴う可能性がある。ピット３と組み合うものかも知れない。

〔周溝〕認められなかった。

〔炉〕床面中央部やや北寄りに焼面が２ケ所検出された。大きさが60×40㎝の不整形のものと20×20㎝の円形のものである。火熱は最も厚い所で約６㎝におよんでいた。本住居跡の炉と考えられる。



層位	層No.	土色	土性	
	1	黒褐色(10YR 3/2)	シルト	地山の細粒が少量混入、焼土粒が少量混入、第1溝埋積土
	2	黒褐色(10YR 3/2)	シルト	地山粒が多量混入、第1溝埋積土
1	3	黒褐色(10YR 3/2)	シルト	
2	4	黒褐色(10YR 3/2)	シルト	地山ブロック・粒が多量混入
3	5	黒褐色(10YR 3/2)	シルト	焼土ブロック・粒が多量混入、木炭粒が少量混入
4	6 a	黒褐色(10YR 3/2)	シルト	地山粒が少量混入
	6 b	暗褐色(10YR 3/2)	シルト	地山粒・焼土粒が少量混入
	6 c	黒褐色(10YR 3/2)	シルト	地山粒が多量混入
	6 d	黒褐色(10YR 3/2)	シルト	地山粒が多量混入
	7	黒褐色(10YR 3/2)	シルト	地山ブロックが多量混入、ピット4掘り方埋土
	8	黒褐色(10YR 3/2)	シルト	地山ブロックが多量混入、住居跡掘り方埋土

第8図 第2住居跡

第2住居跡ピット

ピット No.	出土	出土	備考	図	ピット No.	出土	出土	備考	図
1	黒褐色(7.5YR角)	シルト	(柱穴) 本炭が多量混入	23	5	黒褐色(10YR角)	シルト	(柱穴)	24
	褐灰褐色(7.5YR角)	シルト	(掘り方) 本炭・焼土が多量混入。地山ブロックが少量混			黒褐色(10YR角)	シルト	(掘り方) 地山ブロックが多量混入	
2	黒褐色(10YR角)	シルト	(柱穴)	33	6	黒褐色(10YR角)	シルト	(柱穴)	37
	黒褐色(10YR角)	シルト	(掘り方) 地山ブロックが多量混入			黒褐色(10YR角)	シルト	(掘り方) 焼土粒が微量混入。地山ブロックが多量混入	
3	黒褐色(10YR角)	シルト	(柱穴)	15	7	黒褐色(10YR角)	シルト	(柱穴) 本炭粒が微量混入	25
	黒褐色(10YR角)	シルト	(掘り方) 地山ブロックが混入。			黒褐色(10YR角)	シルト	(掘り方) 地山ブロックが多量混入	
4	黒褐色(10YR角)	シルト	(柱穴)	22	8	黒褐色(10YR角)	シルト	(柱穴) 本炭粒・地山粒・焼土粒が混入	43
	黒褐色(10YR角)	シルト	地山ブロックが多量混入			黒褐色(10YR角)	シルト	(掘り方) 地山ブロックが多量混入	

〔出土遺物〕（第9、10図）

住居に伴うと考えられる遺物は床面出土の土師器台と甕である。

土師器

器台（第9図1）ほぼ完形である。受け部は口縁部までゆるやかに立ち上がる皿状を呈する。受け部と脚部との間は貫通しており内面にしぼり目が残る。脚部は外反しながら広がる円錐状を呈し、裾部は広く開き端部は幾分反り上がる。脚部には4個の円窓をもつ。器面調整は脚部外面上半にヘラミガキ、脚部内面に一部ヘラナデの痕跡が認められるが、他は磨滅が著しく、観察できない。

甕（第9図2）口径が器高よりも小さい。最大径は体部のほぼ中央にあり、球形に張り出している。頚部で「く」字にくびれ、口縁部が外反気味に立ち上がるものである。底部は広縁が張り出している。器面調整は口縁内外とも横ナデが施され、体部外面は刷毛目が施されている。体部内面ははっきりしない。積上痕跡が明瞭に観察される。尚、図示できなかったが、複合口縁をもつ甕の口縁部破片が床面から出土している。

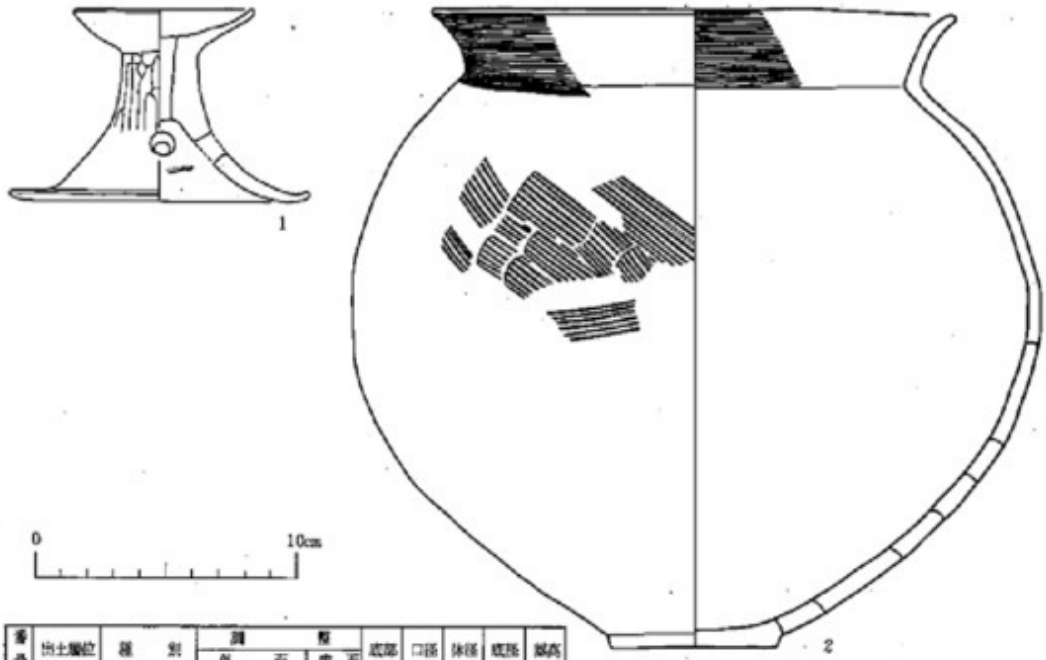
堆積土出土遺物（第10図）

弥生土器（第10図2）

壺形と思われる口縁部破片であり口縁下端ほど器壁が厚くなっており、複合口縁状を呈する。粗い撚糸文（L）が横位に施文され、口縁下端には縄文原体の末端圧痕と半截竹管と思われる工具による刺突文が横位に巡る。

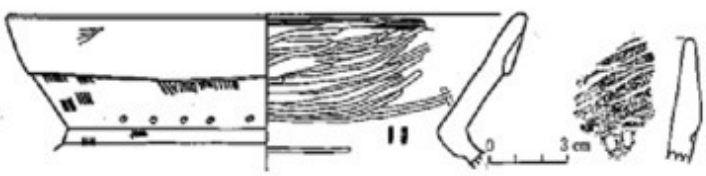
土師器

坏（第10図2）口頚部のみの破片である。頚部で「く」字にくびれ、口縁部が外傾するもので、体部は球形に張るものと思われる。口縁部外面は粘土紐を貼付して複合口縁をつくり出している。器面調整は外面が刷毛目を施した後複合部をつくり出し、ヘラミガキを施している。内面は口縁端部に横ナデ、以下ナデを施した後ヘラミガキを施している。頚部外面には楕円形の浅い刺突文が巡っている。



番号	出土層位	種別	調整 外面	調整 内面	底部	口径	体径	底径	器高
1	床面	土師器(器台)	ヘラミガキ	不明		6.6		11.5	7.4
2	床面	土師器(甕)	横ナデ、刷毛目	横ナデ	ナデ	20.0	25.3	6.4	24.6

第９図　第２住居跡出土遺物



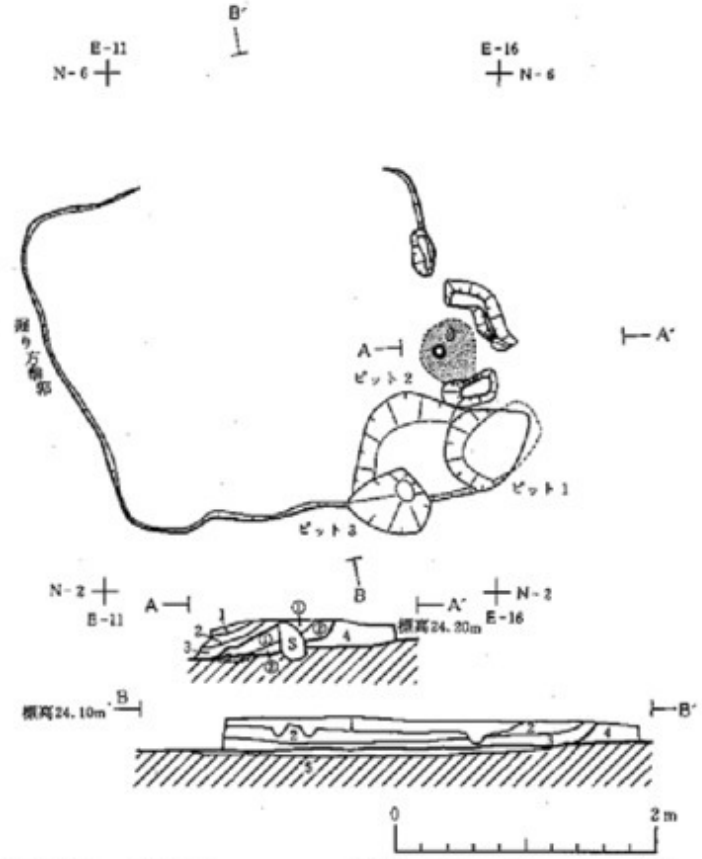
出土層位	種別	調整 外面	調整 内面	口径
第３層	土師器(甕)	ヘラミガキ・刷毛目	横ナデ・ヘラミガキ	29.0

第10図　第２住居跡堆積土出土遺物

第３住居跡

〔確認面・重複〕調査開始当初のトレンチ断面の観察によって住居跡の存在が確認されたものである。掘り込み面は基本層位第Ⅱ層上面である。しかし、基本層位第Ⅱ層と住居跡内堆積土第３層とは共に黒色土であり、平面的な住居跡の輪郭をとらえることはできなかった。結局地山面で掘り方の輪郭をおさえるにとどまった。住居跡南東隅は新しい時期のピットによって切られている。

〔平面形・規模〕平面形は幾分ゆがんだ隅丸方形で、地山面で確認された規模は2.8×3.0mであった。



層No.	土色	土性	備考
1	黒色(10YR3/1)	シルト	
2	灰褐色(2.5YR3/1)	シルト	
3	黒褐色(10YR3/1)	シルト	焼土粒・木炭粒が少量混入
4	黒色(10YR3/1)	シルト	基本層位第Ⅱ層
5	黒色(10YR3/1)	シルト	地山粒・ブロックが多量混入。住居跡掘り方埋土
①	暗褐色(10YR3/1)	シルト	黒褐色(10YR3/1)シルト・明赤褐色(5YR3/1)の粒が多量混入。カマド内埋積土
②	明赤褐色(5YR3/1)	シルト	焼土、カマド内埋積土

ピットNo.	土色色	土性	備考	深さ
1	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	地山粒・小ブロックが少量混入。住居より新	37
2	黒褐色(7.5YR3/1)	シルト	カマド灰土・木炭粒が多量混入。住居より新	29
3	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	地山粒・小ブロックが少量混入。住居より新	23

第11図　第３住居跡

〔堆積土〕断面図によれば３層認められた。

〔壁・床〕明確に壁、床といえるものは検出できなかった。

〔柱穴〕検出されなかった。

〔カマド〕住居跡東辺燃焼部が検出された。燃焼部側壁は粘土で構築されており内面は火熱を受けて赤変していた。燃焼部底面は 42×50 cmの範囲の焼面が認められ、その中のやや西寄りに径約 8cm の円形に地山を削り出した高まりが検出された。支脚の一部と考えられる。焼面は深さ約４cmまで火熱がおよんでいた。煙道部は検出できなかった。

〔出土遺物〕（第 12 図）

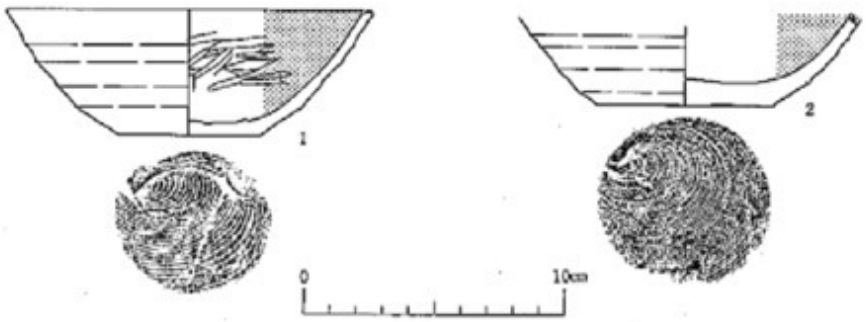
住居に伴うと考えられる遺物はカマド内から出土した土師器坏である。

土師器

坏（第 12 図 1）製作の際ロクロを使用し、底部の切り離し技法は回転糸切りである。再調整は加えられていない。器面調整は外面ロクロ調整、内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。

土師器

坏（第 12 図 2）口縁部を欠く。製作の際ロクロを使用している。底部の切り離しは回転糸切り技法であり、再調整は加えられていない。器面調整は外面ロクロ調整、内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。



番号	出土層位	種別	器形 外面	器形 内面	遺存	口径	体径	底径	器高
1	カマド内	土師器(坏)	ロクロ	ヘラミガキ・黒色処理	回転糸切り	14.0		5.5	4.8
2	第3層	土師器(坏)	ロクロ	ヘラミガキ・黒色処理	回転糸切り			6.7	

第12図　第３住居跡出土遺物

第４住居跡

〔確認面・重複〕地山面で確認された。カマドの燃焼部右側壁が新しい時期のピットによって切られている。

〔平面形・規模〕平面形は隅丸方形で、規模は長軸約4.5m、短軸約4.1mである。

〔堆積土〕４層に大別できる。いずれも住居跡中央部にむけて傾斜している。第Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ層は壁沿いを除く住居跡のほぼ全域にレンズ状に堆積している。また、第Ⅲ層は住居跡中央部分では床面上に堆積している。第Ⅰ、Ⅱ層から遺物の出土はない。第Ⅳ層は壁沿いに堆積している。

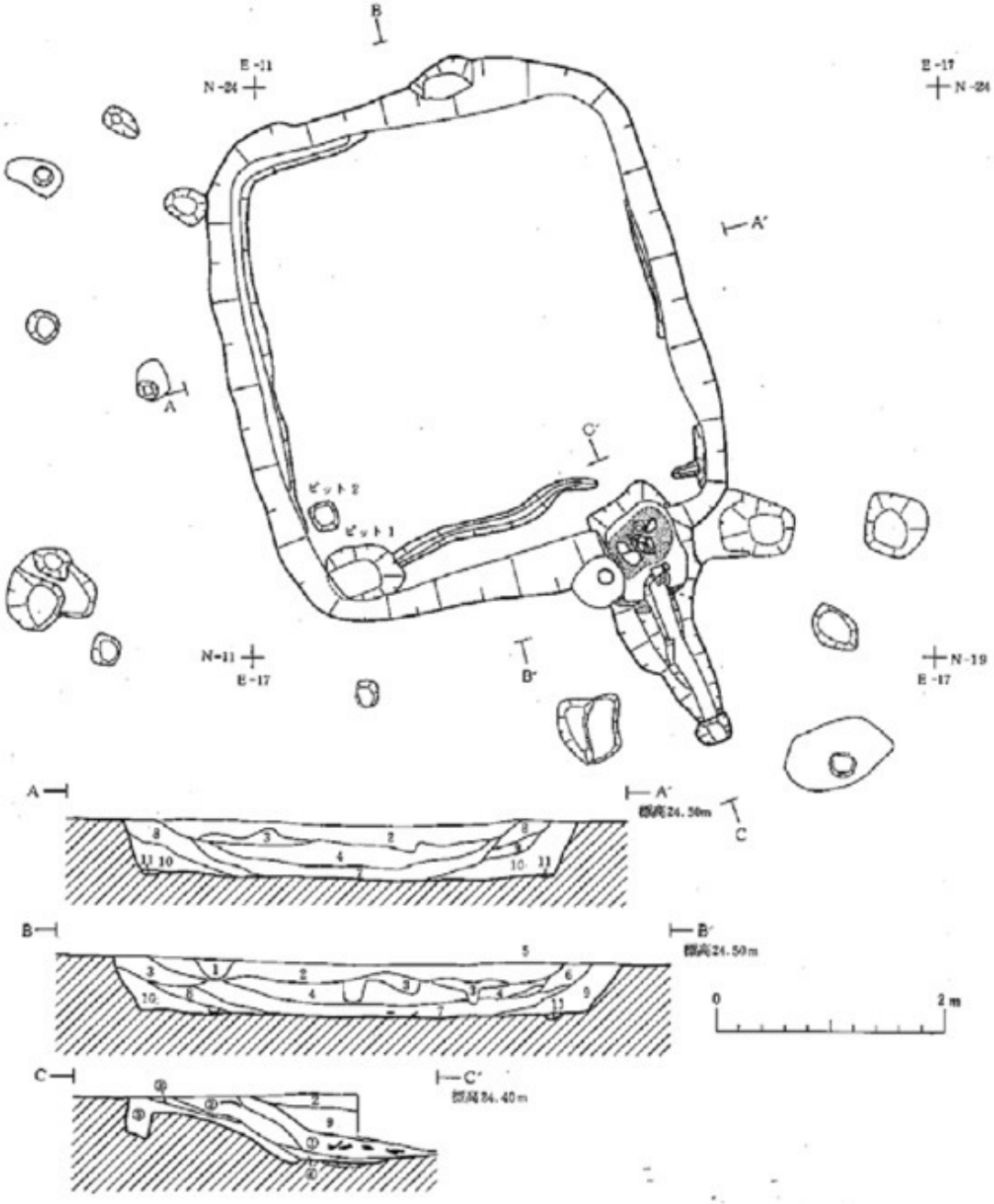
〔壁〕地山を壁としている。全体的に逆台形状に立ち上がる。残存壁高は北辺で51㎝、南辺で44cmである。

〔床〕地山をそのまま床としている。全体的に平坦である。

〔柱穴〕住居跡床面上で２個のピットが検出されたが、柱穴とは考えられない。

〔周溝〕北辺西半分から西辺にかけてと東辺中央部および南東隅において壁に沿って認められた。西辺での幅は18㎝、深さは５㎝である。また、南辺においては壁下から約20㎝内側に東西に走る断面Ｖ字形の溝が検出された。カマド部分では切れている。幅約15㎝あり、深さは最も深い所で10㎝である。カマドの部分にいくほど浅くなる。

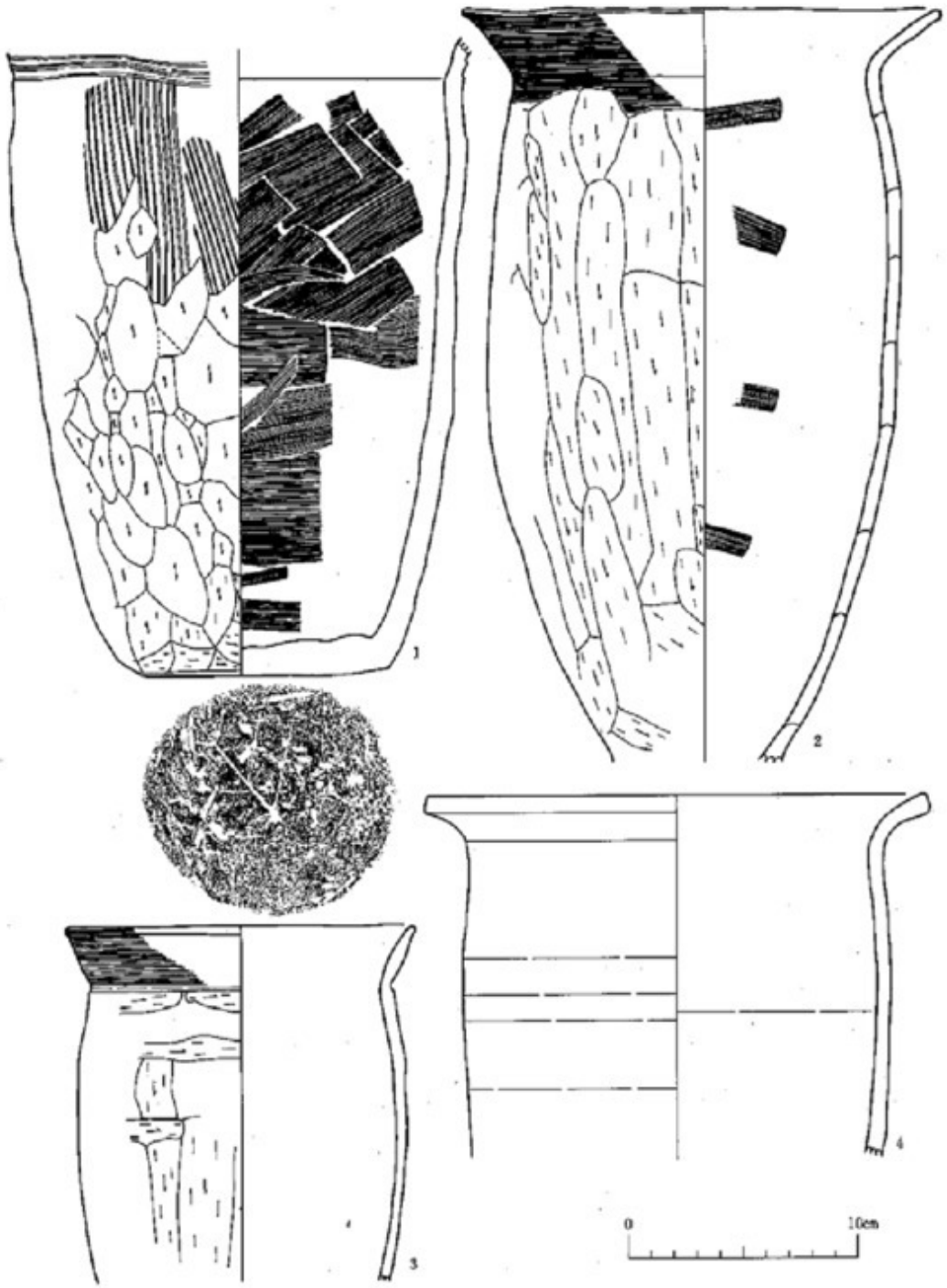
〔カマド〕南辺の南東隅寄りにとりつけられている。燃焼部・煙道部ともに住居壁外の地山を掘り抜いて構築しているが天井部はいずれも崩落していた。燃焼部は住居跡床面より７㎝ほど低くなっている。燃焼部側壁は火熱を受けて赤変しており、また、底面には56×44㎝の範囲の焼面が認められた。燃焼部最奥部は幾分くぼんでおり、そこから煙道部が続く。煙道部は長さ



大図	層No.	土色	土性	
	1			撹乱
Ⅰ	2	黒褐色(5YR½)	シルト	
Ⅱ	3	黒褐色(5YR½)	シルト	灰褐色(7.5YR½)シルトが混入。
	4	灰褐色(7.5YR½)	シルト	
	5	暗褐色(7.5YR½)	シルト	粗砂が混入。
Ⅲ	6	黒褐色(10YR½)	シルト	
	7	暗褐色(7.5YR½)	シルト	

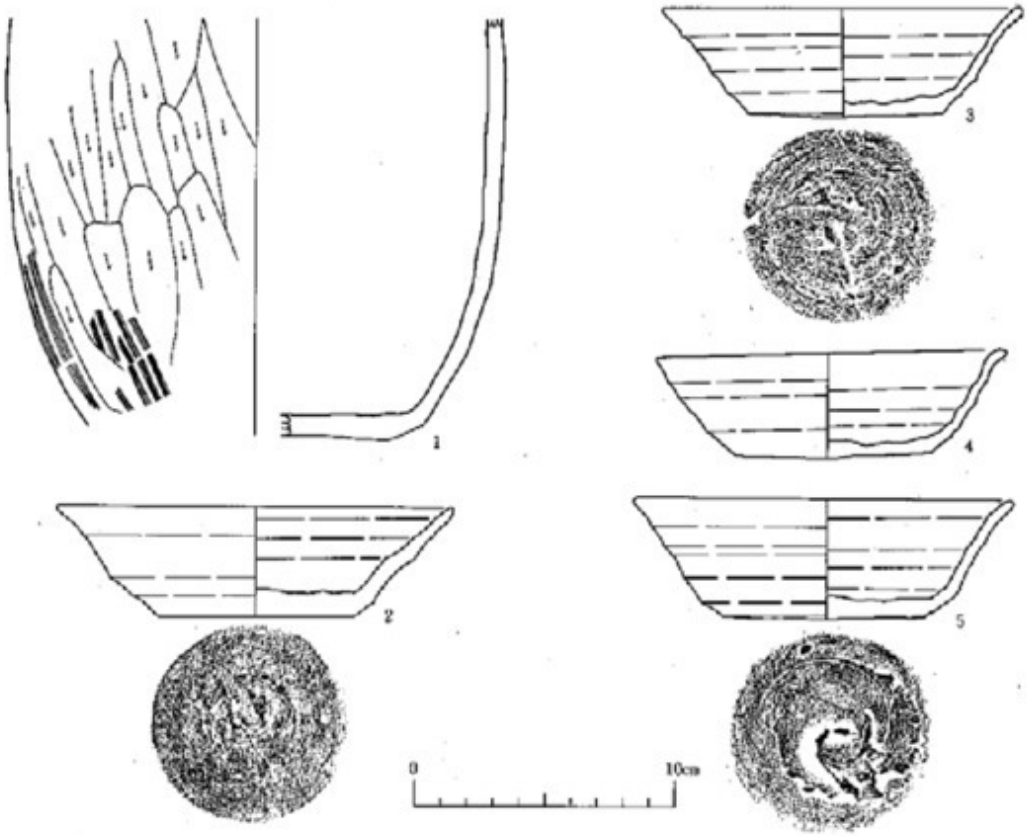
大図	層No.	土色	土性	
Ⅳ	8	極暗褐色(7.5YR½)	シルト	
	9	にぶい黄褐色(10YR½)	シルト	やや粘性がある。粗砂が混入。
	①	灰褐色(7.5YR½)	シルト	カマド内埋積土
	②	黒褐色(10YR½)	シルト	地山ブロックが多量混入 〃
	③	極暗褐色(7.5YR½)	シルト	〃
	④	黒褐色(10YR½)	シルト	地山粒が混入 〃
	⑤	極暗赤褐色(2.5YR½)	シルト	[illegible]

第13図 第４住居跡



番号	出土層位	種別	調整 外面	調整 内面	底部	口径	体径	底径	器高
1	カマド内	土師器(甕)	刷毛目・軽いケズリ ヘラケズリ	ヘラナデ	木葉・下持ち ヘラケズリ		19.8	10.5	
2	床面	土師器(甕)	積ナデ・ヘラケズリ	積ナデ・ヘラナデ		20.8	16.9		
3	カマド内	土師器(甕)	積ナデ・ヘラケズリ	刷毛目?		15.2	14.4		
4	床面	土師器(甕)	ロクロ	ロクロ		22.0	18.6		

第14図　第４住居跡出土遺物 (1)



番号	出土層位	種別	調整 外面	調整 内面	底部	口径	体径	底径	器高
1	カマド内	土師器(鍋)	粗いケズリ・[illegible]	不明	不明		19.0		
2	カマド内	須恵器(坏)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切り	15.2		7.5	4.3
3	カマド内	須恵器(坏)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切り	13.8		7.5	4.3
4	カマド内	須恵器(坏)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切り	13.5		7.5	4.3
5	カマド内	須恵器(坏)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切り	14.6		7.8	4.7

第15図　第４住居跡出土遺物 (2)

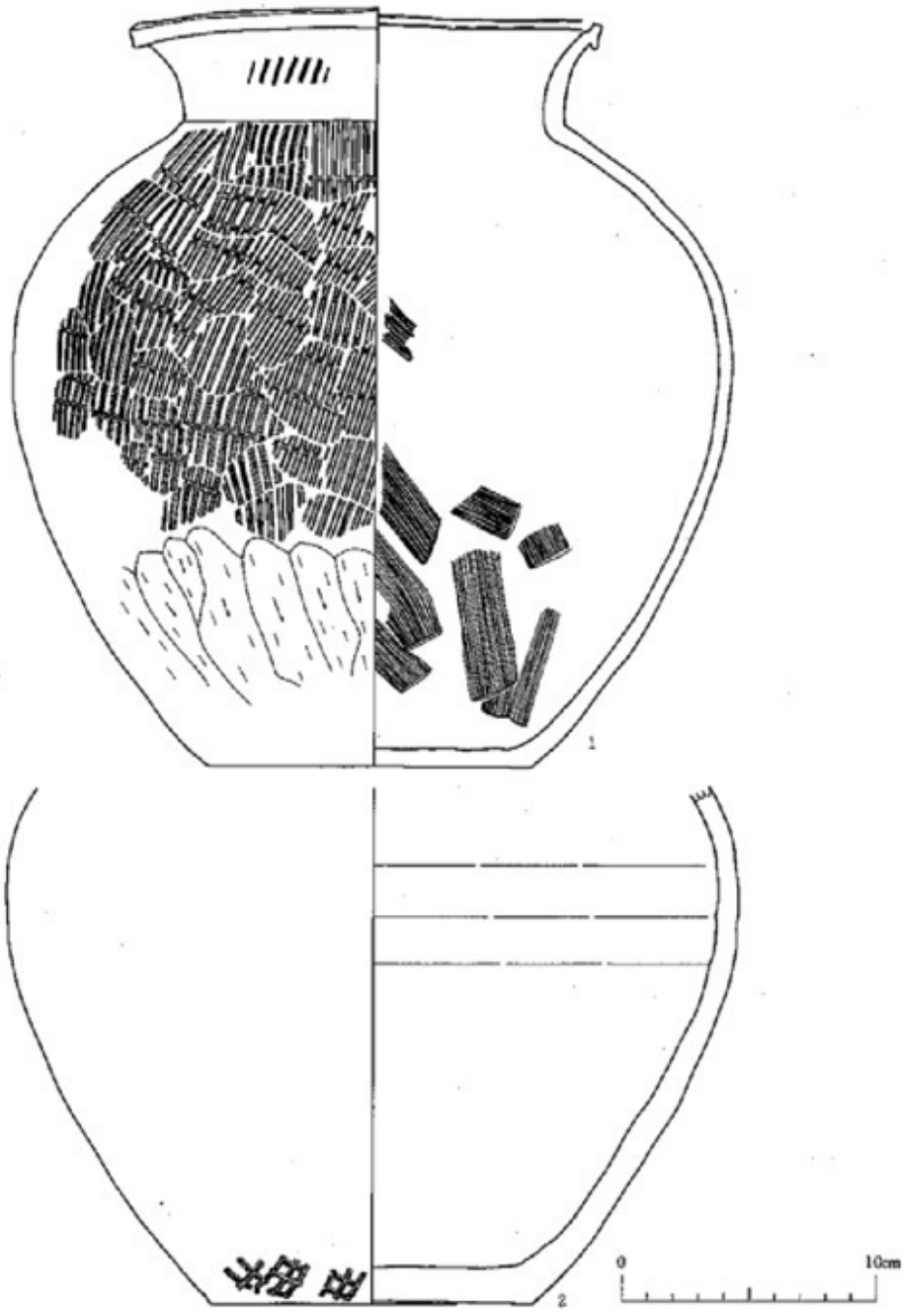
が約 120 cmあり、先端には煙出しのためのピットが掘られている。煙道部底面は先端に行くほど高くなっており、燃焼部最奥部と煙道部先端とのレベル差は約 50 cmある。

〔貯蔵穴〕南西隅で検出された。平面形は長軸 56 cm、短軸 52 cmのほぼ円形を呈し、床面からの深さは 23 cmである。

第４住居跡ピット

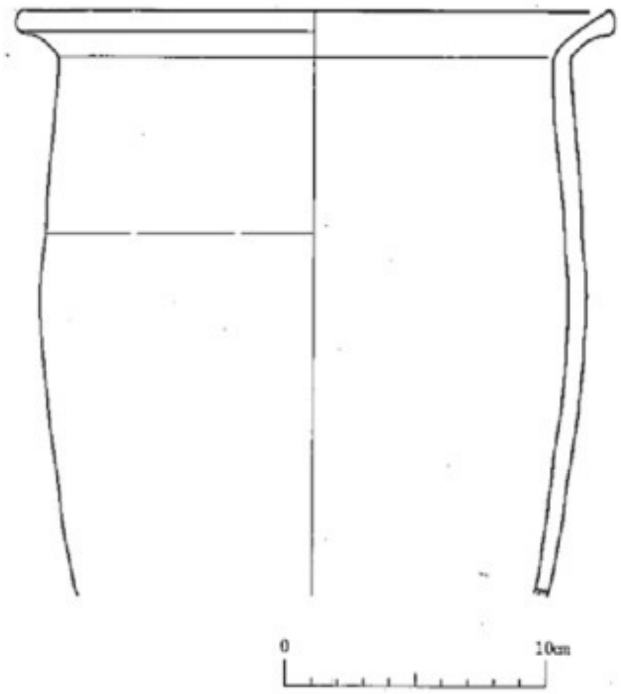
ピットNo.	土色色	土性	備考	深さ
1	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	木炭・暗赤褐色 (2.5YR3/4)の焼土粒が混入	13
2	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	ピット１より焼土が多量混入	28

〔出土遺物〕住居に伴うと考えられる遺物は床面およびカマド内出土の遺物である。（第 14、15、16 図）



番号	出土層位	種別	調整 外面	調整 内面	成形	口径	体径	底径	器高
1	床面	須恵器(甕)	ヨコナデ・平行タタキ目・ヘラケズリ	ロクロ・ヘラナデ	施文・不明	18.6	28.3	12.7	29.9
2	カマド内	須恵器(甕)	格子タタキ目	ヨコナデ	ナデ		26.8	12.8	

第16図　第４住居跡出土遺物 (3)



出土層位	種別	調整 外面	調整 内面	口径	体部
カマド第2層	土師器(甕)	ロクロ	ロクロ	23.6	21.0

第17図　第４住居跡堆積土出土遺物

土師器

甕　製作に際しロクロを使用していないもの（第14図1、2、3）とロクロを使用しているもの（第14図4）があるが、いずれも口径よりも器高が大きく、長胴形の器形を持つものである。第14図2は頸部で幾分くびれ、外傾する口縁部がつくり出されている。器面調整は口縁内外に横ナデ、体部外面はヘラケズリ、体部内面はヘラナデが施されている。第14図1は口縁部を欠く。頸部に2条の沈線が巡る。器面調整は体部外面に刷毛目、軽いケズリが施されており、内面はヘラナデが施されている。第14図3は幾分小形の甕であり体部下半を欠く。頸部に段がみられる。器面調整は口縁部が横ナデ、体部外面はヘラケズリが施されている。内面は不明である。第14図4は頸部から幾分外反する口縁部がつくり出されているものであり、器面調整は内外面ともロクロ調整である。第15図1は同じ器形をもつと思われる甕の体部下半で底部外面は剥落している。外面は平行タタキ目の後軽いケズリが施されているが、内面は不明である。

須恵器

坏　いずれも体部からほぼ直線的に外方に立ち上がるもので、口縁部が幾分外反するものもある。底部切離し技法はいずれも回転ヘラ切りのもので、再調整は加えられていない。

甕　口径よりも器高が大きいものであるが、最大径が体部にあり、壺形に近い器形をもつ。第16図1は頸部に低い段をもち、口縁部はやや外反しながら立ち上がる。口縁端部は上下につまみ出されており、縁帯を形成している。器面調整は口縁部内外面はロクロ調整、体部外面は平行様タタキ目が施されており、下半部は後にヘラケズリが施されている。体部内面はヘラナデが施されている。第16図2は同様の器形をもつと思われるものの体部以下の破片である。器面調整は外面が火熱を受けて剥落、磨滅しているので観察が十分にできないが、体部下端に格子状タタキ目が認められる。体部内面はロクロ調整である。

堆積土出土遺物（第17図）

土師器

甕　煙道部堆積土中から出土したものである。製作に際しロクロを使用している。口径より器高が大きいが、最大径が口径にあり、長胴形を呈するものである。頸部で「く」字に屈曲し、外傾する短い口縁部がつくり出されている。器面調整は内外面ともロクロ調整である。体部下半外面にはヘラケズリの痕跡が認められるが磨滅が著しいために単位は不明である。

第5住居跡

〔確認面・重複〕地山面で確認された。住居跡は北東方向から東西方向に走る第8溝によって切られているほか、後世の掘り込みや新しい時期のピットにより、南東部床面がかなり攪乱を受けており、掘り方のみ検出された。

〔平面形・規模〕平面形は隅丸長方形であり、規模は長軸約4.9m、短軸3.8mと考えられる。

〔堆積土〕3層に大別される。いずれも住居跡中央部に向けて傾斜しながら堆積している。第Ⅰ、Ⅱ層は壁沿いを除く住居跡のほぼ全域に堆積しており、第Ⅱ層の方が堆積の範囲はやや広く、住居跡中央部分では床面上に堆積している。第Ⅲ層は壁沿いに堆積している。

〔壁〕地山を壁としている壁の立ち上がりはゆるやかである。残存壁高は最もよく残っている北西隅で25㎝である。

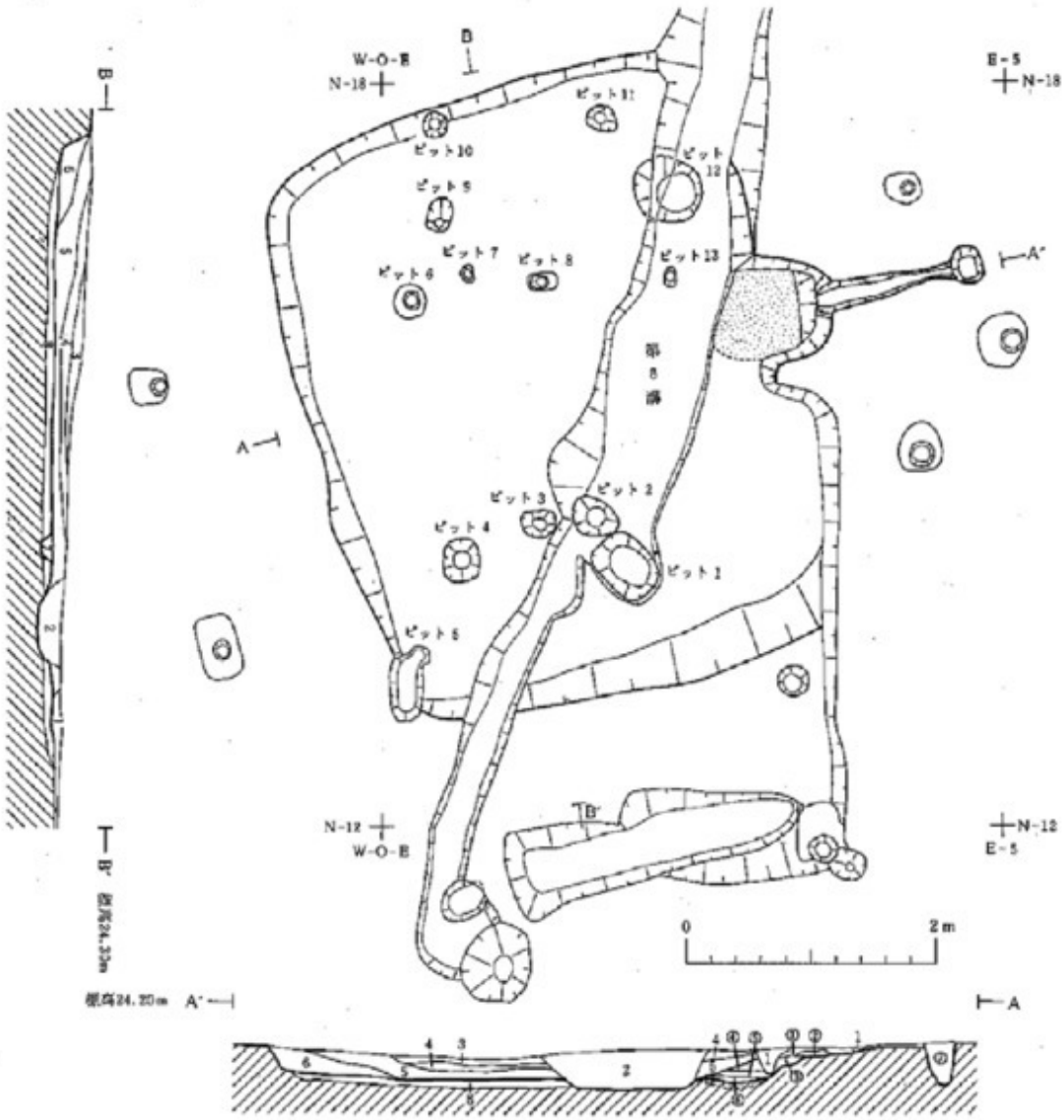
〔床〕地山を掘り込んだ住居跡掘り方埋土上面を床としている。ほぼ平坦であるが、南東側半分は新しい時期の掘り込みが床面下までおよんでおり、床面は残っていない。

〔柱穴〕住居跡内でピットは13個検出された。このうちピット1、5は住居跡堆積土を切っており新しい時期のものである。残りのピットのうち、位置や深さからみてピット4、6、12が柱穴と考えられる。

〔周溝〕認められなかった。

〔カマド〕東辺ほぼ中央部に位置している。燃焼部、煙道部ともに住居壁外の地山を掘り込んで構築されているが天井部はいずれも崩落していた。燃焼部底面は一部が第8溝によってこわされているが、70×70㎝の範囲で焼面が認められた。燃焼部から煙道部へは約8㎝の段をもって移行している。煙道部は長さ約110㎝であり、先端には煙出しのためのピットが掘られている。ピットは煙道部底面から約90㎝の深さである。煙道部底面は、先端にいくほどやや高くな

ピットNo.	土色	土性	備考	深さ	ピットNo.	土色	土性	備考	深さ
1	黒褐色(7.5YR3/1)	シルト		14	8	黒褐色(7.5YR3/1)	シルト	(柱穴)	19
2	黒褐色(7.5YR3/1)	シルト		16		暗褐色(7.5YR3/3)	シルト	(掘り方)	
3	黒褐色(7.5YR3/1)	シルト		10	9	黒褐色(10YR3/1)	シルト	炭化物が混入。	23
4	黒褐色(7.5YR3/1)	シルト	炭化物が混入。地山粒が少量混入。	24	10	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト	地山粒・木炭が混入。	23
5	黒褐色(7.5YR3/1)	シルト		9	11	黒褐色(7.5YR3/1)	シルト		11
6	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト	(柱穴) 地山粒が少量混入。	26	12	黒褐色(7.5YR3/1)	シルト		25
	黒褐色(7.5YR3/1)	シルト	(掘り方)						5
7	黒褐色(7.5YR3/1)	シルト	(掘方) 地山ブロックが混入。	9	13	黒褐色(7.5YR3/1)	シルト		



第５住居跡堆積土

大別	層No.	土色	土性	備考
	1			攪乱
	2	黒褐色（1.5YR½）	シルト	地山粒が混入。第8溝堆積土
I	3	灰褐色（1.5YR½）	シルト	
	4	黒褐色（1.5YR½）	シルト	
II	5	黒褐色（1.5YR½）	シルト	
II	6	極暗褐色（1.5YR½）	シルト	地山粒が少量混入。
	7	黒褐色（1.5YR½）	シルト	炭化物が少量混入。
	8	黒褐色（1.5YR½）	シルト	地山ブロックが多量混入。住居跡掘り方埋土
	①	極暗褐色（1.5YR½）	シルト	焼土粒が混入。
	②	暗褐色（1.5YR½）	シルト	焼土
	③	暗褐色（1.5YR½）	シルト	焼土ブロックが多量混入。
	④	暗赤褐色（5YR½）	シルト	焼土
	⑤	にぶい褐色（1.5YR½）	シルト	天井崩落土。
	⑥	極暗褐色（1.5YR½）	シルト	焼土、木炭が混入。
	⑦	極暗褐色（1.5YR½）	シルト	木炭、焼土粒が混入。

第18図　第５住居跡

る。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

3. 掘立柱建物跡

第4、第5住居跡の周辺やそれより北側の地山面で多数のピット群が検出された。これらは柱痕跡が確認されたものが多い。これらのピットを検討した結果、あるものは柱穴掘り方の平面形、柱穴の堆積土やピットの配置に規則性がみられ、それらが建物のプランを示すことがわかり、掘立柱建物跡の柱穴と考えられる。しかし、組み合わせを明らかにできなかったピットも多数ある。掘り方埋土、柱穴堆積土中から遺物は全く出土しなかった。

第1掘立柱建物跡

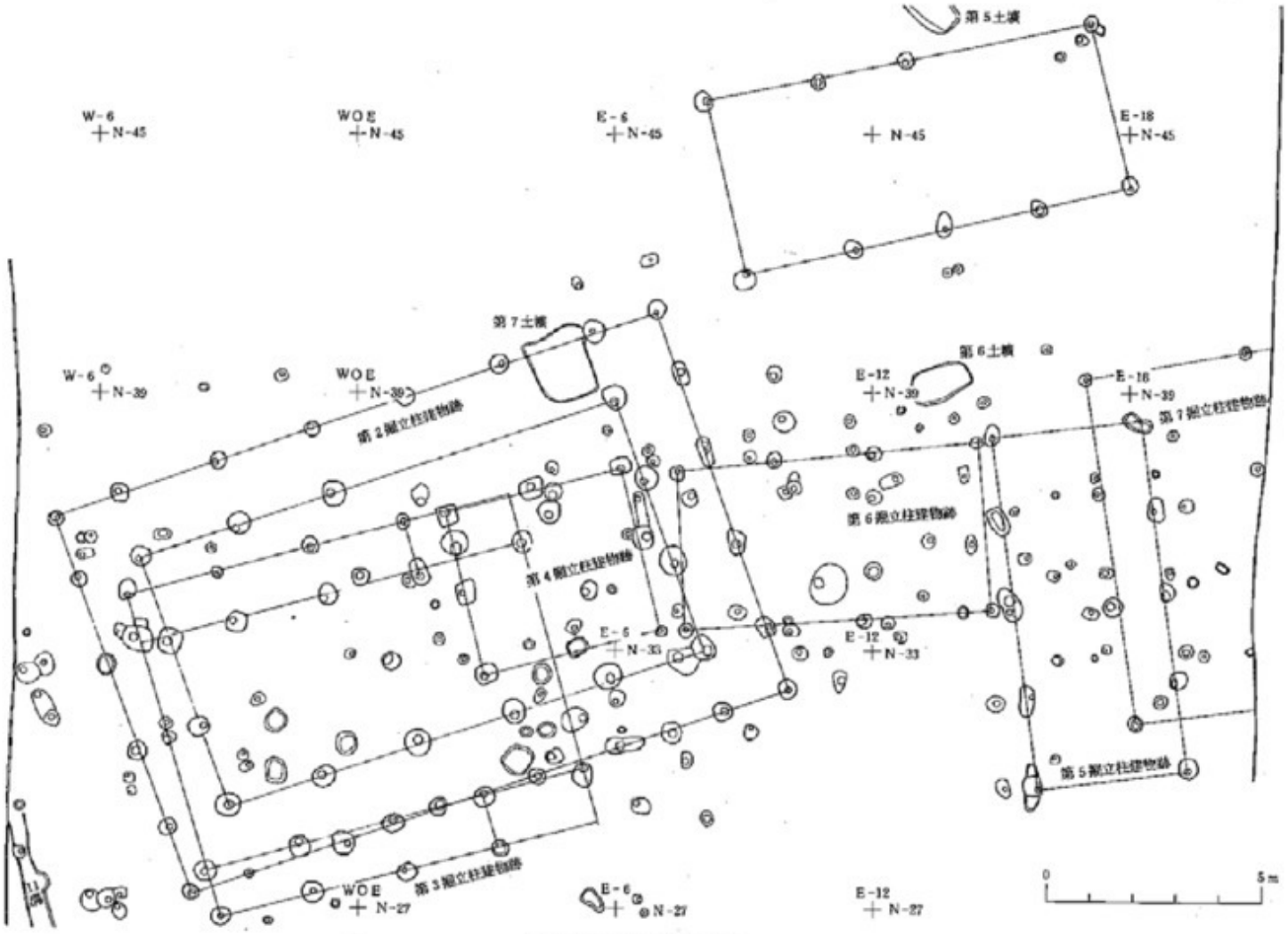
桁行4間、梁行1間の建物で、方位は西側柱列でN14° Wである。規規および柱間寸法は桁行が南側柱列で9.2m（西から2.6m＋2.1m＋2.3m＋2.2m）、北側柱列で9.1m（西から2.6m＋2.1m＋4.4m(2間分)）、梁行が西側で4.1m、東側で4.0mである。梁には中間に柱穴がみられない。また、南面の東から2番目の柱穴と対応すべき北面の柱穴は検出されなかった。柱穴掘り方の平面形は径30～40㎝のほぼ円形で、柱穴は確認面からの深さが19～34㎝である。

第2掘立柱建物跡

第3、4、6掘立柱建物跡と重複しており、第1掘立柱建物跡とは北東隅で近接している。桁行5間、梁行3間の建物で4面に1.5～1.6mの疵がつく。方位は西側柱列でN20° Wである。規模および柱間寸法は桁行が南側柱列で11.7m(西から2.4m＋2.3m＋2.4m＋2.0m＋2.6m)、北側柱列で11.7m(西から2.3m＋2.4m＋2.2m＋2.5m＋2.3m)、梁行が東側柱列で6.2m(南から2.0m＋2.3m＋1.9m)、西側柱列で5.9m(南から1.9m＋2.1m＋2.0m)である。柱穴掘り方の平面形はほぼ円形であり、径32～66㎝である。柱穴の深さは確認面から6～60㎝であり、20㎝前後のものが最も多い。

第3掘立柱建物跡

第2、4掘立柱建物跡と重複している。桁行4間、梁行1間の建物で南と北西の西側3間分に1.1～1.2mの疵がつく。方位は西側柱列でN17° Wである。規模および柱間寸法は桁行が南側柱列で9.2m(西から2.3m＋2.3m＋2.2m＋2.4m)、北側柱列で9.2m(西から2.3m＋2.1m＋2.3m＋2.5m)、梁行が西側で5.5m、東側で5.4mである。梁には中間に柱穴が検出されなかった。柱穴掘り方の平面形はほぼ円形であり、径24～50㎝である。柱穴の深さは確認面から8～78㎝であり、35㎝以上のものが大部分である。


第5土壙
W-6
N-45
W0E
N-45
E-6
N-45
N-45
E-18
N-45
第7土壙
第6土壙
W-6
N-39
W0E
N-39
E-12
N-39
E-18
N-39
第2掘立柱建物跡
第7掘立柱建物跡
第6掘立柱建物跡
第4掘立柱建物跡
E-6
N-33
E-12
N-33
第5掘立柱建物跡
W0E
N-27
第3掘立柱建物跡
E-6
N-27
E-12
N-27
0
5m

第19図　掘立柱建物跡

第４掘立柱建物跡

第２、３、６掘立柱建物跡と重複している。桁行２間、梁行２間の建物で方位は西側柱列でN14° Wである。規模および柱間寸法は桁行が南側柱列で4.2m（2間分）、北側で4.2m（西から2.1m＋2.1m）、梁行が西側柱列で3.9m（南から2.0m＋1.9m）、東側で3.9m（南から2.4m＋1.5m）である。柱穴掘り方の平面形は、南東隅の柱穴を除いて全てが方形を呈しており、他の掘立柱建物跡の掘り方と区別される。掘り方の規模は長軸約50㎝、短軸40～45㎝である。柱穴は確認面からの深さが8～46㎝であり、20㎝以上のものがほとんどである。

第５掘立柱建物跡

第７掘立柱建物跡と重複しており、西側は第６掘立柱建物跡と近接している。桁行４間、梁行１間の建物で、方向は西側柱列でN8° Wである。規模および柱間寸法は桁行が西側柱列で8.2m（南から2.1m＋2.0m＋4.1m（2間分））、東側柱列で8.3m？（南から6.2m（3間分）＋2.1m）、梁行は東側で3.5mである。梁には中間に柱穴がみられない。柱穴掘り方は楕円形を呈するものが多く、柱穴の深さは確認面から12～62㎝である。柱痕跡を確認できなかったものもある。

第６掘立柱建物跡

第２掘立柱建物跡と重複しており、東側は第５掘立柱建物跡と近接している。桁行３間、梁行１間の建物で、方位は西側柱列でN4° Wである。規模および柱間寸法は桁行が南側柱列で7.1m（西から2.4m＋2.3m＋2.4m）、北側で7.0m（西から2.2m＋2.3m＋2.5m）、梁行は西側で3.7m東側で3.9mである。梁には中間に柱穴がみられない。柱穴掘り方は平面形が径28～36㎝のほぼ円形をしており、柱穴の深さは確認面から17～41㎝である。

第７掘立柱建物跡

第５掘立柱建物跡と重複している。東側が調査区外にのびているので全体の規模は不明であるが、東西１間（3.7m）以上、東北３間8.0m（南から2.7m＋2.6m＋2.7m）の建物である。方位は西側柱列でN10° Wである。柱穴掘り方は平面形がほぼ円形を呈し、径は26～42㎝である。柱穴の深さは確認面から17～46㎝である。

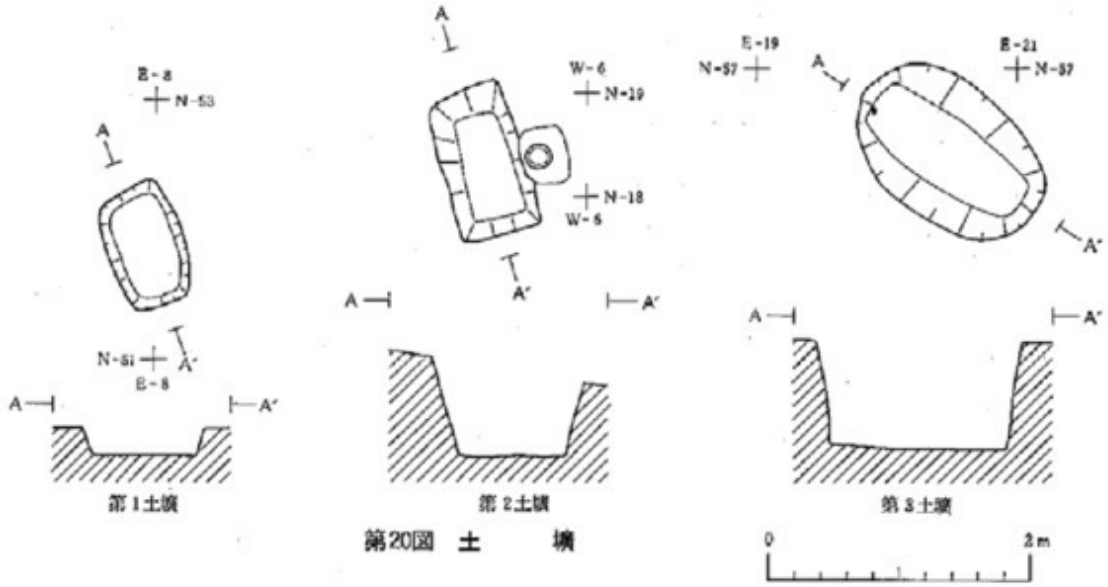
4. 土壙

第１土壙

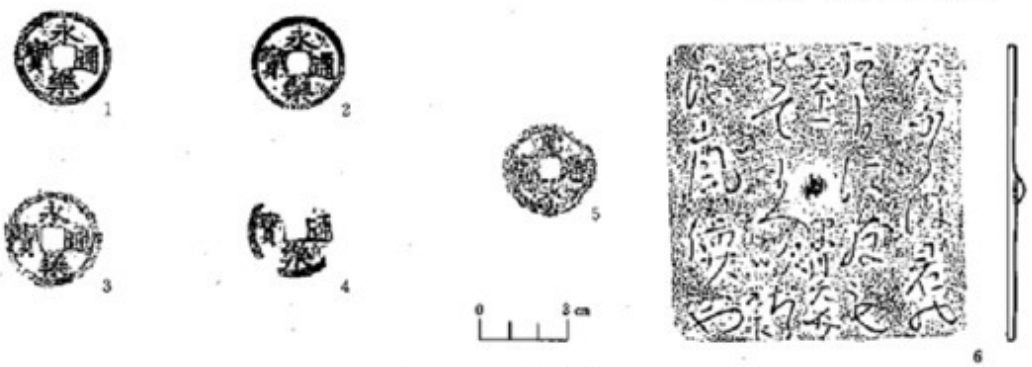
調査区北端地山面で確認された。平面形は隅丸の長方形を呈する。規模は長軸92㎝、短軸60㎝であり、確認面からの深さは19㎝である。底面はほぼ平坦である。土壙底面から永楽通宝が４枚出土している。（第21図1～4）

第２土壙

第５住居跡西側の地山面で確認された。平面形はほぼ長方形で、長軸114㎝、短軸62㎝であ



第20図　土　　壙



第21図　第１・２土壙出土遺物

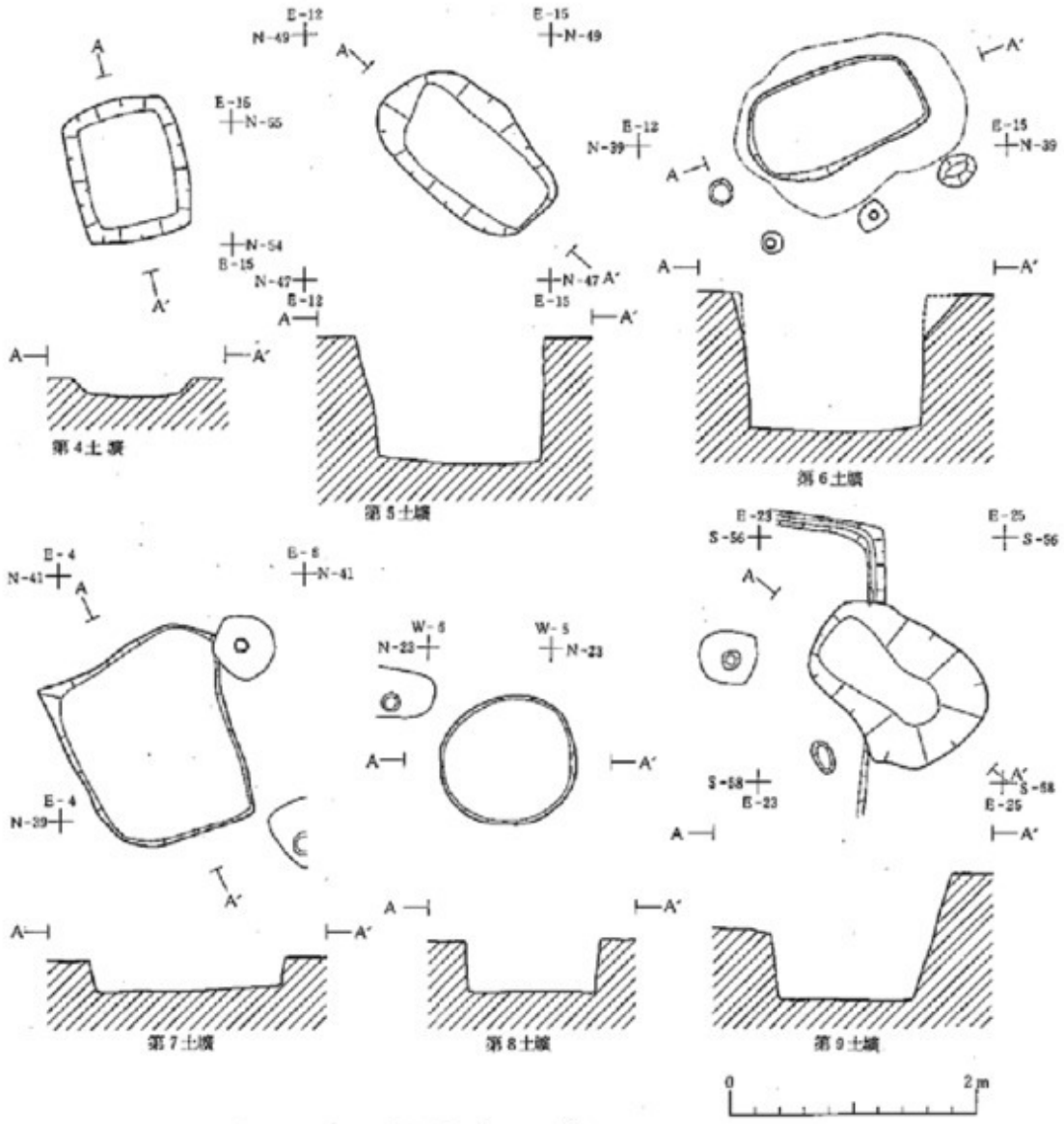
る。壁はゆるく立ち上がる。確認面からの深さは75㎝である。底面はほぼ平坦である。土壙底面から寛永通宝２枚、キセルの破片、方鏡が出土しており、そのほかに棺の一部と思われる木片も出土している。方鏡の鏡背には全面に「花ならば君の阿たりに散もせてよへ吹ちら須嵐□や」と鋳出されており行間には「天下一　早川夭介　光皐」の銘がみられる。（第21図5、6）

第３土壙

調査区北東隅の地山面で確認された。平面形は上端で楕円形であるが底面では隅丸の長方形に近い。規模は上端で160×103㎝、底面で136×54㎝である。短辺の壁は立ち上がりが急であるが長辺の壁は幾分ゆるやかである。底面はほぼ平坦であり、確認面からの深さは約85㎝である。遺物は出土しなかった。

第４土壙

調査区北端の地山面で確認された。平面形は上端、底面ともほぼ長方形を呈しており、規模は長軸116㎝、短軸94㎝である。壁は幾分ゆるやかに立ち上がる。確認面からの深さは約15㎝

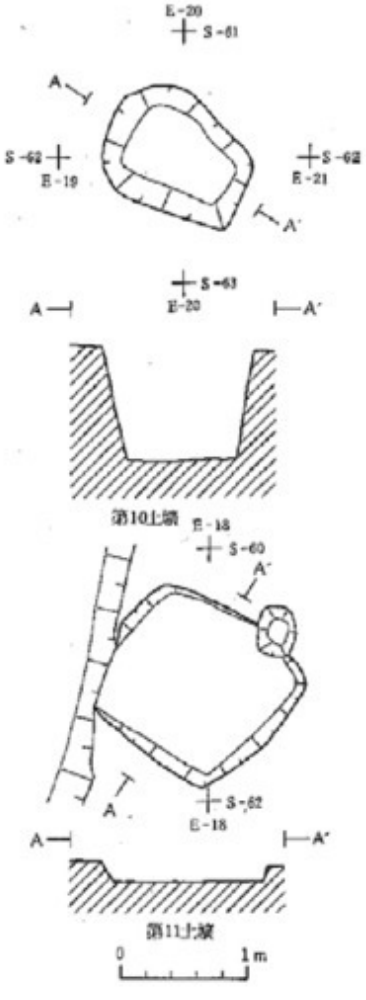


第22図　土　　壙

であり、底面はほぼ平坦であるが、中央がわずかに低い。遺物の出土はなかった。

第５土壙

第１掘立柱建物跡北側の地山面で確認された。平面形は上端では楕円形を呈するが底面では不整な長方形である。規模は上端で長軸154㎝、短軸82㎝である。確認面からの深さは約105㎝であり、壁は急傾斜に立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが、中央がわずかに低い。遺物の出土はなかった。



第23図　土　壙

第６土壙

第６掘立柱建物跡北側の地山面で確認された。平面形は上端、底面ともほぼ楕円形で、東側が幾分角ばる。規模は長軸148cm、短軸82cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが、中央はわずかに低い。遺物の出土はなかった。

第７土壙

第２掘立柱建物跡北東隅の地山面で確認された。第２掘立柱建物跡の柱穴掘り方によって土壙の北東隅が切られている。平面形は不整な方形状を呈す。規模は約160 cm×約130 cmであり確認面からの深さは約20 cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は南から北に向けて幾分傾斜する。遺物の出土はなかった。

第８土壙

第５住居跡北西側の地山面で確認された。平面形は上端、底面ともに円形である。規模は長径110 cm、短径104 cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは43 cmである。底面は平坦である。遺物の出土はなかった。

第９土壙

第１住居跡北東隅の地山面で確認された。第１住居跡によって切られている。平面形は不整楕円形である。規模は長軸約150cm、短軸約100 cmである。確認面からの深さは105 cmである壁は逆台形状に立ち上がり、底面は平坦である。遺物の出土はなかった。

第10土壙

第１住居跡南側の地山面で確認された。平面形は上端は楕円形を呈するが、南東隅で角ばっている。底面は不整の長方形に近い。規模は長軸約120 cm、短軸約90 cmである。壁は逆台形状に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。確認面からの深さは約90 cmある。遺物の出土はなかった。

第11土壙

第１住居跡南西隅近くの地山面で確認された。西側を第１溝によって、また北辺を新しい時期のピットにより切られている。平面形は方形を呈しており、規模は長軸150 cm、短軸134 cmである。壁は逆台形状に立ち上がり、底面は平坦である。確認面からの深さは17 cmである。遺物の出土はなかった。

5. 溝（第3図）

第1溝

第2住居跡の東側から南にのびる溝である。第2住居跡を切っており、第3溝と重複している。第3溝との新旧は明らかにすることができなかった。上端の幅は90～120 cm、底面幅は50～80 cmである。確認面からの深さは27～35 cmであり、断面は「U」字を呈する。底面は南にいくほどわずかに低くなる（レベル差12 cm）。堆積土中から土師器、須恵器片が出土している。

第2溝

第2住居跡の北側を東西に走る溝である。東、西のいずれも調査区外にのびている。上端の幅は90～160 cm、底面幅は40～70 cmであり、確認面からの深さは30～75 cmである。断面は逆台形状を呈する。溝底面は西にいくほど低くなり、調査区の東端と西端でのレベル差は76 cmである。堆積土中から遺物は出土しなかった。

第3溝

第2住居跡の東側を北東－南西に走り、第1溝に開く溝である。北側は調査区外にのびている。溝の上端幅は60～100 cm、底面は30～50 cmである。壁はゆるやかに立ち上がり、底面も丸味をおびている。溝の深さは確認面から15～35 cmであり、底面は前ほど幾分低い。堆積土中から遺物は出土しなかった。

第4、5溝

いずれも地山面で検出されている。東西に走る溝である。長さが約3.5mであり、溝と言えるかどうか疑問が残る。遺物は出土しなかった。

第6溝

第5溝の北側地山面で検出されたものである。東西に走っており、東側は調査区外にのびている。上端幅は50～100 cmで深さは調査区東端で確認面から25 cmあり、断面は浅い「U」字形を呈する。西側にいくほど浅くなっており、この付近では地山面が西側ほど低くなっているので本溝はこの谷部に開くものと思われる。遺物は出土しなかった。

第7溝

第6溝のさらに北側地山面で検出されたものである。東西に走っており、東側は調査区外にのびている。形態、規模や途中で切れることなど第6溝と類似する点が多い。遺物は出土しなかった。

第8溝

北－南に走り第5住居跡を切っている。上端の幅は30～90 cm、確認面からの深さは10 cm前後である。第5住居跡の南側ではとじており、全体の長さは約16mである。遺物は出土しなかった。

第9溝

第2溝の北側地山面で検出された。東西に走るが調査区内では長さ約4mほどであり、東側は調査区外にのびている。調査区東端での幅は上端で約60cm、深さは12cmであり断面は浅い「U」字形を呈す。遺物は出土しなかった。

第10溝

第2住居跡内から第2溝とほぼ平行に西にのびる溝で、第2住居跡を切っている。規模は第2溝より幾分小さいが、類似する点が多い。遺物は出土しなかった。

第11溝

第2掘立柱建物跡の西側地山面で検出されたものである。幅は上端で1m前後であるが、この付近は後世に削平を受けているためか深さは約6cm、長さは約5mしか残っていない。遺物は出土しなかった。

6. 井戸跡（第3図）

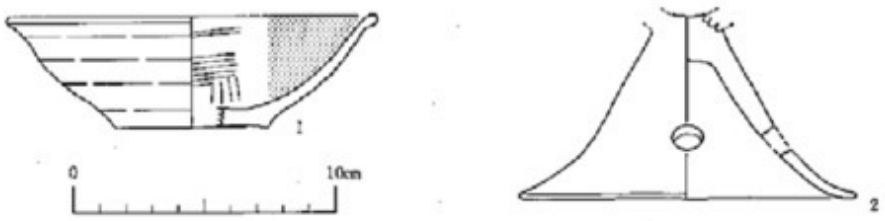
第4住居跡東側の調査区東端地山面で検出された。平面が円形を呈する素掘りの井戸であり確認面での規模は径約110cmである。深さ約2mまで掘り下げたが規模が小さいためと湧水が激しいために完掘できなかった。遺物は出土しなかった。

7. 遺構以外からの出土遺物

土師器（第24図）

坏　製作に際しロクロを使用しているものである。体部は幾分ふくらみをもって外方に立ち上がり、口縁部はやや外反する。底部の切り離し技法は回転糸切りであり、再調整は加えられていない。器面調整は外面がロクロ調整、内面がヘラミガキ、黒色処理が施されている。

器台　脚部のみ残っている。円錐形を呈し、裾がわずかに開く。受け部と脚部との間に貫通孔はない。脚部には3個の円窓がある。器面調整は脚部外面の一部にヘラミガキの痕跡が認められるが、全体に磨滅が著しく観察できない。受け部内面、脚部外面に丹が塗られている。



番号	出土層位	器種	調整 外面	調整 内面	底部	口径	底径	器高
1	J61－1	土師器（坏）	ロクロ	ミガキ黒色処理	回転糸切り	14.4	5.8	5.4
2	B30－2	土師器（器台）	ヘラミガキ	不明			13.0	7.0

第24図　遺構以外からの遺物

Ⅳ．遺構、遺物に関する考察

1．出土土器の分類

出土土器には土師器、須恵器、弥生土器がある。このうち弥生土器は出土量が少なく、また小破片のため分類は行わない。

〔土師器〕土師器には坏、甕、器台がある。これを器形、製作技法によって分類を行なった。なお以下の分類は器形がある程度明らかな図示遺物によるものである。

坏　坏のうち図示できたものは４個体である。いずれも製作に際してロクロを使用しているもので、底部の切り離し技法が回転糸切りのものである。再調整の加えられているものをⅠ類再調整の加えられていないものをⅡ類とする。

Ⅰ類　底部および体部下端に手持ちヘラケズリによる再調整が加えられているものである。底部から口縁部にかけてほぼ直線的に外傾する器形である。器面調整は外面がロクロ調整、内面にはヘラミガキ、黒色処理が施されており、ヘラミガキの方向は体部下端から底部では放射状、他の部分では横位である。

Ⅱ類　再調整の加えられていないものである。器形は底部から体部にかけて幾分丸味をもって外傾し、口縁部がわずかに外反するものである。器面調整は外面がロクロ調整、内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている。ヘラミガキの方向は体部下端、底部では放射状、他の部分は横位、斜位である。

甕　製作に際してロクロを使用しているものと使用していないものがある。それらは口径と器高の比率、最大径の位置によって次のように大別される。

Ａ類　ロクロを使用しないもので、口径より器高が大きく最大径の位置が口縁部にあるもの。

Ｂ類　ロクロを使用しないもので、口径より器高が大きく最大径の位置が体部にあるもの。

Ｃ類　ロクロを使用しており、口径より器高が大きいもの。

〈甕Ａ類〉器高が口径より大きく、口縁部に最大径があるものである。図示できたものは４点である。これらは頚部に段、沈線等を有し口縁部と体部とを区画するもの（ＡⅠ類）と、段、沈線が認められず体部から口縁部へなだらかに移行するもの（ＡⅡ類）とに細分される。

ＡⅠ類には大形のものと小形のものが含まれるが資料が少ないので細分はしなかった。口縁部が外傾し、体部はほぼ直線的に立ち上がるか、幾分外側へ張り出しながら立ち上がる器形を持つ。

ＡⅡ類としたものも形態的にはＡⅠ類とほとんど変わらない。

器面調整は口縁部内外面に横ナデ、体部外面には刷毛目、軽いケズリ、ヘラケズリが施され、体部内面には刷毛目、ヘラナデが施されている。

〈甕B類〉器高が口径より大きく、体部に最大径をもつものである。図示した2個体のうち全体の器形がわかるのは1個体のみで他は頸部から口縁部にかけての破片である。最大径は体部のほぼ中央部にあり壺形を呈する。頸部で「く」字に屈曲し、外傾する口縁部がつくり出されているが、口縁部の形態から、複合口縁のもの（BⅠ類）と単純口縁のもの（BⅡ類）に細分される。

器面調整はBⅠ類では口縁部外面に刷毛目を施した後複合口縁をつくり出し、ヘラミガキを施している。頸部には楕円形の浅い小刺突文が巡る。口縁部内面では口縁端部に横ナデを、それより下部にナデを施した後ヘラミガキを施しており、頸部にはヘラナデの痕跡が認められる。また口縁部外面には円塗りの痕跡が認められる。

BⅡ類では口縁部内外面ともに横ナデ、体部外面には刷毛目が施されている。

〈甕C類〉製作に際してロクロを使用しているもので、口径よりも器高が大きいものである。頸部に段は認められない。口縁部は外傾しており短い。口縁端部が上下につまみ出されているものと、丸くおさまるものとがある。

器面調整は体部外面ではロクロ調整の後体下部にヘラケズリが施されており、ロクロ調整前に平行タタキ目が施されているものもある。内面はロクロ調整であるが、刷毛目が施されているものもある。

器台　図示できたものが2例ある。そのうち器形全体がわかるものは1例であり、他は受け部下端から脚部のみ残されている。受け部と脚部との間に貫通孔のあるもの（A類）とないもの（B類）に細分される。A類では受け部と脚部との間が短い柱状部分になっている。脚部にはA類では3個、B類では4個の円窓がみられる。

器面調整は両者とも磨滅が著しく、全体を観察することができないが、脚部外面にはヘラミガキが施されており、B類では受け部内面と脚部外面に丹塗りがなされている。

〔須恵器〕坏と甕がある。坏が大部分を占め、図示できたものが10個体ある。甕は2個体図示できたにすぎない。

坏　器形はいずれも底部から口縁部までほぼ直線的に、あるいはやや丸味をもって外傾するものであるが、口縁部が幾分外反するものもある。底部切り離し技法によって回転ヘラ切りのもの（A類）と回転糸切りのもの（B類）に細分される。いずれも再調整は加えられていない。

甕　図示できたものが2例あるが器形全体がわかるものは1例のみである。口径よりも器高が大きく、最大径は体部の中央よりやや上にある。器面調整は口縁部内外面はロクロ調整、体部外面には平行様タタキ目が施され、下半にはその後ヘラケズリが施されている。体部内面にはヘラナデが施されている。

他の1例も同じ器形をもつと思われるもので、器面調整は磨滅しているため十分に観察ができ

ないが、体部下端外面に格子状タタキ目、体部内面にはロクロ調整がなされている。

2. 出土土器の組み合わせとその年代

出土土器はそれぞれ前項のように分類されたが、それらの共伴関係を各住居跡単位にみると次のようになる。

第1住居跡……土師器坏Ⅰ類、甕ＡⅠ・C類、須恵器坏Ａ・Ｂ類

第2住居跡……土師器器台Ａ類、甕Ｂ類

第3住居跡……土師器坏Ⅱ類

第4住居跡……土師器甕ＡⅠ、ＡⅡ、C類、須恵器坏Ａ類、甕

これらのうち土師器については、製作に際して全くロクロを使用していないものだけの第2住居跡出土土器群（第1土器群）とロクロを使用しているものがある第1、3、4住居跡出土土器群（第2群土器）とに大別できる。これらはいずれも住居に伴う遺物として、共伴関係にある。しかし資料数が少なく、また器種も坏、器台、甕に限られているので、ここでは編年上の位置づけをするにとどめる。

〔第1群土器〕器台、甕の2器種がある。これらに類似するものは蔵王町大橋遺跡、名取市西野田遺跡、小牛田町山前遺跡から出土しており、東北地方南部の土師器の編年上塩釜式（古墳時代前期）に比定されている。本群土器も塩釜式としてとらえられるが、器台については次のことも指摘できる。すなわち本遺跡および大橋遺跡、山前遺跡出土の器台脚部には円窓がみられるが、西野田遺跡の器台にはみられない。また、西野田遺跡には受け部と脚部の間に貫通孔のみられないものが存在するが、本遺跡出土の器台Ｂ類と共通する。しかし、本遺跡では器台Ａ、Ｂ類の共伴関係は明らかにできなかった。

〔第2群土器〕坏と甕の2器種がある。第1、3住居跡から出土した土師器坏は製作時にロクロを使用しているものであり、東北地方南部の土師器の編年では表杉の入式（平安時代）に位置づけられている。この土師器坏に第1、4住居跡ではロクロを使用してない甕ＡⅠ、Ⅱ類とロクロを使用している甕C類が共伴しているが、同様の例は志波姫町糠塚遺跡でも指摘されている。これについては、土師器自体において、器形によって変遷が一様でなかったと理解されている。

須恵器坏には底部の切り離し技法が回転ヘラ切りのものと回転糸切りのものが共伴している。以上のほかに土師器坏においても再調整の加えられているものといないものを含んでいる。しかし、資料数が少ないので、ここでは表杉の入式とそれに伴う土器群として把えておく。

弥生土器　弥生土器は4点出土しているが、複合口縁状に口縁部を肥厚させていること、撚糸文、縦位の縄文がみられることなどから天王山式土器に併行するものととらえておく。

3. 遺構の年代

検出された5軒の竪穴住居跡については出土土器から第2住居跡が古墳時代前期に、第1、3、4住居跡が平安時代に属するものと考えられる。第5住居跡については遺物が全く出土しておらず、年代を決めかねるが、住居跡の形態からみて古代に属するものであることは明らかである。

掘立柱建物跡については柱穴掘り方埋土、柱穴堆積土のいずれからも遺物が全く出土しておらず、また年代のはっきりしている住居跡などの遺構との重複もないので年代を決めることはできない。なお掘立柱建物跡相互には重複および近接しているのがみられることから、少なくとも3時期の変遷があったことが明らかである。

土壙については検出された11基のうち第1、2土壙内からは古銭（永楽通宝、寛永通宝）が出土しており、また第2土壙内からはこのほかにキセルの破片、方鏡、棺の一部が出土している。これらの出土遺物からみて第1、2土壙の年代は近世以降と考えられ、その性格は墓と考えられる。他の土壙から遺物は全く出土しなかったが、第1、2土壙に類似する第3、4、5、6、10土壙についても墓の可能性が考えられる。第7、8土壙については年代、性格共に不明である。第9土壙は遺物は出土しなかったが、第1住居跡との重複関係によって表杉の入式期以前と考えられる。

溝についても第1溝を除くと遺物の出土は全くなく時期を決めることができない。しかし住居跡との重複関係によって第1、3、10溝は塩釜式期以降と考えられる。

井戸跡についても同様に年代を決めることができない。

Ⅴ．遺跡の構成

今回の調査によって弥生時代～江戸時代の遺物が出土した。この中で住居跡等の遺構が発見されたのは古墳時代、平安時代、江戸時代である。しかし今回の調査区東側隣接地が県営ほ場整備事業に伴って調査が行なわれており、宇南遺跡全体の様相がある程度把握できるようになっている。

縄文時代

今回の調査区から縄文時代の遺物は出土しなかったが、ほ場整備事業に伴う調査では台地北斜面から縄文前期初頭の遺物包含層が、また台地北側縁辺では縄文晩期の土壙が発見されている。同時期の住居跡は検出されなかったが、生活の場が近くにあったことを示唆するものである。

弥生時代

今回の調査区からは住居跡の堆積土から４点の破片が出土したのみであるが、ほ場整備事業に伴う調査では弥生中期大泉式土器、後期天王山式土器が出土しており、また天王山式期の土壙（壺棺墓）が検出されている。住居跡の発見こそなかったものの、弥生時代の人々が宇南遺跡において生活を営んだ可能性を指摘するのに十分である。

古墳時代

住居跡が１軒発見された。またほ場整備事業に伴う調査では３軒発見されている。３軒の住居跡のうち２軒は台地南側縁辺部にあり、今回の第２住居跡に近接している。他の１軒は台地北東縁辺部で発見されている。また同時期に属する方形周溝が台地北側縁辺部中央で発見されている。台地東側が未調査であるので、住居跡がどのような広がりをもって配置されたのか十分に明らかでないが、少なくとも台地の南と北の縁辺に構築されていることは指摘できそうである。また、方形周溝とは構築される「場」に相違を見せていた可能性もある。

平安時代

今回の調査とほ場整備関係の調査で計８軒の住居跡が発見されている。それらの配置をみると台地の西、南、北側縁辺から台地中央に広がりをみせている。おそらく台地上全面が生活の場として使用されていたと思われるのである。また住居の細部をみると大部分のカマドは住居壁外の地山を掘り抜いて、あるいは掘り込んで構築されている。これも本遺跡の特徴とみることができる。

中世

明らかに中世のものといえる遺構、遺物は発見されなかったが、ほ場整備事業に伴う調査で中世のものと考えられる井戸跡・土壙が検出されており、中世陶器片、板碑などが出土してい

る。前にも述べた通り、本遺跡は当初館跡の可能性が指摘されていたものである。台地の南、東、西を巡る堀状の水田部分は、人工的な堀であるという痕跡は見い出し得なかったけれども、自然地形を一部改変して利用された可能性が指摘されている。掘立柱建物跡は今回の調査で7棟、ほ場整備事業に伴う調査で3棟検出されており、台地平坦部のほぼ全域に分布するようである。いずれも年代決定資料を欠くため所属時期を決めかねるが、周囲を湿地で囲まれた台地上に、掘立柱建物、井戸、溝、土壙などを配した中世の館跡の存在が考えられる。なお県内の中世館跡の調査で、平坦部から掘立柱建物跡が検出されているものに、黒川郡大和町御所館、同八谷館、黒川郡大衡村駒場小屋館があり、館に関連するとみられている持長地遺跡でも発見例がある。しかし本遺跡第2掘立柱建物跡のように5間×3間の4面に庇をもつ建物は類例がないようである。

近世以降

明らかに土壙墓といえるものがいくつかあり、またそれに類似する土壙も多い。台地の一部は近世以降になって墓地として使用されたことを示している。

〔引用参考文献〕

氏家和典（1957）：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯

白鳥良一（1971）：「東北自動車道関係遺跡発掘調査概報－持長地遺跡－」『宮城県文化財調査報告書』第24集

藤沼邦彦（1971）：「東北自動車道関係遺跡発掘調査概報－大橋遺跡－」『宮城県文化財調査報告書』第24集

藤沼邦彦（1973）：「東北自動車道関係遺跡発掘調査略報－八谷館跡－」『宮城県文化財調査報告書』第31集

宮城県教育委員会（1974）：「東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅰ－西野田遺跡－」『宮城県文化財調査報告書』第35集

宮城県教育委員会（1975）：「宮城県文化財発掘調査略報－御所館跡－」『宮城県文化財調査報告書』第40集

宮城県教育委員会（1975）：「宮城県文化財発掘調査略報－駒場小屋館跡－」『宮城県文化財調査報告書』第40集

小牛田町教育委員会（1976）：『山前遺跡』

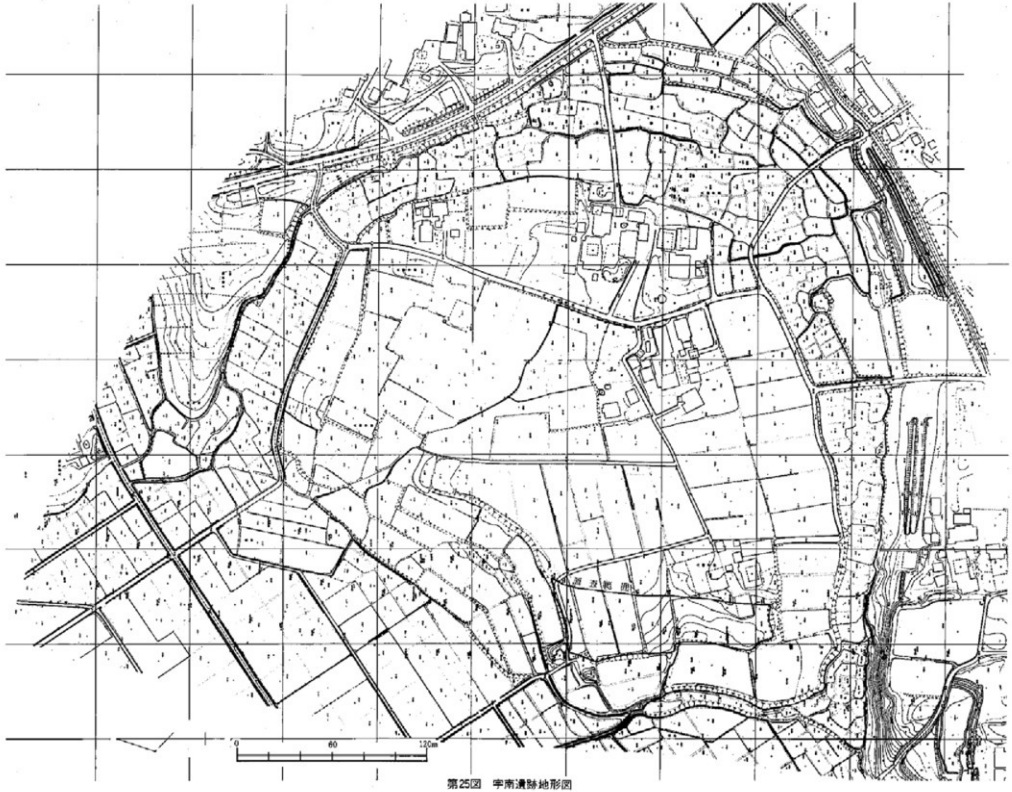
小井川和夫・手塚均（1978）：「宮城県文化財発掘調査略報－糠塚遺跡－」『宮城県文化財調査報告書』第53集

小野寺祥一郎（1979）：「宮城県文化財発掘調査略報－宇南遺跡－」『宮城県文化財調査報告書』第57集

斉藤吉弘（1979）：「宇南遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第59集

破片集計表（図示遺物は除く）

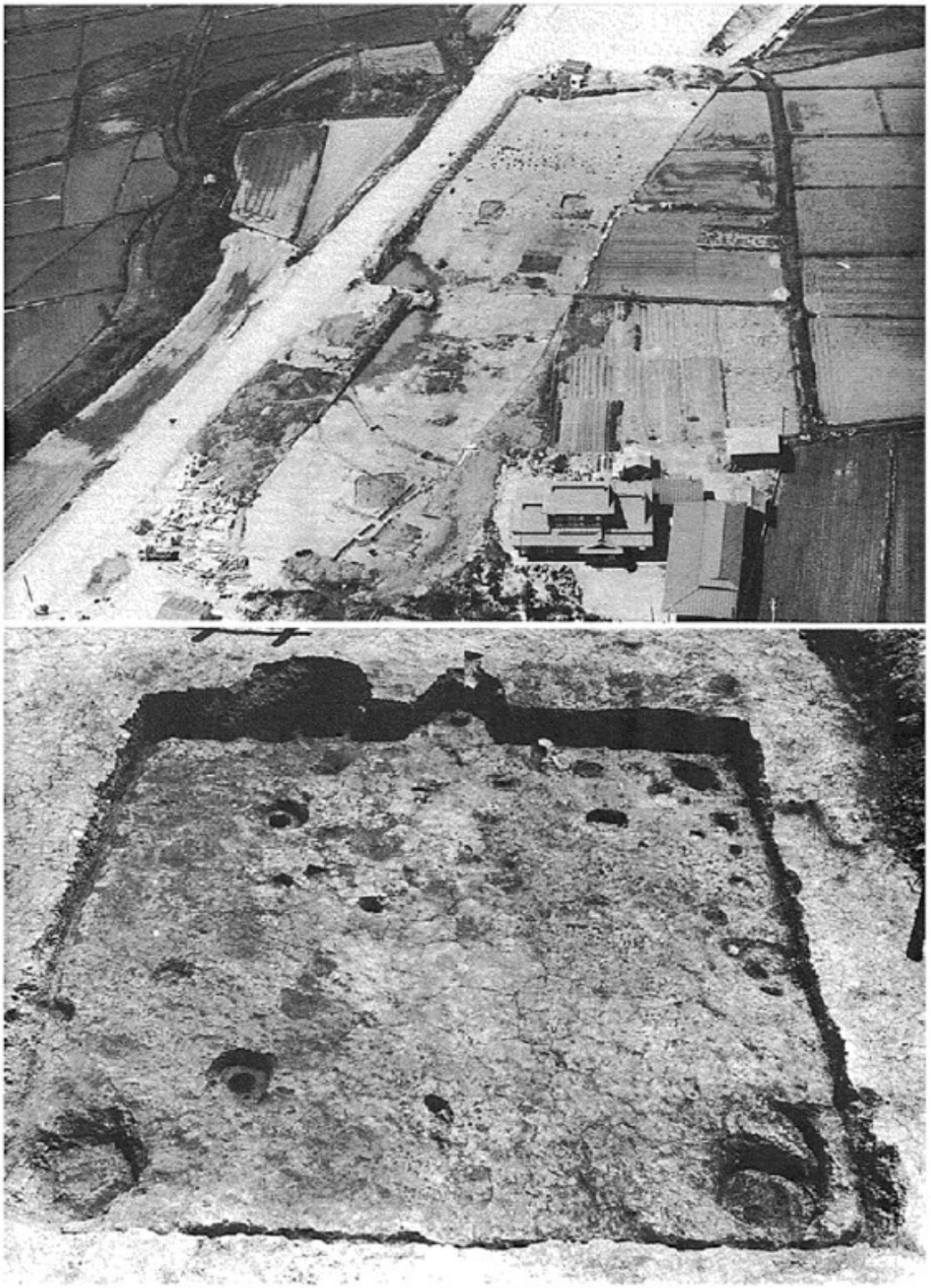
			第1住居跡								第2住居跡					3住	第4住居跡						第1溝	井戸	表採地点不明
			堆積土1	2	3	カマド内	床	ピット6	ピット7	ピット21・22	堆積土1	2	3	4	床	ピット5周	ピット2	堆積土3	4	カマド内	煙道	床	ピット1			
土師器	口縁部	ミガキ—ミガキ										1														
		ロクロ—ミガキ(黒色)	1				1		1								1									
		不明—ミガキ										1														
		—ミガキ(黒色)	1		1																					
		—不明	1		1		1																			
	体部	ミガキ—ミガキ										1			1											
		ミガキ(丹)—ミガキ(丹)	1																							
		不明(丹)—ミガキ(丹)			1																					
		—不明			1																					
		不明—ミガキ										1														
		—ミガキ(黒色)	1	3	2																					
		—不明	1	5	2		2																			
	底部	ケズリ		2		1																				
		糸切リ					1																			
		不明		1			1								1							1				
	口縁部	ミガキ—ミガキ													1											
		—横ナデ											1													
		横ナデ—横ナデ		2	1		1				3	1			1				1	2						
		刷毛目—横ナデ											2		1											
		—不明									1															
		ナデ—ヨコナデ											1													
		ロクロ—ロクロ					1																			
		不明—横ナデ											1													
		—不明		3	1						3	1														
	体部	ミガキ—ミガキ											1		3	1										
		—ナデ											3		2											
		—不明											2	1												
		ナデ—ヘラナデ											1				1									
		—刷毛目																1								
		—ナデ								2	1	2														
		—不明				1	4					1	1													
		刷毛目—ヘラナデ	1																							
		—ナデ	1	2								4	4													
		—刷毛目	1		4																					
		—不明	8	1	3		1					1	3													
		ケズリ—ヘラナデ				3	2		1				1					1					1			
		—ナデ	4	1	1	1	5					2						1	1				2			
		—刷毛目	3	8	2	1		1										2								
		—不明	3	3	8	13	10	1		1								1	2	1	1		4			
		ケズリ(丹)—不明			1																					
		ロクロ—ナデ				1																				
		—ロクロ	1	1														1					1			
		—不明		1		1																				
		ロクロ・ケズリ—ロクロ																					1			
	底部	不明—ミガキ										1		1												
		—ヘラナデ										1														
		—ナデ			1	2						2	1						2		1		1			
		—刷毛目	2	5	2										1								1			
		—不明	38	59	14	19	42	8		2	25	80	19	34	18		1	15	14	17	5	3	7	5		
		ケズリ			1	1					1															
		ナデ																					1			
		木葉		1																			1			
		不明		4					1		1	1	1	1								1				
須恵器	体部	ミガキ—ミガキ										1														
		ケズリ—ミガキ			1																					
		—不明			1																					
	底部	ミガキ—ナデ										1														
	壺類	ミガキ—ナデ										1														
	台脚	ミガキ(丹)—ナデ												1												
	口縁		8		3		4											2		1						
	体部				1		1												1							
	底部	ヘラ切リ																		1						
		不明			1														1							
		台付																						1		
瓦	口縁																1									
	体部	平行—ナデ		1		1														1			1			
		—ヘラナデ																					1			
		—青海波																				1				
		平行・ケズリ—ナデ		1																			1			
	底部	ケズリ—ナデ																						1		
		不明—ヘラナデ																						1		
	垂体		1																							



第25図　宇南遺跡地形図

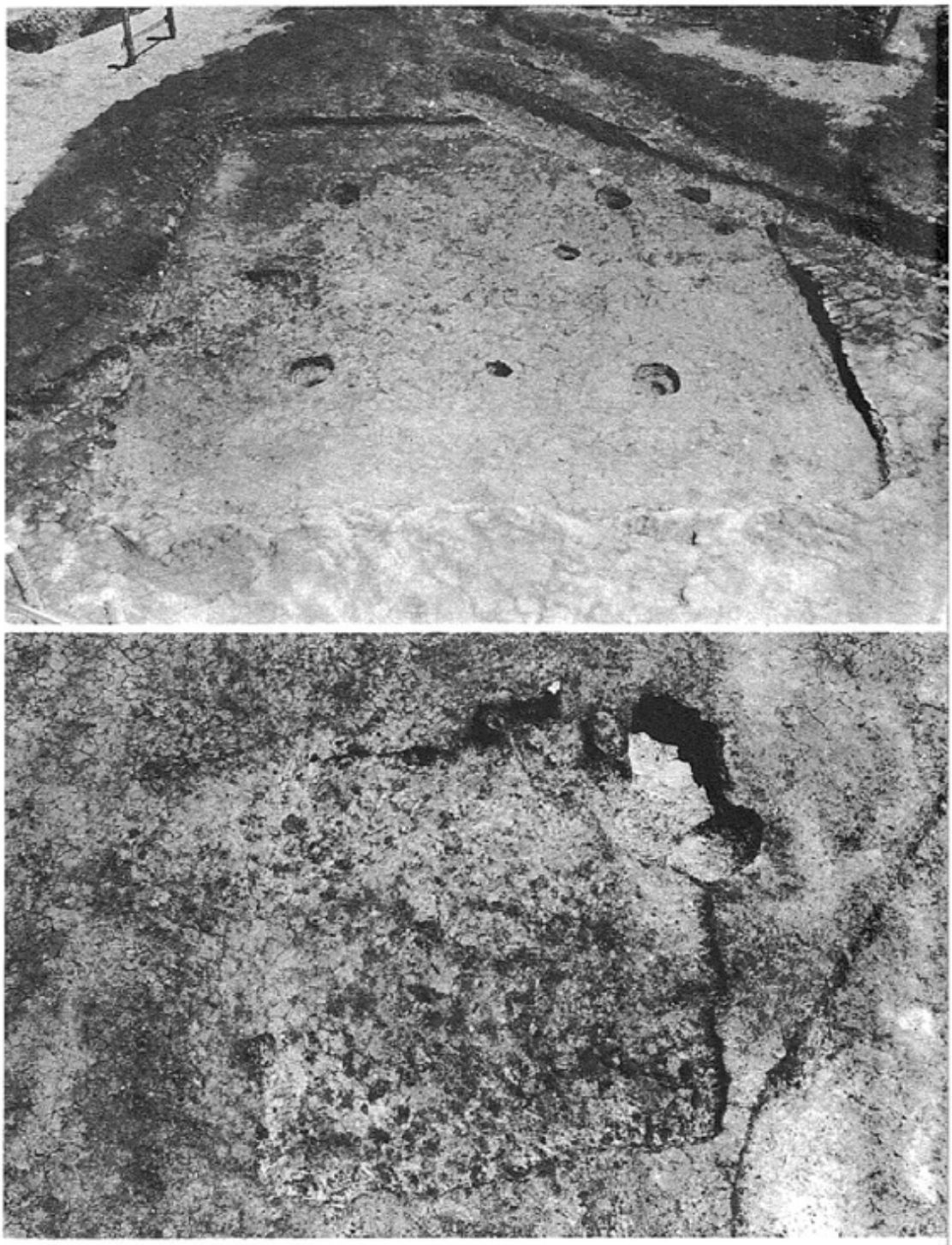
写　真　図　版

図版1　遺跡遠景（航空写真）



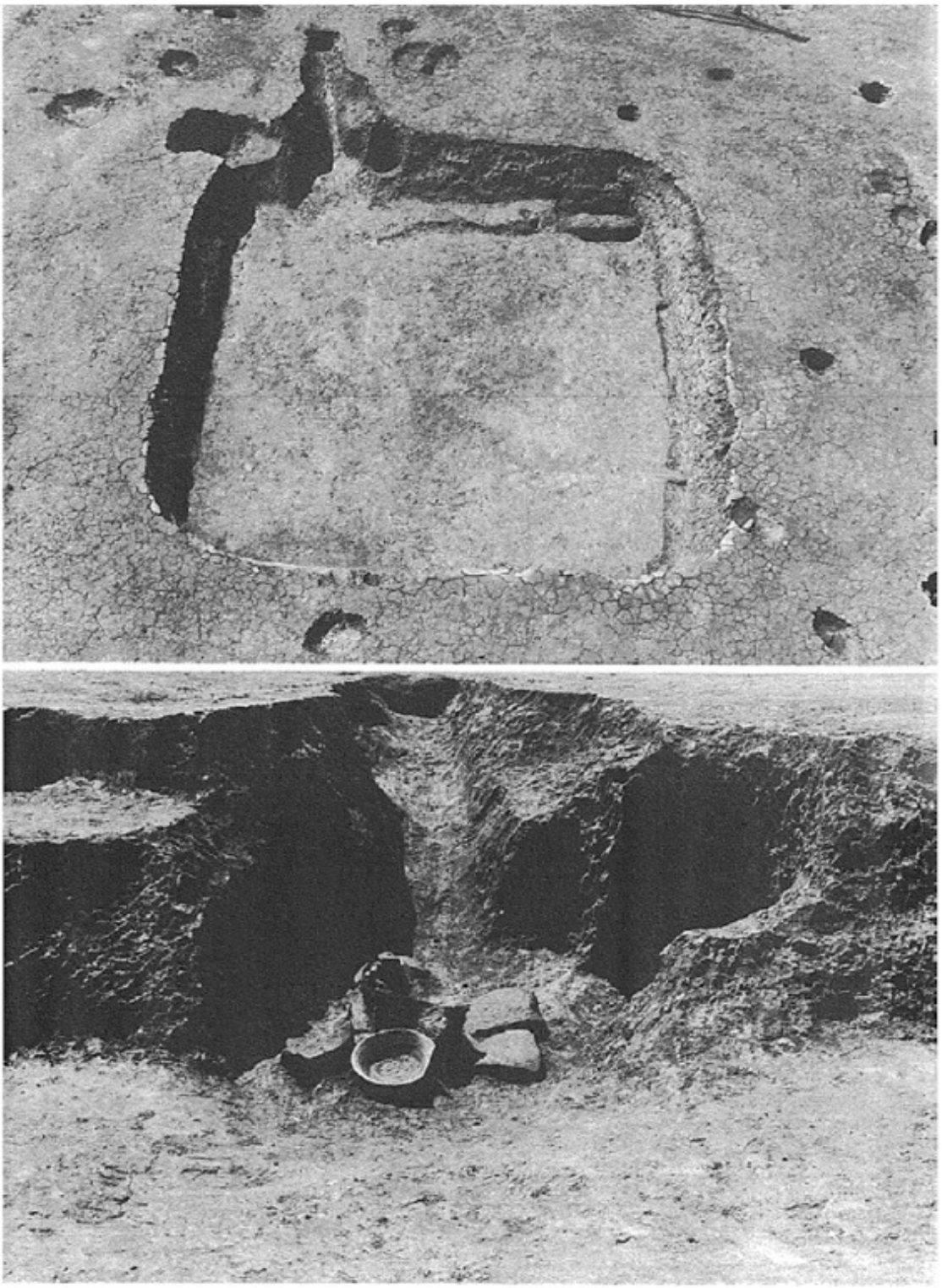
図版2

上：遺跡遠景（南方上空から）
下：第1住居跡



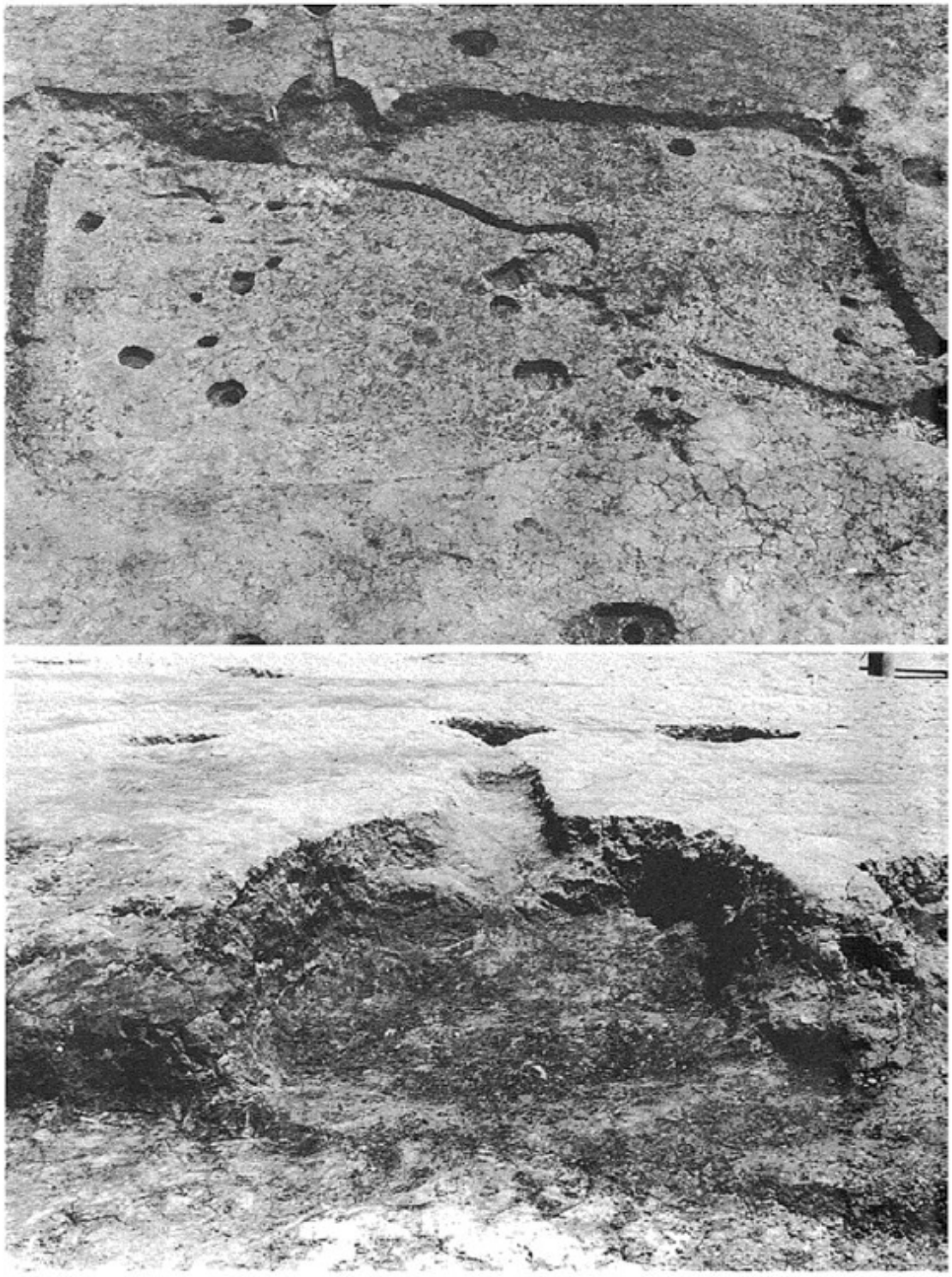
図版３

上：第２住居跡
下：第３住居跡



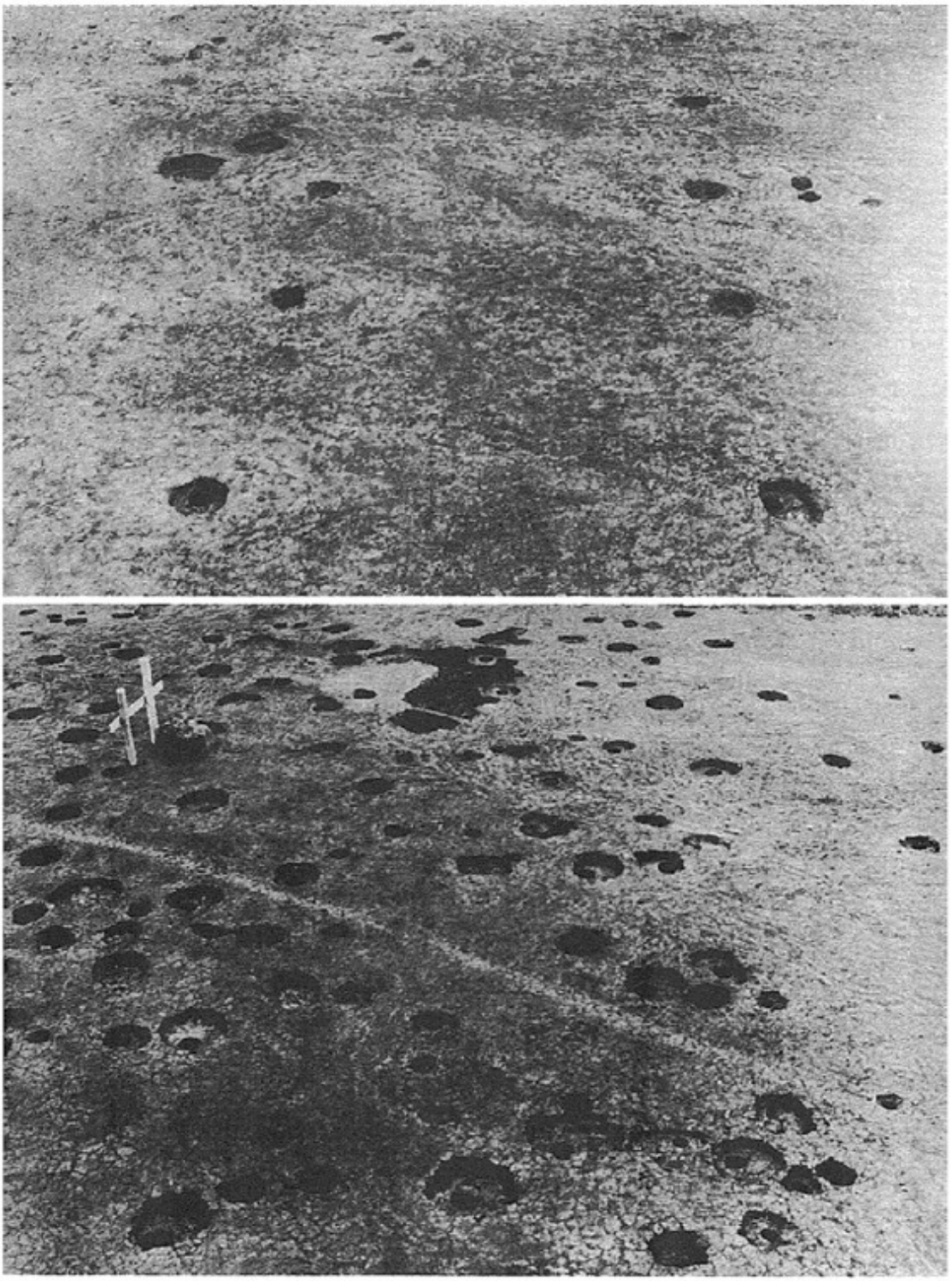
図版4

上：第4住居跡
下：同カマド



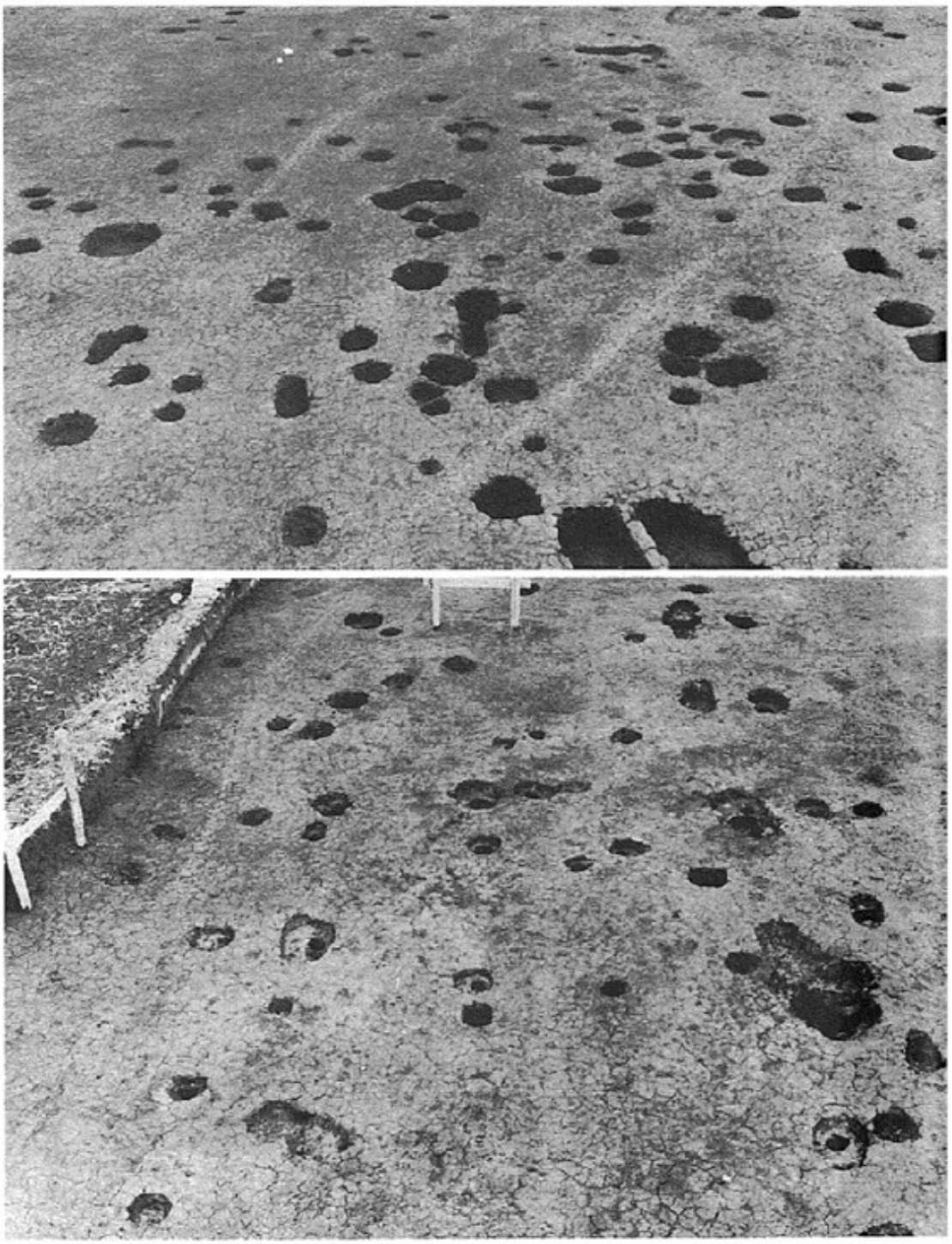
図版5

上：第5住居跡
下：同カマド



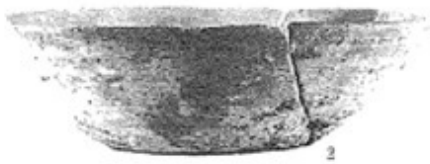
図版6

上：第1掘立柱建物跡
下：第2・3掘立柱建物跡



図版 7

上：第 4・6 掘立柱建物跡
下：第 5・7 掘立柱建物跡



1：第6図3　6：第24図1　11：第15図3
2：第5図1　7：第12図1　12：第7図4
3：第15図5　8：第6図6　13：第6図5
4：第6図4　9：第7図5　14：第15図2
5：第12図2　10：第15図4　（縮尺不同）

図版8　出土遺物(1)

1：第9図1　5：第17図
2：第24図2　6：第6図2
3：第9図2　7：第5図3
4：第14図1　8：第5図2
（縮尺不同）

図版9　出土遺物(2)

1：第5図5　5：第14図2
2：第14図3　6：第14図4
3：第6図1　7：第16図1
4：第5図4　8：第16図2
(縮尺不同)

図版10　出土遺物(3)

(10) 有賀峰(ありがみね)遺跡

目　　次

Ⅰ．遺跡の立地と周辺の遺跡 …… 559
1．遺跡の立地 …… 559
2．周辺の遺跡 …… 559
Ⅱ．調査の方法と経過 …… 560
1．発掘区の設定 …… 560
2．調査の経過 …… 562
3．実測図の作成 …… 562
Ⅲ．発見された遺構と遺物 …… 562
1．基本層序 …… 562
2．竪穴住居跡 …… 564
3．その他の遺構 …… 572
4．基本層序第Ⅰ・Ⅱ層出土遺物 …… 573
Ⅳ．遺構・遺物に関する問題点 …… 575
1．遺構についてのまとめ …… 575
2．出土土器の分類 …… 576
3．出土土器の組み合わせと年代 …… 579
4．竪穴住居跡の年代 …… 581
Ⅴ．ま　と　め …… 581

調 査 要 項

遺　跡　名：有賀峰遺跡
遺 跡 記 号：BM（宮城県遺跡地名表登載番号：42019）
遺跡所在地：宮城県栗原郡若柳町字有賀峰
調査対象面積：約2,000㎡（発掘面積：873㎡）
調 査 期 間：昭和49年8月5日～9月6日
調　査　員：宮城県教育庁文化財保護課
　　白鳥良一、真山悟、田中則和、青沼一民
調査協力者：柳瀬和幸（東北大学学生）
　　佐藤正人（東北学院大学学生）
　　門馬俊彦（　　〃　　）

Ⅰ．遺跡の立地と周辺の遺跡

1. 遺跡の立地

有賀峰遺跡は、栗原郡若柳町字有賀峰にあり、若柳町役場より北西約 4.9mの地点に位置している。

遺跡の所在する若柳町は、宮城県の北部、栗原郡の東部にあたり、北は岩手県西磐井郡に接している。若柳町は東西 8.5㎞、南北 13.3㎞の南北に長い形をしめすが、北部には栗駒火山地東麓と北上山地西縁との間にのびる標高約 30～250mほどの磐井丘陵が占め、その南側には迫川によって形成された標高約 7～13mの扇状地性低地が開けている。迫川の北岸には流路に添って幅約 500mの自然堤防が西北西から東北東にのびている。さらに、迫川の南岸、町の南西部には花山村、岩出山町からのびてきた築館丘陵の裾部が樹枝状に発達している。南部には伊豆沼や長沼等の湖沼地帯がみられる。

さて、遺跡は磐井丘陵の裾部から北へ約 300mほど入った尾根上に立地する。この尾根の西側には地田川によって形成された開析谷が北側へ深くくい込み、東側には小さな谷が北東方向へのびている。

遺跡の面積は約8,000 ㎡、一部が畑地、他の大部分は山林および原野となっている。標高は30～42mである。

2. 周辺の遺跡

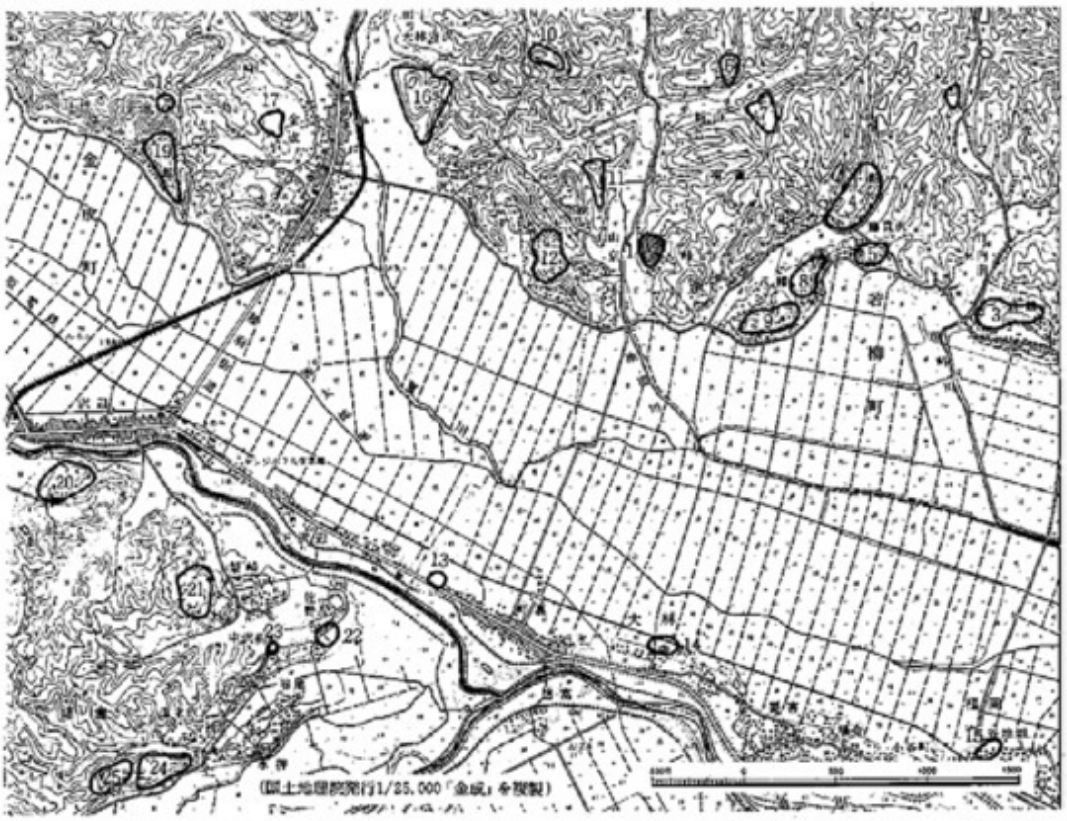
遺跡は町の北部を占める磐井丘陵の尾根上に立地しているが、この丘陵には縄文時代から中世にかけての遺跡が数多く分布している。この他にも迫川の流域や伊豆沼北岸に遺物散布地・貝塚群、横穴古墳群等の存在が知られている。

旧石器時代、縄文時代早期の遺跡は現在のところ未発見であるが、縄文時代前期のものとして、迫川の流域に接する上堤遺跡や有賀峰遺跡の北東1.8㎞の地点にある木売沢遺跡が町内最古の遺跡として知られている。中期に入ると伊豆沼北岸畑岡地区に隣接する湖沼地帯の周辺部に淡水産貝種による貝塚群が形成されはじめる。特に敷見貝塚や内谷川貝塚では中期から晩期にかけての豊富な遺物が発見され、長期間にわたって伊豆沼周辺が生活の場として活用されていたことを知ることができる。

弥生時代に属する遺跡は少数である。内谷川貝塚、柴ノ脇遺跡から、ごく少数の遺物が発見されているにすぎない。

古墳時代に入るとその影響は東北地方にも及び、穴横穴古墳群や大立横穴古墳群にその遺構をみることができる。

また、古代に属する遺跡は数は少ないが、大林遺跡や新山遺跡があり、金成町佐野遺跡や志



第1図　遺跡の位置

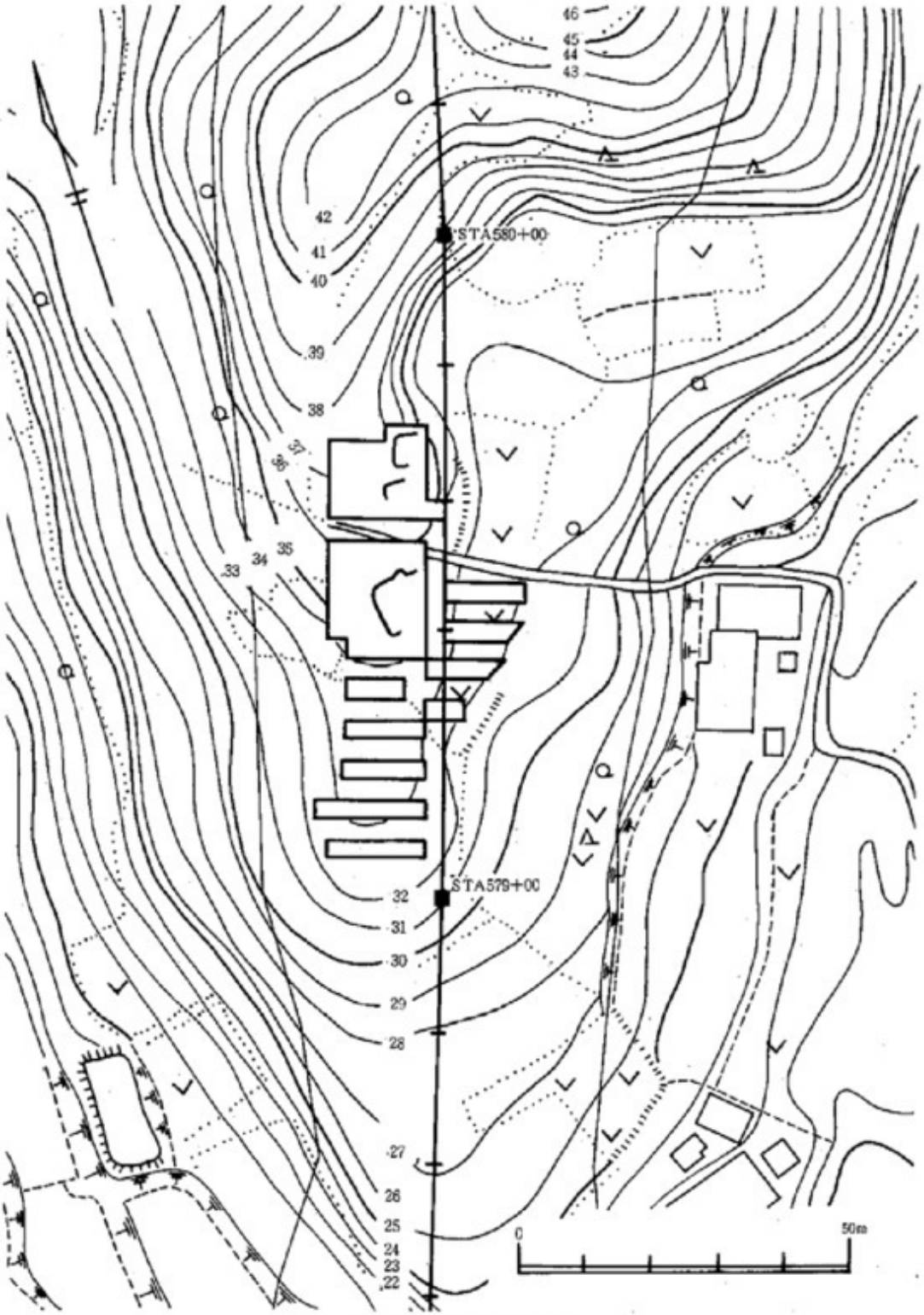
波姫町糖塚遺跡は奈良時代から平安時代にかけての集落跡である。

中世に属する遺跡は城館がある。北部丘陵地帯には、武鎗館や馬見館等の山城が多く、その他の地域には大林館や新井山館等平城や平山城が多い（第1・2図）。

Ⅱ．調査の方法と経過

1．発掘区の設定

自動車道は遺跡の中央部をほぼ南北に縦断してのびているため、中心杭ＳＴA579＋60 と 579＋40 を結ぶ線の延長線を南北の基準線（南北軸）とし、次にＳＴA579＋60 を起点として南北軸に直交させ、東西の基準線（東西軸）とした。南北・東西軸とも一辺が 3m四方のグリッドを一単位として、南北軸はアラビア数字、東西軸はアルファベットで標示した。南北軸ではＳＴA579＋60 の北側を 16 区、南側を 17 区とし、東西軸ではＳＴA579＋60、西側をH区、東側を



第2図　遺跡地形図

Ⅰ区として表示している（第3図）。

2. 調査の経過

調査は昭和49年8月5日に開始した。

まず、遺跡内の調査対象地域約2,000㎡の下刈りを行なった後、基本層序ならびに遺構の分布状況を把握する目的で、東西に長い探索トレンチをC～L－13～34区内に設定し、発掘区のほぼ中央部より南北に粗掘りを行なっていった。

遺跡内には基本層序が3枚に分かれるトレンチがあり、この様な所では層位ごとに遺構の検出、遺物の採集に努めた。8月上旬には、相ついで竪穴住居跡が検出され、この様な所では、遺構の全体的把握のためトレンチを拡張した。9月上旬には遺構の精査、写真撮影、実測図の作成等が完了、9月6日にすべての調査が終了した。検出された遺構は竪穴住居跡3軒、土壙5基、暗渠配水遺構2基、発掘面積は873㎡に達した。

3. 実測図の作成

住居跡・土壙については、1/20の平板実測図を作製し、暗渠配水遺構については、1/100の略図を残した。同時に竪穴住居跡の堆積土については、1/20の断面図を作製した。遺構が検出されなかったトレンチでは、1/200のグリッド配図を作製し、レベル、掘り下げ面までの深さ、その他必要事項を記録した。

また、いくつかのトレンチでは基本層序把握のために1/20の断面図を作成した。

Ⅲ. 発見された遺構と遺物

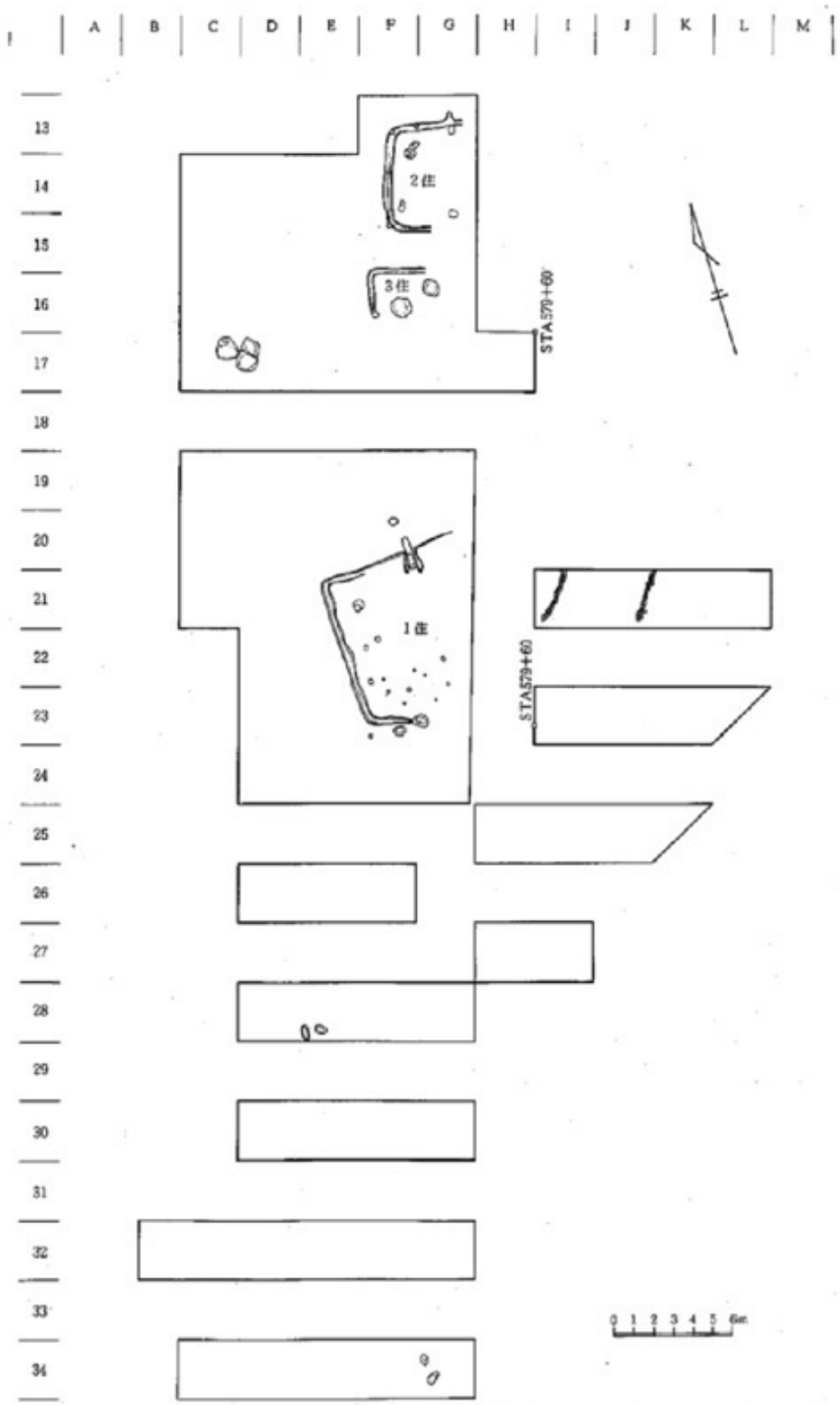
1. 基本層序

遺跡は丘陵の尾根上に立地しているが、発掘区内からは次の3枚の層が検出された。

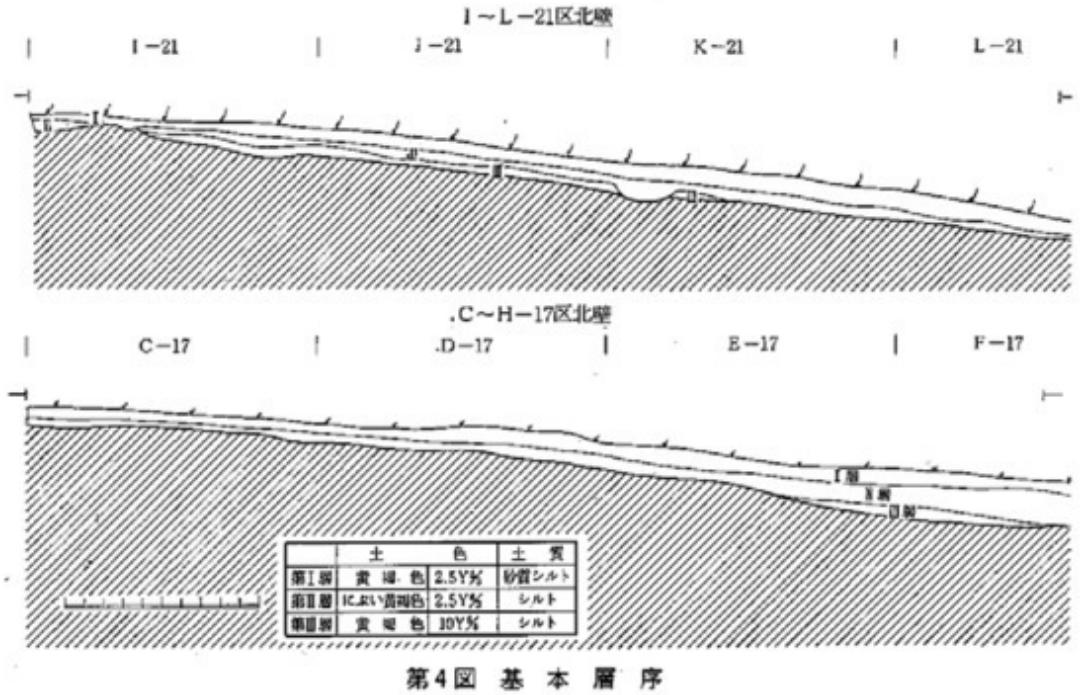
第Ⅰ層:表土である。遺跡全域では土地利用の相違によって若干異なった様相をしめしている。草木や耕作による攪乱をうけている。土色は黄褐色（2.5Y・$^{5}/_{3}$）、土質は砂質シルトである。層の厚さは10～20㎝である。土師器、須恵器、陶磁器等の破片が出土している。

第Ⅱ層：斜面に分布し、一部攪乱をうけている。土色はにぶい黄褐色（2.5Y・$^{6}/_{3}$）、土質はシルトである。層の厚さは10～40㎝であるが、20㎝前後が標準的である。土師器、須恵器の破片が出土している。

第Ⅲ層：発掘区の北側で顕著に認められた。発掘区の南側では、一部狭い範囲から検出され層も薄い。土色は黄褐色（10Y・$^{5}/_{6}$）、土質はシルトであり地山と近似している。遺物は出土していない。


A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
2住
3住
1住
STA.579+60
STA.579+60
0 1 2 3 4 5 6m

第3図　遺構配置図



第4図　基本層序

2. 竪穴住居跡

発掘区の北半部から3軒の竪穴住居跡が検出された。

第1住居跡

〔遺構の確認〕　発掘区の中央部よりやや北側のE～G－20～23区の地山面で確認された。遺構の東半部は既に削平されている。

〔平面形・規模〕　平面形は東半部を欠くが、残存部分では方形を基調としたものである。西辺の長さは約7.5mと大規模なものである。北壁では約7.1m、南壁では約2.2m遺存している。

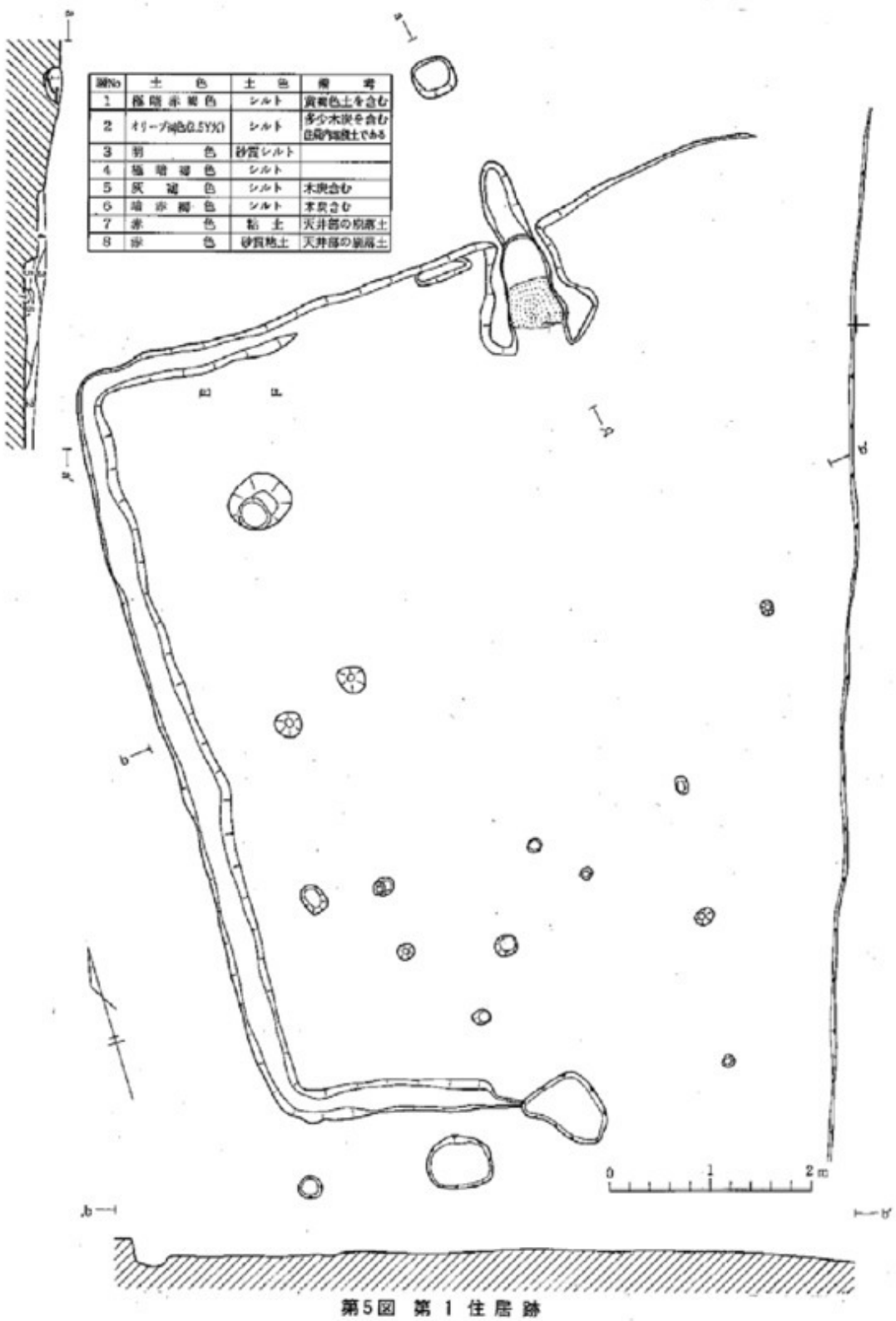
〔壁〕　地山を壁とする。壁の立ち上りは全般的に急角度である。残存壁高は北西隅で最も高く、床面から37㎝を計る。東側へいくにしたがい低くなる。

〔床面〕　地山を床とする。ほぼ平坦で固い面を成す。南側へいくぶん傾斜している。

〔柱穴〕　床面および住居跡と推定される範囲から大小16個のピットが検出されたが柱痕跡を伴うものはなく、また、ピット相互の配置に規則性が見い出せず主柱穴については不明であった。

〔周溝〕　北西隅から南西隅にかけて合計約12.3mの長さで壁添いに検出された。幅は20～40㎝程度で、床面からの深さは4～10㎝である。断面形は逆台形を呈す。

〔カマド〕　北壁に付設されている。燃焼部と煙道部から成る。燃焼部左右側壁は壁から約1.1～1.2mほど張り出し、残存部での高さは床面から約20㎝である。左右の側壁は粘土構築され



図No	土色	土色	備考
1	極暗赤褐色	シルト	黄褐色土を含む
2	オリーブ褐色(2.5Y3/2)	シルト	多少木炭を含む 住居内埋積土である
3	明色	砂質シルト	
4	極暗褐色	シルト	
5	灰褐色	シルト	木炭含む
6	暗赤褐色	シルト	木炭含む
7	赤色	粘土	天井部の崩落土
8	赤色	砂質粘土	天井部の崩落土

第5図 第1住居跡

たものであるが、手前に土師器甕を倒位で置き、芯あるいはオサエとして使用している。燃焼部底面は 50×110 cm、焚き口付近には 50×50 cmの範囲で焼け面が認められ、一部側壁にも達している。煙道は長さ 80 cm、最大幅 35 cmで、先端には直径 41 cm、深さ 17 cmの煙出しピットを伴っている。煙道と燃焼部底面との間には約 10 cmの段差が認められる。

〔伴出遺物〕　遺構に伴うと考えられる遺物にはカマド内、側壁に用いられた甕、煙道部煙出しピット、床面から出土した土師器坏・甕、手捏土器、須恵器坏等がある（第6・7図）

〈土師器〉

坏（第7図1～10）いずれも製作にロクロを使用しないものである。底部形態には丸底のもの（3～5）と平底のもの（1・2・6～10）がある。丸底のものの器形は体部下端に段を有すもの（5）と底部から内弯気味に立ち上がるもの（3・4）がある。平底のものは、底部に体部と画す稜をもつものであり、いずれも内弯気味に立ち上がる器形である。外面の器面調整は摩滅のため不明なものが多いが、横ナデ後ヘラミガキされているもの（4・5）やヘラケズリが施されているもの（3）もある。3・4・5は底部全面にヘラケズリが及んでいる。内面はいずれもヘラミガキ、黒色処理が施されている。

甕（第6図）2・3は底部を欠損しているが、3点とも長胴形のものと考えられる。1は口縁部に最大径を有し、底部から外傾して立ち上がった後、体部中央から上端にかけて直立気味になる。口縁部は外傾する。器面調整は口縁部内外面とも横ナデ、体部は内外面に刷毛目が施されている。底部には木葉痕を残す。2は口縁径と体部最大径がほぼ同一である。体部中央がややせばまった後、頸部の段に達する。頸部はほぼ直立し、口縁部は外傾する。口縁部内外面の器面調整は1と同じである。3は口縁部に最大径がある。体部下端から外傾して立ち上がり体部上端で膨らんだ後、頸部に向って内弯し段に達する。頸部はほぼ直立し口縁部は外傾する。器面調整は、口縁部内外面横ナデ、体部外面軽いケズリ、内面にヘラナデが施されている。

手捏ね土器（第7図12）台付のものである。台部はほぼ直立し、体部下端から口縁部にかけて外傾する。外面の体部下端から台部にかけオサエの跡が認められた。

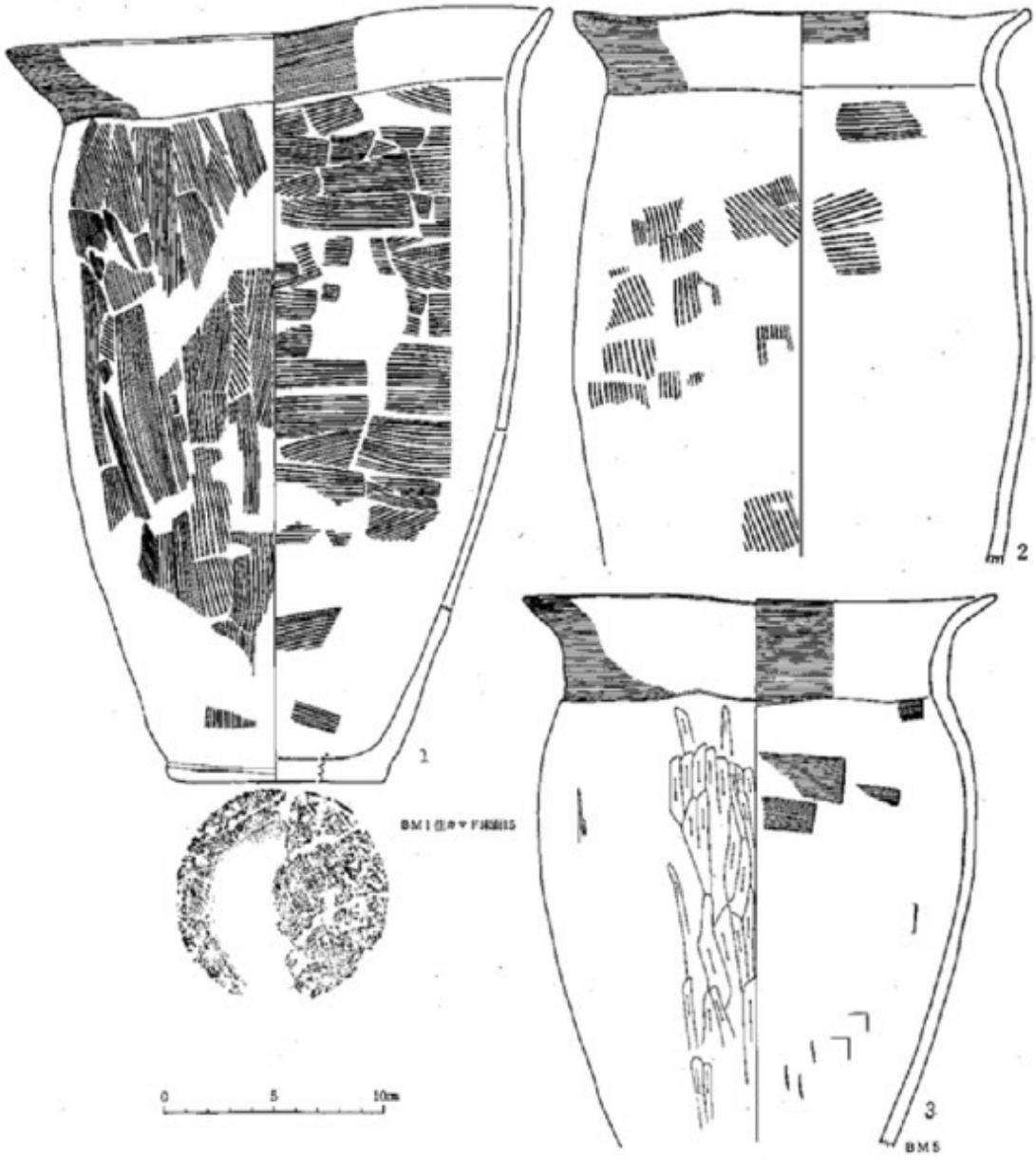
〈須恵器〉

坏（第7図11）底部のみの破片である。回転ヘラ切り技法によって切り離された後底面に一部手持ちヘラケズリが加えられている。

〔堆積土出土遺物〕　堆積土からは土師器甕、須恵器坏、蓋、鉄鏃、砥石等が出土した。

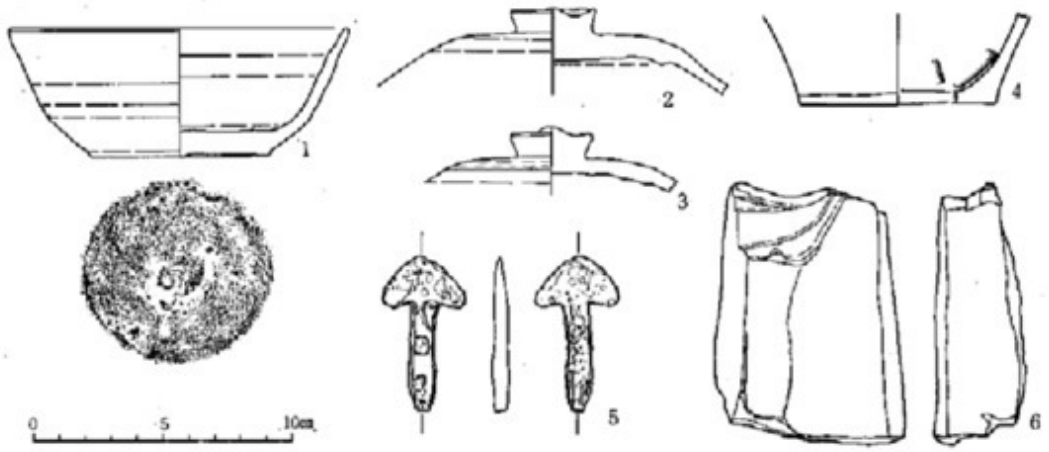
〈土師器〉

甕（第8図4）体部をわずかに残す底部破片である。外面の器面調整は磨滅のため不明であるが、内面には一部ヘラナデの痕跡が認められる。底部に木葉痕を残す。



第6図　第1住居跡出土遺物

第７図　第１住居跡出土遺物



第８図　第１住居跡堆積土出土遺物

〈須恵器〉

坏（第８図１）体部下端が幾分外側へ張り出しながら外傾する器形である。底部切り離し技法は回転ヘラ切りであり、再調整は加えられていない。

蓋（第８図２・３）いずれも口縁部を欠損している。宝珠形のつまみを有し、つまみの中央部が周縁部より高く形造られている。３はつまみの基部周辺に回転ヘラケズリが加えられている。

鉄鏃（第８図５）身と茎からなる。身は三角形を呈し、基部は内側へ幾分入り込んでいる。

茎は断面が長方形である。

砥石（第９図６）安山岩製のもので砥面は３面である。

第２住居跡

〔遺構の確認〕　発掘区の最北端Ｆ～Ｇ－13～15区の地山面で確認された。遺構の東半部は既に削平されている。

〔平面形・規模〕　平面形は残存部分でみると方形を基調としたものである。西辺の長さは約5mである。北壁では3.7m、南壁では2.2m遺存している。

〔壁〕　地山を壁とする。壁の立ち上がりは北壁では壁面に近いが、他は緩やかである。残存壁高は最も高い北壁で50㎝である。北・西壁とも崩落が少なく保存は良好である。

〔床面〕　地山を床とする。わずかに凹凸が認められ、南側へいくぶん傾斜している。

〔柱穴〕　床面および住居跡と推定される範囲から17個のピットが検出された。そのうちピット１・２・９には柱痕跡が認められる。柱穴と考えられるものは、深さがほぼ同一で対角線上に配置されるピット２・４・８・９であり、またピット１・２は重複していることから柱の建てかえがあった可能性がある。更に、壁沿いに５個のピット（10～14）が検出され、これらは直径・深さが同様であり、規則的に配置されているとはいえないが、壁柱穴の可能性がある。

〔周溝〕　東半部を除いて壁沿いにみられる。幅は20～40㎝、床面からの深さは５～20㎝である。断面形は逆台形を呈する。

〔カマド〕　北壁に付設されている。遺存状態は良くない。燃焼部と煙道部から成る。燃焼部は、側壁がすでに失われ、痕跡だけが認められる。燃焼部底面の左側には直径約20㎝、深さ５㎝ほどのピットがあり、右側には土師器甕が遺存していた。燃焼部底面には35×45㎝の範囲に焼け面が認められた。煙道部は長さが40㎝で、住居壁に接する部分で広く、先端へいくにしたがいせばまる。

〔伴出遺物〕　遺構に伴うと考えられる遺物には、右側壁に用いていたと考えられる土師器甕、床面出土の須恵器坏がある。

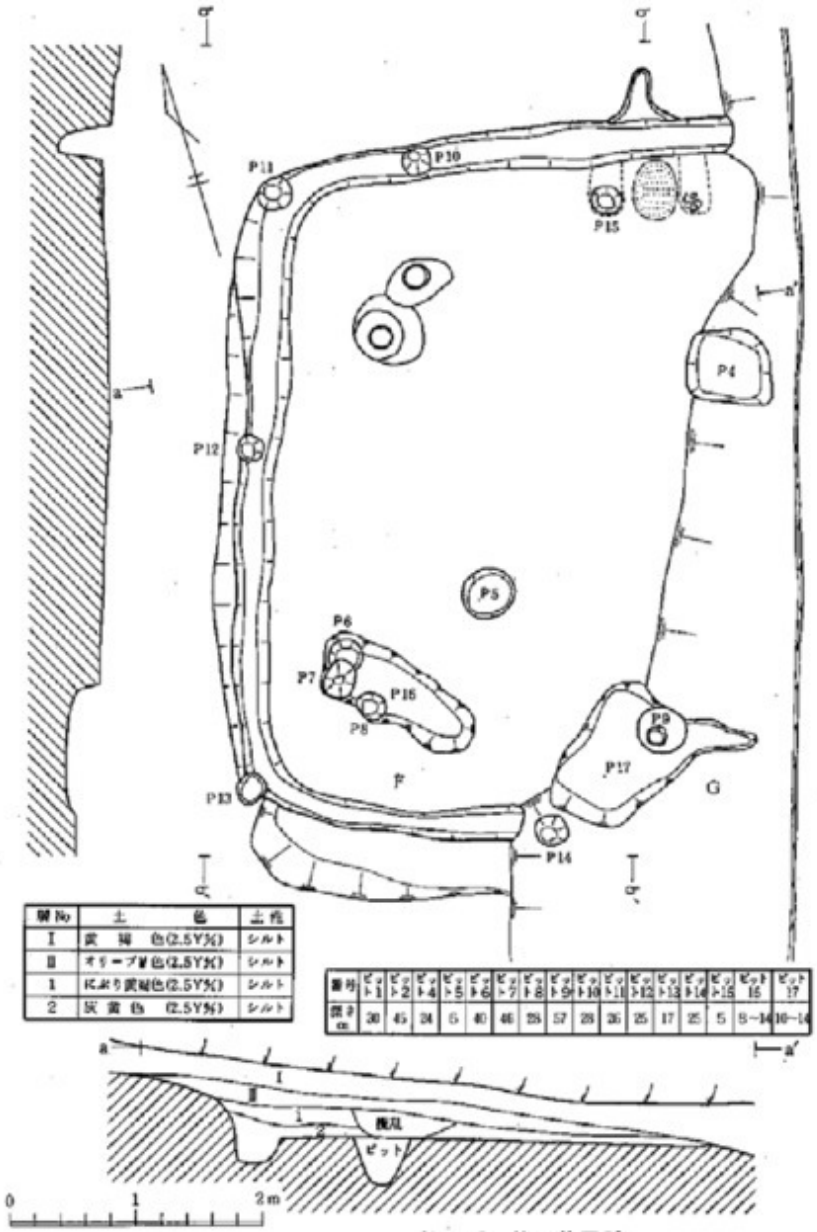
〈土師器〉

甕　一括遺物であるが、復原はできなかった。破片を観察すると頸部に軽い段を有するものである。器面調整は口縁部内外面が横ナデ、体部は外面に刷毛目、内面にヘラナデが認められた。

〈須恵器〉

坏（第10図１・２）器形は体部下端から直線的に外傾し、口縁部で外反する。底部切り離し技法はいずれも回転ヘラ切りであり、再調整は加えられていない。

〔堆積土出土遺物〕　堆積土からは土師器甕、須恵器坏、高台付坏等が出土した。



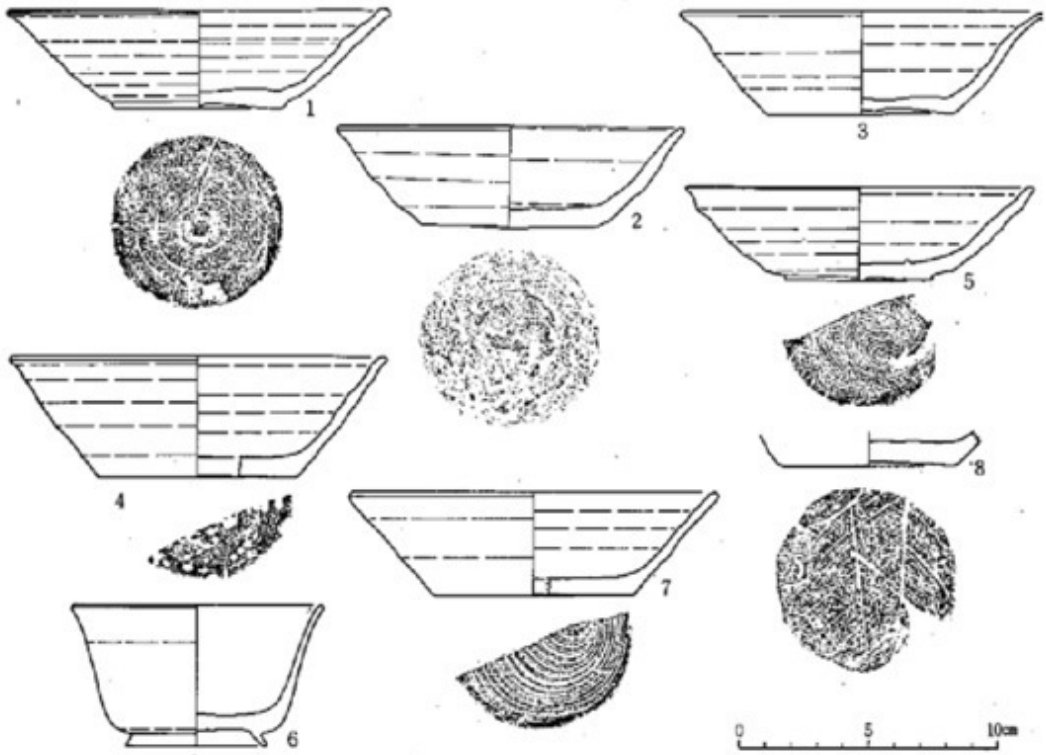
第9図　第2住居跡

〈土師器〉

甕（第10図8）底部のみの破片であり、木葉痕が残っている。

〈須恵器〉

坏（第10図3～5・7）器形は底部から外傾して口縁部に達するもの（3・4・7）と体部下端が幾分外方へ張り出し内弯気味に立ち上がるもの（5）がある。底部切り離し技法は3・4が回転ヘラ切り、5・7が回転糸切りである。いずれも再調整は加えられていない。



第10図　第２住居跡出土遺物

高台付坏（第10図6）坏部に短い高台を付したものである。器形は体部下端が丸味をおびて内弯し、外傾して立ち上がった後に端部が外反する。底部には入念なナデが施され、切り離し技法は不明である。

第３住居跡

〔遺構の確認〕　Ｆ～Ｇ－15～16区の地山面において確認された。削平によって遺構の大半は失われ、北西隅が現存しているにすぎない。遺構の範囲内から土壙が２基検出された。

〔平面形・規模〕　平面形は残存部から方形を基調としたものと推定される。北壁では2.8m、西壁では2.2mほど遺存している。

〔壁〕　地山を壁とする。床面からの高さは最高部分で約20㎝、周溝の下端部からほぼ垂直に立ち上る。

〔床面〕　地山を床とする。わずかな起伏が認められる。

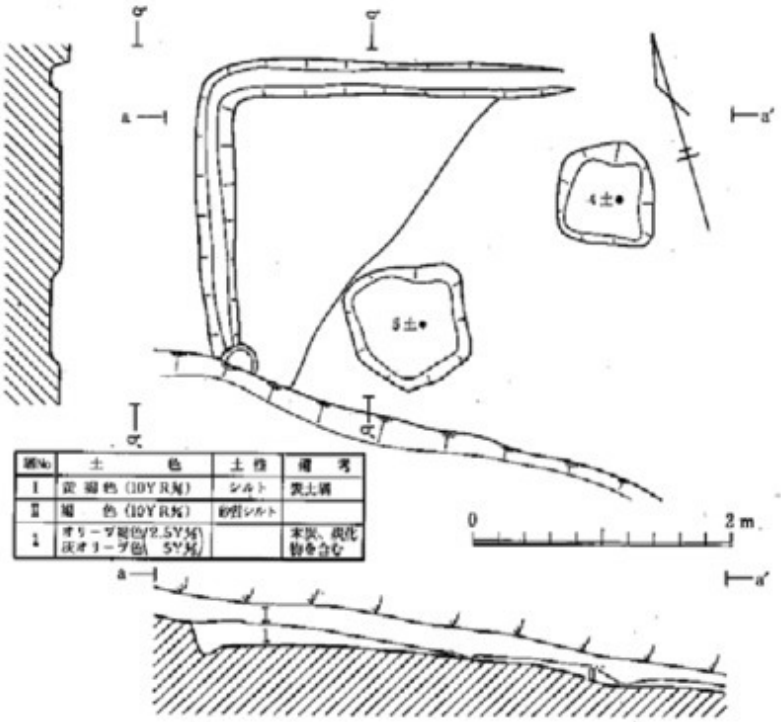
〔周溝〕　壁の残存部に添って認められた。残存長は約4m、幅は20～27㎝と一定し、床面からの深さは5～10㎝である。断面形は「U」字形を呈す。

〔柱穴・カマド〕　柱穴と思われるピット、カマドと思われる施設は検出されなかった。

〔伴出遺物〕　遺構に伴うと考えられる遺物には、床面から出土した器種不明の坏がある。

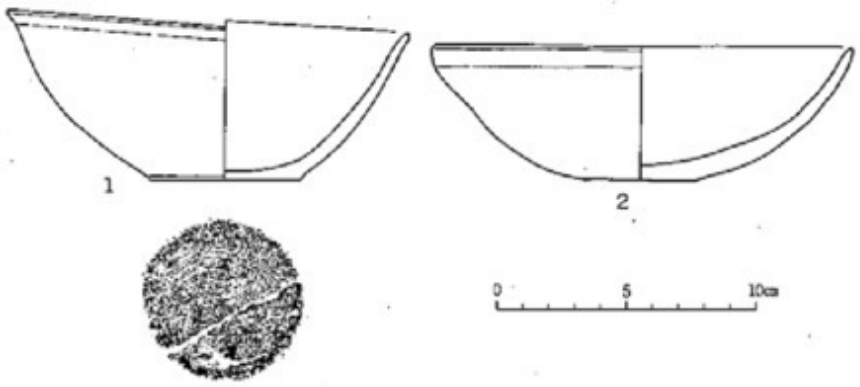
器種不明の坏（第12図）

製作にロクロを使用したものである。器面の磨滅が著しく、土師器であるか赤焼土器であるか判別できなかった。器形は体部下端から内弯ぎみに立ち上り口縁部で外傾するもの（1）と直立するもの（2）がある。前者は底部に回転糸切り痕を残している。



層No.	土色	土性	備考
I	淡褐色（10YR灰）	シルト	表土層
II	褐色（10YR灰）	砂質シルト	
1	オリーブ褐色（2.5Y灰） 淡オリーブ色（5Y灰）		木炭、焼化物を含む

第11図　第3住居跡・第4・5土壙



第12図　第3住居跡出土遺物

3. その他の遺構

竪穴住居跡のほかに、土壙5基、暗渠排水遺構2基が検出された。

①土壙

第1土壙－C17区の地山面で確認された。第2・第3土壙と重複し、第2土壙によって切られているが、第3土壙との新旧関係は不明である。平面形は直径1.1mの円形であり、深さは10～13cmである。壁の立ち上がりは緩やかである。底面には叺（かます）が敷かれていた。

第2土壙－C17区の地山面で確認された。第1土壙を切っている。平面形は長軸90cm、短軸80cmの方形を呈し、深さは約20cmである。壁の立ち上りは急である。底面には叭が敷かれていた。埋め土から人の毛髪が検出された。

第13図　土　壙

第13図　第1・2・3土壙

第3土壙－B～C17区の地山面で確認された。第1土壙と重複する。またピットによって切られている。平面形は長軸1.2m、短軸75cmの長方形を呈し、深さは8～15cmである。壁の立ち上がりは緩やかである。底面に叭が敷かれていた。

第4土壙（第11図）G-16区の地山面で確認された。平面形は長軸80cm、短軸75cmの方形を基調としたものである。地山面からの深さは7～12cmである。底面から人骨片が検出された。

第5土壙（第11図）F-16区の地山面で確認された。平面形は直径約1mの不整円形を呈す。地山面からの深さは約10cmである。出土遺物はなかった。

②暗渠排水遺構　I-21、J～K-21区から2基検出された。いずれも幅約20～40cmの掘り方に河原石を用いて配石したものである。I-21区のものは石の移動が少くほぼ原形を保っていると思われるが、J～K-21区から検出されたものは、削平などによって天井石が大部分崩落している。これらは、北側へのびるものと推定される。出土遺物がなく、造られた時期は不明である。

4. 基本層序第Ⅰ・Ⅱ層出土遺物

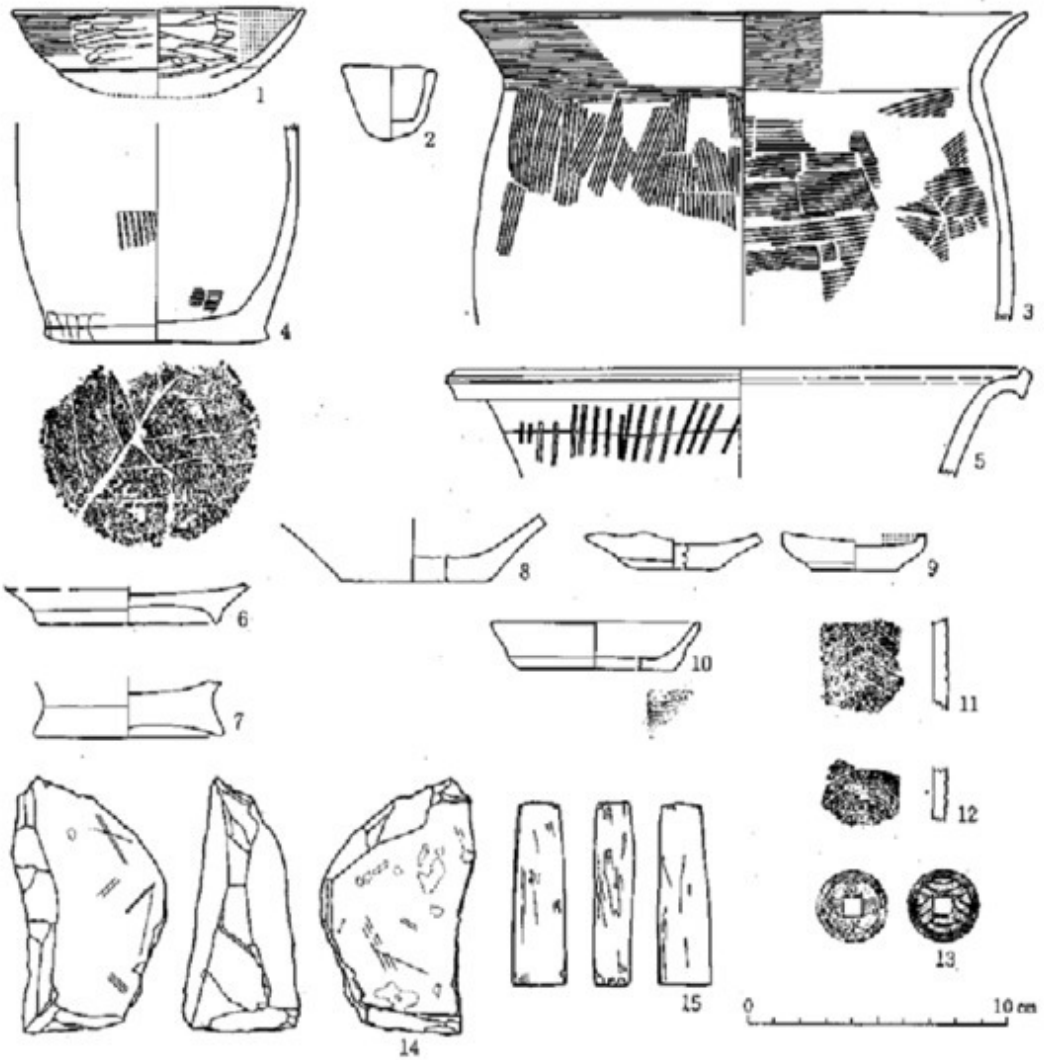
第Ⅰ・Ⅱ層からは、弥生土器、土師器（坏・甕・高台付坏・耳皿）、手捏ね土器、須恵器（坏・甕・壺）、赤焼土器（坏・燈明皿）、陶磁器、砥石、古銭などが出土している。ここでは、図示あるいは拓本を示した遺物について説明する。

弥生土器（第14図11・12）　器形は明らかでない。2本の平行沈線で円文・山形文が描かれている。

土師器（第14図1・3・4・6～9）

坏（1）　底部を欠くが丸底と推定され、体部に段がつく。器面調整は外面の段から上が横ナデの後ヘラミガキ、内面にはヘラミガキ・黒色処理が施されている。

甕（3・4）　3は体部下端から底部を欠く。最大径は口縁部に位置する。頸部に段はなく口縁部は外傾する。器面調整は口縁部の内外面とも横ナデ、体部内外面に刷毛目が施されている。4は体部下端から底部にかけての破片である。磨滅が著しいが、体部の内外面に刷毛目が観察される。



第14図　基本層序第Ⅰ・Ⅱ層出土遺物

高台付坏（6・7）　いずれも坏底部から台部の破片である。製作にロクロを使用している。6は坏底部に回転ヘラケズリが施されている。

手捏土器（第14図2）

器高よりも口縁径の大きいものである。底部は尖底に近い丸底である。

須恵器

甕（第14図5）　頸部から口縁部にかけての破片である。頸部は緩やかに外反して口縁部にいたり、口縁端は上・下方につまみ出されている。外面に平行タタキ目がみられる。

赤焼土器

燈明皿（第14図10）　体部に稜をもち、底部から稜まで外傾し、稜から口縁部にかけては一

度くぼんで外傾する。内面には黒く変色している部分が認められる。

砥石（第14図14・15）

石英安山岩質凝灰岩製のもの（14）と砂岩製のもの（15）が出土している。14は砥面が2面あり、端部に自然面を残す。砥面は平坦で擦痕が観察される。15は長方形で砥面は4面あり、端部は整形されている。砥面には擦痕がみられる。

古銭（第14図13）

寛永通宝である。直径2.8㎝、重さ4.2gの黄銅製であり、裏に波文がみられる。

Ⅳ．遺構・遺物に関する問題点

1．遺構についてのまとめ

本遺構跡からは竪穴住居跡3軒、土壙5基、暗渠配水遺構2基が検出された。ここでは竪穴住居跡と土壙について簡単にまとめてみた。

①竪穴住居跡

竪穴住居跡は3軒とも削平の著しいものである。平面形はいずれも方形を基調としたもので、規模は西辺で1住約7.5m、2住約5mでそれぞれ異っている。1住は、他の遺跡から検出された。竪穴住居跡と比べても大規模なものである。床面は、いずれも地山面であった。

柱穴については、主柱穴が検出されたのは2住だけで、対角線上に4個配置されていた。これらのピットのうちには、柱痕跡をもつ他のピットと重複しているものがあり、改築された可能性を示している。また、2住の壁添いからは5個のピットが検出され、床面からの深さ規模等の類似性から壁柱穴と考えた。壁柱穴を伴う住居跡は、金成町佐野遺跡、志波姫町山ノ上遺跡、御駒堂遺跡、古川市宮沢遺跡等から発見されている。今後、他の遺跡の例と比較し性格を検討してみたい。

カマドは、いずれも比高の高い北壁に付設され、他の遺跡にみられる一般例と同様である。

燃焼部の構築方法をみると、1住では側壁に芯あるいはオサエとして土師器甕を倒位で据えその後粘土で被覆したものである。2住は、側壁が遺存していなかったが、燃焼部底面の左側には芯を据えるための掘り方と思われるピット、右側壁には、土師器甕の破片が遺存しており1住と同様の方法で構築されたものであったと推測される。側壁に甕を用いてある住居跡は、宮崎町早風遺跡や佐野遺跡、御駒堂遺跡等多くの遺跡から発見されている。

②土壙

土壙の平面形は、円形、方形、長方形、不整円形を呈しそれぞれ異っている。規模は0.9～

1.2mと一定しない。地山面からの深さは7～15㎝と全体的に浅く掘り込まれている。これらの土壙の性格は、2土壙からは人の毛髪、4土壙からは人骨が検出されたことによって土葬墓であると考えられる。時期は重複しているものもあって同一ではないが、1・2・3土壙から検出された藁が残る時間を考慮すると近世以降のものであると考えられる。

2. 出土土器の分類

出土土器には弥生土器、土師器、須恵器、手捏ね土器、陶磁器等があるが、弥生土器、手捏ね土器は出土量が少く分類作業は行えない。また陶磁器はすべて破片であり、破片数を集計するに留めた。この項での分類作業は、器形の明らかな土師器坏、瓶等図示遺物を対象として行った。

①土師器

坏　今回出された土師器坏は、破片を含めて製作にロクロを使用していないものである。底部形態が丸底のものをA類、平底のものをB類として大別した。

A類　底部形態が丸底のものである。体部下端に段がつくものをⅠ類、中央部に段がつくものをⅡ類、体部に段を伴わないものをⅢ類として細分した。

ＡⅠ類　底部形態が丸底で、体部下端に段を有すものである。段の下端には、底部と画する稜が認められる。器面調整は、外面の段から上が横ナデ後ヘラミガキ、円面にはヘラミガキ、黒色処理が施されている。底部外面にヘラケズリが加えられている。

ＡⅡ類　底部を欠くが、体部下端の形態から、底部が丸底のものと判断した。体部中央に段を有す。器面調整は、外面の段から上が、横ナデ後ヘラミガキ、内面にはヘラミガキ、黒色処理が施されている。

ＡⅢ類　底部形態が丸底で、体部に段を伴わないものである。器面調整は、外面に横ナデ後ヘラミガキがなされるもの（ⅰ）と全面にヘラケズリが施されるもの（ⅱ）がある。内面にはヘラミガキ、黒色処理が施されている。

B類　底部形態が平底のものである。底部と体部を画す稜が認められる。器面調整は、外面は磨滅のため不明なものが多いが削るものにはヘラミガキが施されている。内面にはヘラミガキ、黒色処理が施されている。

甕　図示することができて分類可能な遺物は4点出土した。いずれも製作にロクロを使用していないものである。最大径の位置が口縁部にあるものをA類、口縁径と体部径がほぼ同一のものをB類として大別した。いずれも長胴の甕である。

A類　最大径の位置が口縁部にあり、頚部に段を有すものをⅠ類、頚部に段がないものをⅡ類として細分した。

ＡⅠ類　最大径の位置が口縁部にあり、頚部に段を有すものである。器面調整は、口縁部内

破片集計表

（図示遺物は除く）

種別	器形	部位	整面調整 外面—内面	1号住居跡 床面	1号住居跡 カマド内	1号住居跡 周溝	1号住居跡 覆土一十	1号住居跡 覆土一下	2号住居跡 床面	2号住居跡 カマド右側ピット	2号住居跡 カマド左側ピット	2号住居跡 ピット1	2号住居跡 ピット2	2号住居跡 周溝	2号住居跡 カマド内	2号住居跡 覆土一十	2号住居跡 覆土一下	表面	土壙 7	土壙 9	土壙 10	Ⅰ～Ⅱ層 Ⅰ層	Ⅰ～Ⅱ層 Ⅱ層	Ⅰ～Ⅱ層 Ⅹ	計
土師器	坏	口縁部	ミガキ(黒色)—ミガキ(黒色)																		1			1
			不　明—ミガキ												1						2	1		4
			—ミガキ(黒色)																		1	1		2
			—不　明												1						1			2
		体部	ミガキ(黒色)—ミガキ(黒色)																		1			1
			ケズリ—ミガキ(黒色)		2																1	2		5
			—不　明(黒色)	1											1									2
			不　明—ミガキ	4	1		1								1									7
			—ミガキ(黒色)		6		6					1				1					16	4		34
			—不　明		7										3				1		2	6		19
		底部	ケズリ																		1			1
			糸切																		3			3
			不　明												2						5	1		8
			台付																		1	1		2
	甕	口縁部	ヨコナデ—ヨコナデ				3	2	2	1				1	6	5					9	2		31
			ヨコナデ(丹)—ヨコナデ		1																			1
			—ヨコナデ(丹)													2								2
			ヨコナデ—不　明				2									1					3			6
			不　明—ヨコナデ	1		2	6	1					1		1	4			1		2			19
			—不　明	3	1		4	1	1	3			2	1	3	5			1		3	1	1	30
		体部	刷毛目—磨滅		3											1					7			11
			—ナデ・ヘラナデ		1					2						1						3		7
			—刷毛目(丹)																				1	1
			—不　明		2	1	1	2	1					1	1	2					6	2		19
			ケズリ—磨滅											1		3					2	2		8
			—ナデ・ヘラナデ				2	6							2	1					2	3		16
			—不　明				2		2						10	10			2	1	2	2		31
			軽いケズリ—磨滅								1				1	3					7			12
			—ナデ・ヘラナデ	3	3		8		2					1	5	3				2	1		28
			—不　明	4	2		5		2		1		1		2	18					18	4		57
			ミガキ—ナデ・ヘラナデ																		1			1
			—ミガキ																				1	1
			—不　明													2								2
			不　明—刷毛目		1		3	1						1		4								19
			—ナデ・ヘラナデ	9	1		13	1		7					1	5	1			11	1		50
			—ミガキ(黒色)													1					3			4
			—不　明	15	22	2	30	7	6	12	2	1	3	7	14	21	54	2		2	70	35	2	307
			—不　明(丹)													1								1
			不　明(丹)—不　明												1									1
		底部	水簸調	1	3		2								1						3		1	10
			糸切調																		4			4
			ケズリ				1														2	3		6
			不　明		3		2	1							1	4		1			2	4		18
須恵器	坏	口体	ロクロ—ロクロ	4	6		4							1	2	15				1	6			25
		底部	ヘラ切				1								2	10					8			34
			ケズリ												2	2					2			7
			不　明												2									2
	甕	口頸部	不　明—ナデ													3					1			1
		体部	—平行				2														1			3
			—青海波												1						8	4	1	14
			—ナデ	1									2		1	3					1			4
			—オサエ												1	2					4		1	11
			—不　明													1					3		1	4
			ケズリ—ナデ																		2			3
			—ロクロ																		2	1		3
			ロクロ—ナデ													3					1	1		2
		底部	—ロクロ				2								2	1					4	1		4
			不　明—ナデ																		4	2		11
			—不　明																		1			1
	壺	体		1											1						1	3		4
瓷器系陶器	坏	口						1						1									1	3
		体												1		2					4			7
		底												1							1	1		3
		高台																						
陶器	甕	口																			2			2
		体																			2			2
	擂鉢	口																			5			5
		体																			2	1		3
緑釉	椀	口																			1			1
		体																			3	1		4
		底																			1	1		2
	皿	底																			1	2		3
計				47	65	5	100	23	16	25	2	4	3	13	25	76	173	3	1	7	2	266	101	10	968

外面とも横ナデ、体部では、外面に軽いケズリ、内面にヘラナデが施される。

AⅡ類　最大径の位置が口縁部にあり、頸部に段がないものである。器面調整は、口縁部内外面とも横ナデ、体部では内外面に刷毛目が施されている。

B類　口縁径と体部径がほぼ同一で、頸部に段を有するものである。器面調整は、口縁部内外面とも横ナデ、体部では、内外面に刷毛目が施される。

②須恵器

坏　回転ヘラ切り技法によって切り離されたものをA類、回転糸切り技法によって切り離されたものをB類と大別した。

A類　回転ヘラ切り技法によって切り離されたものである。底部に再調整が加えられるものをⅠ類、再調整が加えられないものをⅡ類として細分した。

AⅠ類　回転ヘラ切り技法によって切り離され、底部に手持ちヘラケズリが加えられるものである。

AⅡ類　回転ヘラ切り技法によって切り離され、再調整は加えられていない。

B類　回転糸切り技法によって切り離され、再調整は加えられていない。

3. 出土土器の組み合わせと年代

①出土土器の組み合わせ

出土土器は、前項のように分類されたが、各住居跡について共伴関係を示すと次のようになる。

	土師器		須恵器坏	器種不明坏
	坏	甕		
第1住居跡	AⅠ・AⅢ・B	AⅠ・AⅡ・B	AⅠ	
第2住居跡			AⅡ	
第3住居跡				土師　赤焼

以上から、土師器坏、甕、須恵器坏との共伴関係が指摘できるものは、第1住居跡に限られる。第1住居跡からは、ロクロ不使用の土師器坏、甕と底部切り離し技法が回転ヘラ切りの須恵器が共伴している。第2住居跡からは土師器坏が出土せず、土師器瓶の破片と回転ヘラ切りによる須恵器坏が共伴しているにすぎない。第3住居跡については、ロクロ使用、底部切り離し技法が回転糸切りによる器種不明の坏が出土しているが、他の遺物が出土せず、共伴関係について指摘することはできない。

②出土土器の年代

出土土器の年代は、絶対年代を明示する遺物が出土しなかったことにより、編年的方法によって検討してみたい。

出土土器のうち、土師器坏ＡⅠ、ＡⅢ、Ｂ類、土師器甕ＡⅠ、ＡⅡ、Ｂ類、須恵器坏ＡⅠ類として分類したものは、第１住居跡からの伴出遺物であり、同一時期のものである。

これらの中で、土師器坏ＡⅠ、ＡⅢ類として扱ったものは、東北地方南半部における土師器編年上の「国分寺下層式」期に属するものであるといえる。「国分寺下層式」期に属する坏型土器は製作にロクロは使用されず、器形は次の様な特徴を備えている。底部形態は丸底で、「腹部外壁に軽い段を形成」するもの（Ⅰ類）、この「段が底部近くに移行」したもの（Ⅱ類）、さらに「内反気味の口縁からそのまま底部に接続する」もの（Ⅲ類）（氏家：1957）等に分類されている。器面調整をみると、外面にヘラミガキ、まれにヘラケズリが施され、内面にはヘラミガキ、黒色処理が施されている。

土師器坏ＡⅠ、ＡⅢ類としたものは、すべて先にのべた範囲に含まれるもので、第２住居跡の伴出遺物土師器坏Ｂ類、土師器甕ＡⅠ、ＡⅡ、Ｂ類、須恵器坏ＡⅠ類の年代を「国分寺下層式」期に求めることができる。

次に、土師器坏ＡⅡ類としたものは、底部形態が丸底で、体部外面に段を有し、外面ヘラミガキ、内面ヘラミガキ、黒色処理が施され、先にのべた「国分寺下層式」期に属する特徴を備えている。

須恵器坏のうち、ＡⅢ類としたものは底部切り離し技法が回転ヘラ切りによるものであるが、「国分寺下層式」期には既に出現していることが知られている。Ｂ類としたものは、底部切り離し技法が回転糸切りによるものであり、通説に従えば「表杉ノ入式」期に属するものである。しかし、須恵器坏については、回転ヘラ切り、回転糸切り技法によって切り離されたものが、「国分寺下層式」期、「表杉ノ入式」期の相方にまたがって存在することが明らかとなっているために、ここでは伴出遺物がないためにいずれに属するものであるかを特定することはできない。

最後に、種別不明の坏については、底部に回転糸切り痕を残すものがあり、土師器あるいは赤焼土器であるとしても「表杉ノ入式」期に属するものであるということができる。

（註２）糠塚遺跡の例による。

4. 竪穴住居跡の年代

竪穴住居跡の年代は遺構に伴う出土遺物の年代に求めることができる。しかし、第１住居跡を除く、第２・第３住居跡では、出土遺物が少く、明確に年代を決めることはできなかった。

第１住居跡の年代は、出土遺物から「国分寺下層式」期に属するものであると考えられる。

第２住居跡の年代については、土師器坏が出土せずＡⅡ類として扱った須恵器坏の年代に求めなければならない。したがって、回転ヘラ切り技法が存続する「国分寺下層式」期以降ということができる。

第３住居跡の年代は、回転糸切り痕を残す土器が出土していることから「表杉ノ入式」期であると考えることができる。

Ⅴ. ま と め

1. 有賀峰遺跡は磐井丘陵の尾根上に立地する遺跡である。
2. 今回の調査で発見された遺構は竪穴住居跡３、土葬墓５、暗渠排水遺構２である。竪穴住居跡は古代に属するものであり、土葬墓は近世以降、暗渠排水遺構についての時期は不明であった。
3. 出土遺物は古代のものが大半をしめたが、弥生土器、近世以降の陶磁器、寛永通宝等もあって、遺跡は弥生時代、古代および近世以降に生活の場として利用されていたと考えられる。

引用・参考文献

氏家和典（1957）：『東北土師器の型式分類とその編年』「歴史第14輯」

小井川和夫、手塚均（1978）：『糖塚遺跡』「宮城県文化財調査報告書第53集」

加藤孝（1954）：『塩釜市表杉ノ入貝塚の研究』「宮城学院女子大学研究論文集Ⅴ」

白鳥良一、高野芳宏（1971）：『東山遺跡』「宮城県文化財調査報告書第24集」

早坂春一、阿部恵（1980）：『手取、西手取遺跡』
平沢英二郎、手塚均（1980）：『佐野遺跡』
} 「宮城県文化財調査報告書第63集」

図示土器分類表

（単位 cm）

図版番号	出土地点	種別	調整 内側	調整 外側	底部	器高	口径	体径	底径	分類番号
第6図1	1住 燃焼部右側壁	土師器 壺	刷毛目	刷毛目		35.6	24.0	21.6	4.6	A II
2	1住 燃焼部左側壁	土師器 壺	刷毛目	刷毛目			20.8	20.9		B
3	1住 煙道部ピット	土師器 壺	ヘラナデ	粗いケズリ			21.7	20.0		A I
第7図1	1住 カマド内	土師器 坏	ヘラミガキ→黒色処理			4.0	11.2		4.2	B
2	1住 カマド内	土師器 坏	ヘラミガキ→黒色処理			4.4	12.1		4.4	B
3	1住 カマド内	土師器 坏	ヘラミガキ→黒色処理	ヘラケズリ	ヘラケズリ	4.4	14.0		7.4	A III
4	1住 カマド内	土師器 坏	ヘラミガキ→黒色処理	横ナデ→ヘラミガキ	ヘラケズリ	4.1	13.3		6.8	A III
5	1住 カマド内	土師器 坏	ヘラミガキ→黒色処理	横ナデ→ヘラミガキ	ヘラケズリ	3.8	11.7		7.7	A I
6	1住 床面	土師器 坏	ヘラミガキ→黒色処理			3.9	11.6		4.5	B
7	1住 床面	土師器 坏	ヘラミガキ			4.1			4.4	B
8	1住 床面	土師器 坏	ヘラミガキ→黒色処理				11.8		5.5	B
9	1住 床面	土師器 坏	ヘラミガキ→黒色処理			3.8	11.9			B
10	1住 カマド内	土師器 坏	ヘラミガキ→黒色処理	ヘラミガキ		3.9	12.4			B
11	1住 床面	須恵器 坏	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ→手持ちベラ				7.8	A I
12	1住 カマド内	土師質 手捏土器		オサエ		3.4	3.8		2.8	
第8図1	1住 堆積土1層	須恵器 坏	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切り	5.0	13.1		6.9	A II
2	1住 堆積土1層	須恵器 蓋	ロクロ	ロクロ						
3	1住 堆積土1層	須恵器 蓋	ロクロ	ロクロ→回転ヘラケズリ						
4	1住 堆積土1層	土師器 壺	ヘラナデ		木葉痕				7.0	
第10図1	2住 床面	須恵器 坏	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切り	3.8	14.7		6.5	A II
2	2住 床面	須恵器 坏	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切り	3.9	13.4		6.7	A II
3	2住 堆積土1層	須恵器 坏	ロクロ	ロクロ		4.0	14.1		7.2	A II
4	2住 堆積土2層	須恵器 坏	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切り	4.7	14.6		7.6	A II
5	2住 堆積土2層	須恵器 坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	3.6	13.6		5.7	B
6	2住 堆積土2層	須恵器		ロクロ		5.5	9.8		5.4	
7	2住 堆積土2層	須恵器 坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	4.0	14.2		7.7	B
8	2住 堆積土2層	土師器 坏			木葉痕				5.6	
第12図1	3住 床面	器種不明 坏		ロクロ	回転糸切り	6.6	15.5		5.8	
2	3住 床面	器種不明 坏		ロクロ		5.2	16.3		4.3	
第14図1	D－26区 1層	土師器 坏	ヘラミガキ→黒色処理	横ナデ→ヘラミガキ			11.3			A II
2	G－21区 1層	土師質 手捏土器				2.8	3.7		1.8	
3	F－16区 2層	土師器 壺	刷毛目	刷毛目			22.0	21.0		A II
4	G－17区 2層	土師器 壺	刷毛目	刷毛目	木葉痕				8.2	
5	E－21区 1層	須恵器 壺	ロクロ	ロクロ 平行タタキ			22.7			
6	F－17区 2層	土師器 高台付坏	黒色処理	ロクロ					7.0	
7	× － ×	土師器 高台付坏	黒色処理						7.2	
8	× － ×	土師器 甑							5.6	
9	G－34区 1層	土師器 耳皿	黒色処理						3.3	
10	E－16区 2層	赤焼土器 焼塩壺			回転糸切り	1.8	8.0		6.0	

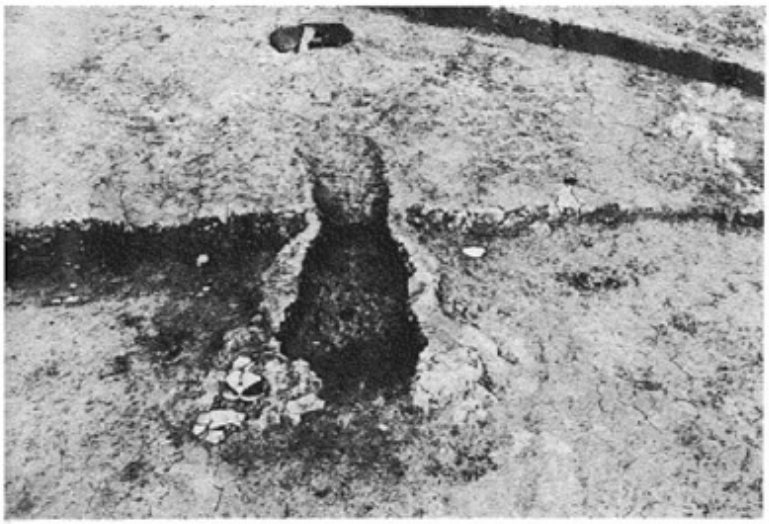
写　真　図　版

遺跡遠景
（南側から）

発掘前の状況
（南側から）

第1住居跡
（南西から）

図版1



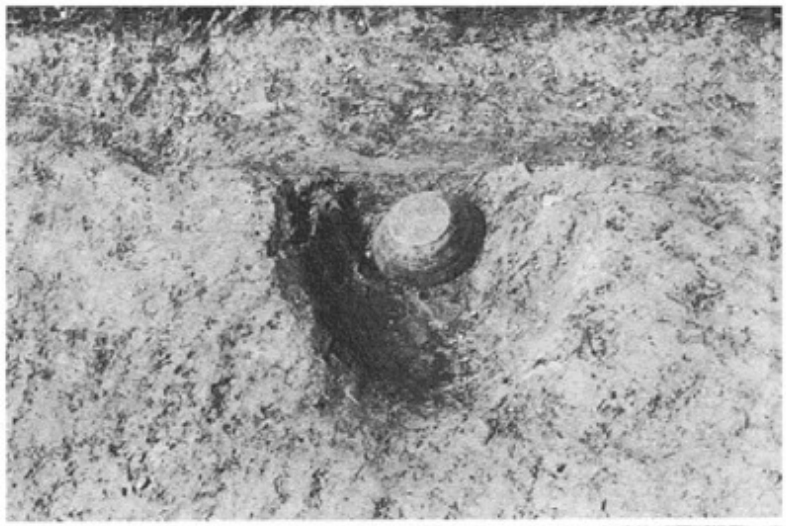
第1住居跡
カマド

同
検出状
遺物出土状況

第2住居跡
（北側から）

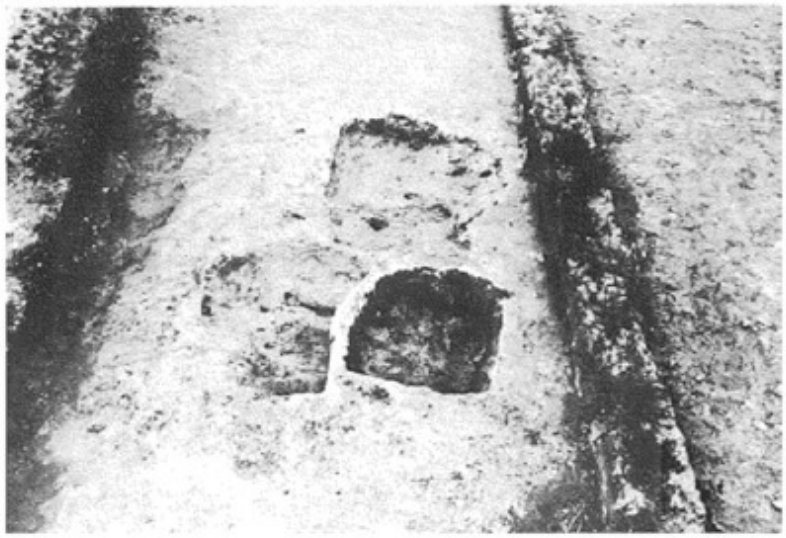
図版2

第２住居跡
遺物出土状況



第３住居跡
第４・５土壙
（南東側から）

第１・２・３土壙



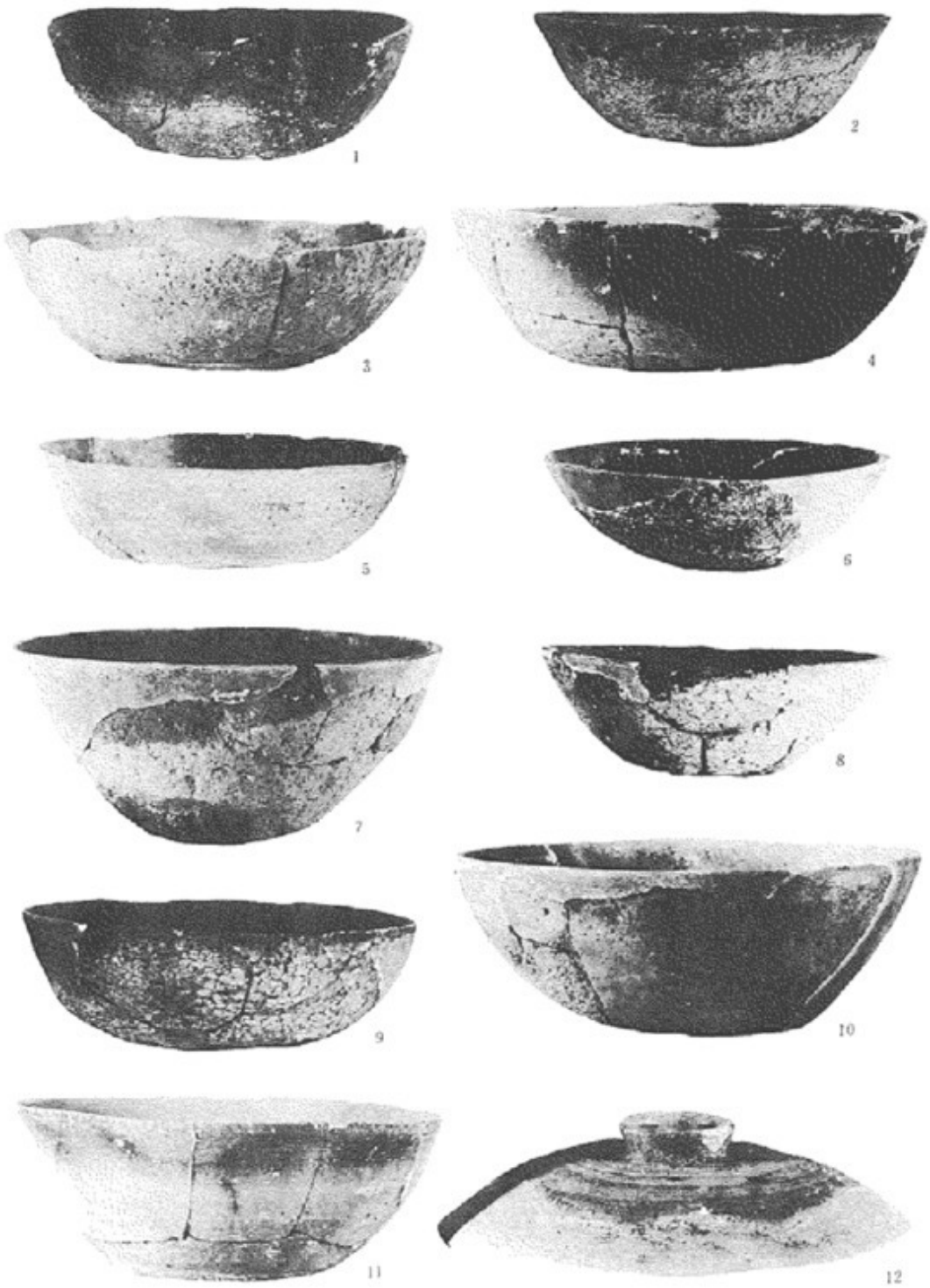
図版３

暗渠排水遺構
（削剥から）

同
（I－21K）

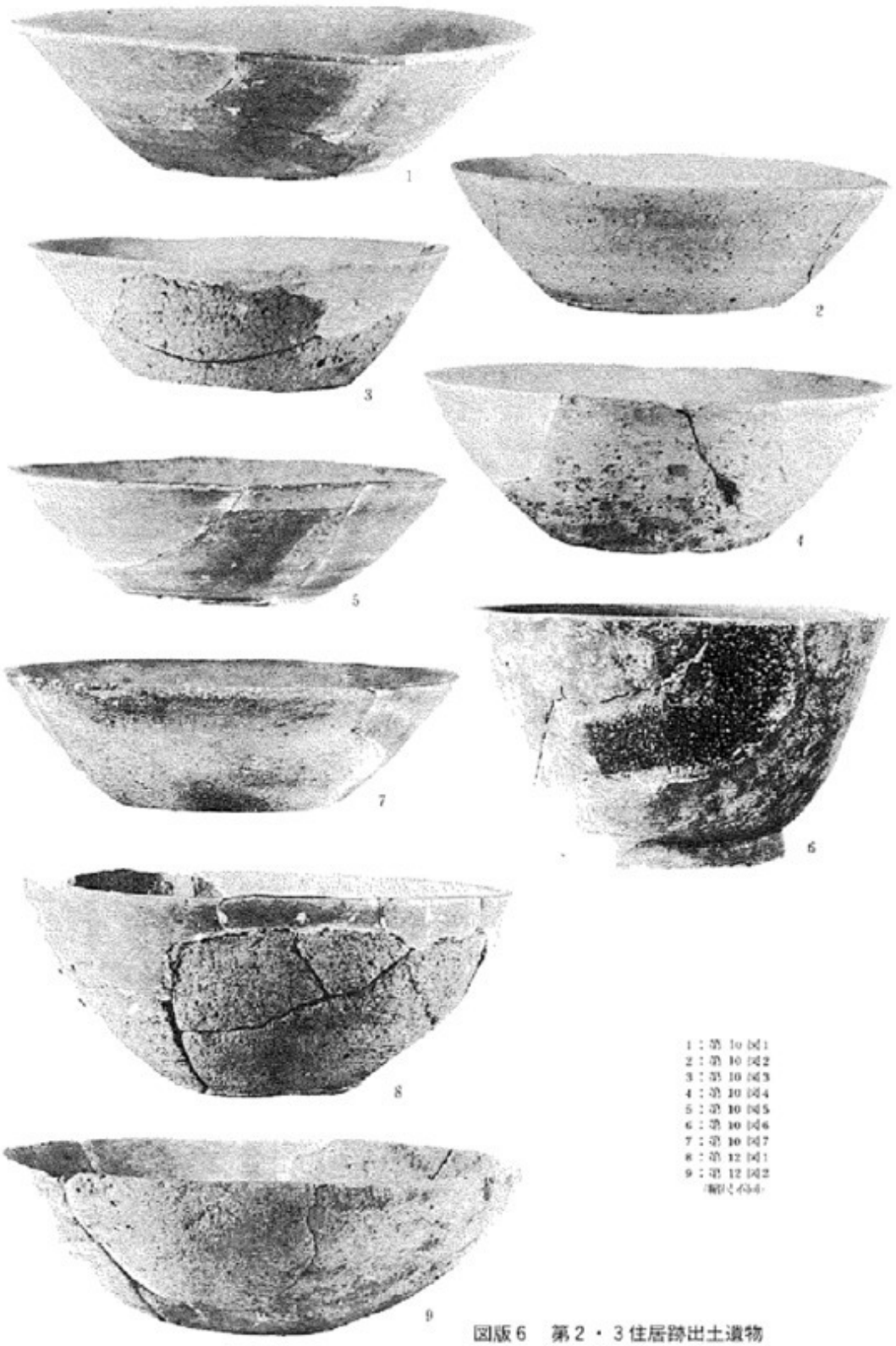
同
（J・K－21K）

図版 4



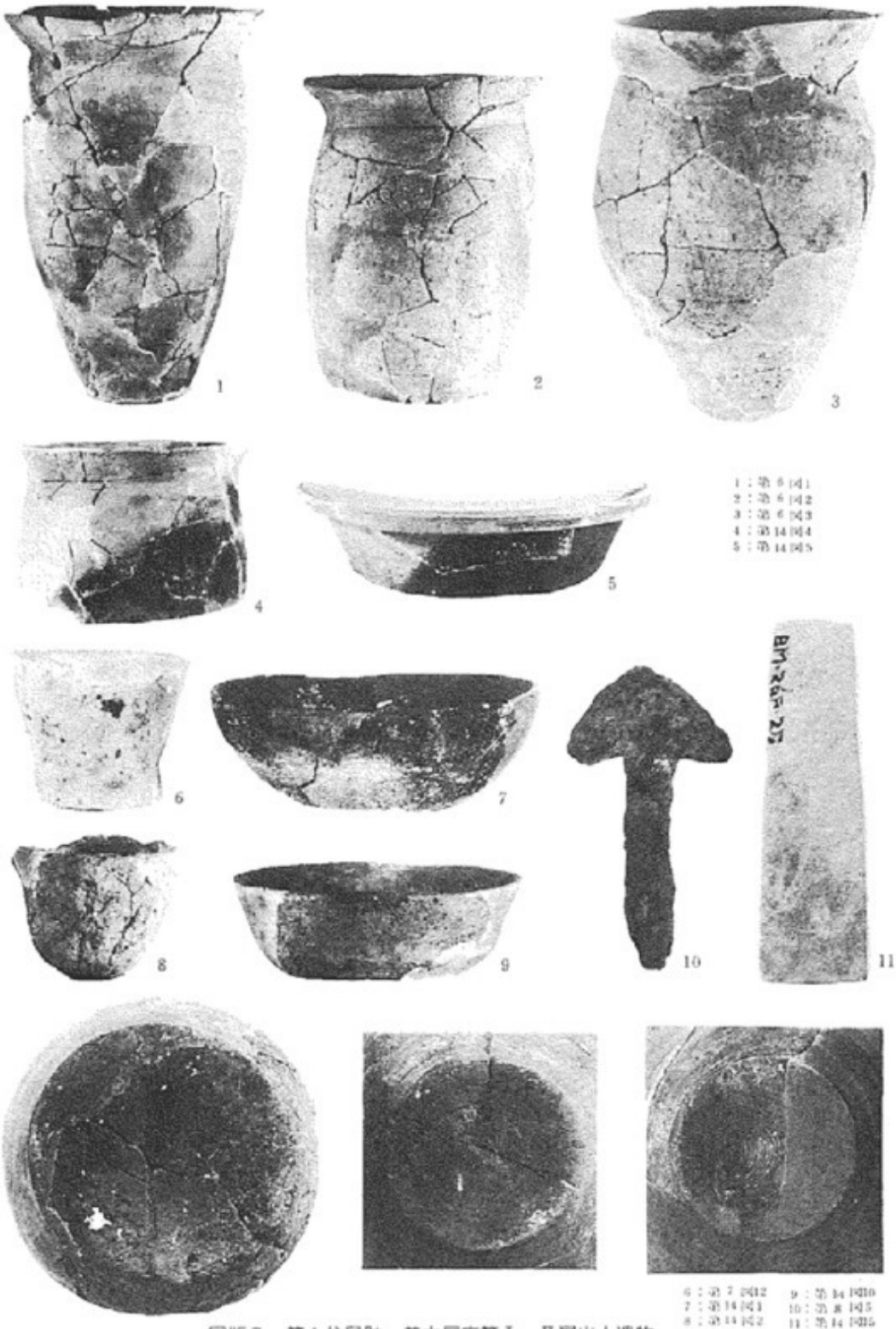
1：第7図1
2：第7図2
3：第7図3
4：第7図4
5：第7図5
6：第7図6
7：第7図7
8：第7図8
9：第7図9
10：第7図10
11：第8図1
12：第8図2
（縮尺4/5）

図版5　第1住居跡出土遺物



1：第 1o 図1
2：第 10 図2
3：第 10 図3
4：第 10 図4
5：第 10 図5
6：第 10 図6
7：第 10 図7
8：第 12 図1
9：第 12 図2
（縮尺不同）

図版6　第2・3住居跡出土遺物



1：第6図1
2：第6図2
3：第6図3
4：第14図4
5：第14図5

6：第7図12
7：第14図1
8：第14図2
9：第14図10
10：第8図5
11：第14図15

図版7　第1住居跡　基本層序第Ⅰ・Ⅱ層出土遺物